

名古屋城調査研究センター 年報6
令和6年度

2025

名古屋城調査研究センター

目次

I	調査研究事業
1	発掘・試掘調査
	(1) 辰之口・南波渡場発掘調査	
	(2) 二之丸庭園第12次発掘調査	
	(3) 多目的施設建設予定地試掘調査	
2	その他調査
	(1) 二之丸地区レーダー探査	
	(2) 二之丸庭園石造物調査	
	(3) 石垣カルテの作成	
	(4) 名古屋城内石垣現況調査	
3	工事立会
	(1) 本丸搦手馬出周辺石垣修復工事	
	(2) 二之丸庭園修復整備工事	
	(3) 西の丸御蔵城宝館外構整備	
4	資料調査(文書典籍・美術工芸)
5	デジタル化事業
	(1) 名古屋城史跡管理システム	
	(2) 名古屋城関係資料データベース	
6	計画策定
	(1) 重要文化財建造物等保存活用計画の策定	
	(2) 石垣の保存方針の策定	
II	資料管理
1	所蔵資料・受託資料の概要
	(1) 所蔵資料	
	(2) 令和6年度購入資料	
	(3) 令和6年度受贈資料	
	(4) 令和6年度受託資料	
	(5) 令和6年度受贈・購入図書	
2	資料の修理
	(1) 名古屋城本丸御殿障壁画保存修理事業	
	(2) 「中国宮廷・当世遊楽図屏風」修理	
	(3) 銅鯨 修理	
3	資料の利用

- (1) 資料貸出
- (2) 写真貸出
- (3) 熟覧

III 展示事業

- 1 西の丸御蔵城宝館 展示室
- (1) 企画展「名古屋城本丸御殿障壁画と復元模写」
 - (2) 名古屋城振興協会所蔵品展「武具・甲冑」
 - (3) 企画展「文化財を伝える」
 - (4) 企画展「名古屋城と名古屋まつり」
 - (5) 特別展「名古屋城と相応寺一家康を愛した女性 相応院の眠る寺」
 - (6) 企画展「名品でたどる名古屋城史 創建・戦災・そして明日」
- 2 西の丸御蔵城宝館 情報ルーム
- (1) 発掘された名古屋城焼損金具展
 - (2) 名古屋城のタタキ(三和土・敲き)展
 - (3) 八雲木彫熊展示
 - (4) 加賀孝一郎画油絵展示

IV 教育普及

- 1 刊行物
- (1) 国秘録 御天守御修復留[名古屋城調査研究報告 11 名古屋城史料叢書 3]
 - (2) 十七世紀の名古屋城一之丸のすがたをさぐる一[名古屋城調査研究報告 12 資料調査研究報告書 2]
 - (3) 特別史跡名古屋城跡 本丸搦手馬出発掘調査報告書一境門地点の調査一[名古屋城調査研究報告 13 埋蔵文化財調査報告書 8]
 - (4) 特別史跡名古屋城跡 本丸表二之門発掘調査報告書一雁木復元整備検討に係る調査(第 3 次調査)一[名古屋城調査研究報告 14 埋蔵文化財調査報告書 9]
 - (5) 特別史跡名古屋城跡 天守台石垣調査報告書[名古屋城調査研究報告 15]
 - (6) 特別展「名古屋城と相応寺一家康を愛した女性 相応院の眠る寺」リーフレット
 - (7) 名古屋城石垣ガイドブック
 - (8) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第 6 号
 - (9) 名古屋城調査研究センター年報 令和 5 年度
 - (10) 名古屋城調査研究センターだより 第 6 号
 - (11) 特別史跡名古屋城跡 西之丸の米蔵
- 2 シンポジウム・イベント
- (1) 名古屋城南波渡場発掘調査現地説明会

	(2) 名古屋城石垣特別ガイドツアー&石垣拓本体験	
	(3) 名古屋城調査研究センターシンポジウム4 十七世紀の名古屋城―二之丸のすがたをさぐる―	
3	講師派遣
V	組織と職員
VI	参考資料
1	名古屋城の活動
	(1) 催事等	
	(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	
2	入場者の推移

I 調査研究事業

1 発掘・試掘調査

(1) 辰之口・南波渡場発掘調査

調査期間 令和6年(2024)6月18日(火)～9月10日(火)

調査地区 水堀

調査面積 160 m²

調査目的 水堀活用のための発掘調査

調査担当 高橋圭也、岡千明

調査概要

調査は名古屋城の水堀のうち、水堀の排水施設である辰之口と二之丸から下御深井御庭へ渡るための波渡場の2箇所(図1)で実施した。前者を辰之口調査区、後者を南波渡場調査区とした。

辰之口調査区では調査区一帯にタタキ製の護岸を確認した(図2)。『金城温古録』には辰之口に「南蛮たいき」が使われていたと書かれているが、本遺構は下層の遺物や遺構の構造から明治20年(1887)以降の構築と考えられる。タタキ製護岸の下層から質の違うタタキを確認したが面的な広がりを確認することができず、遺構として「南蛮たいき」を確認することができなかった。

南波渡場調査区では以前から地表に露出していた石組(石列③、④)より南側で石列①、②を新たに確認した(図3)。また、石列③と④の直下から石列の根固めと考えられる礎敷きを確認した。礎敷きは石列③と④にまたがって確認できることから石列③と④は同一の遺構で、階段状に南に上りながら水堀から空堀へ移行すると考えられる。

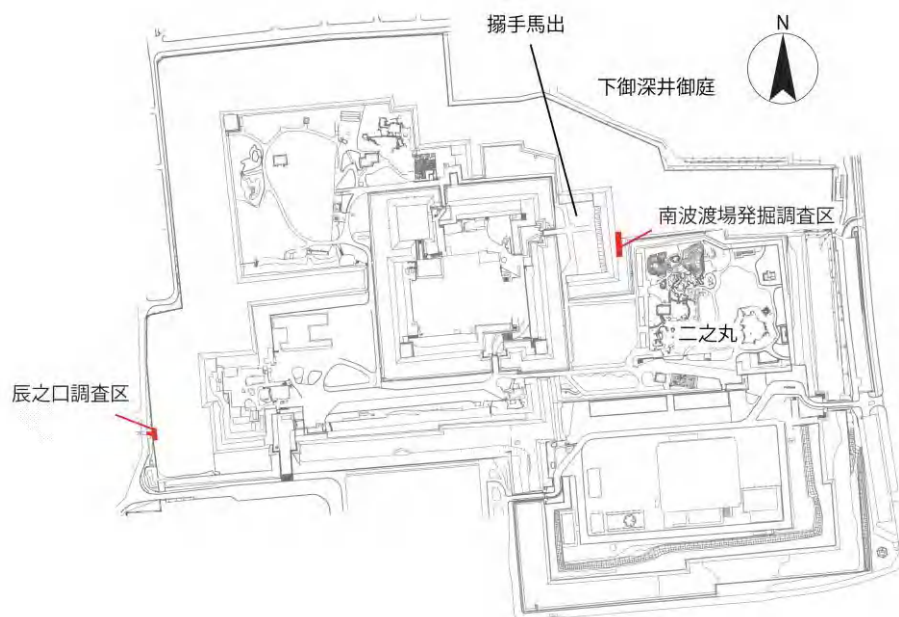


図1 調査区位置



図2 辰之口調査区

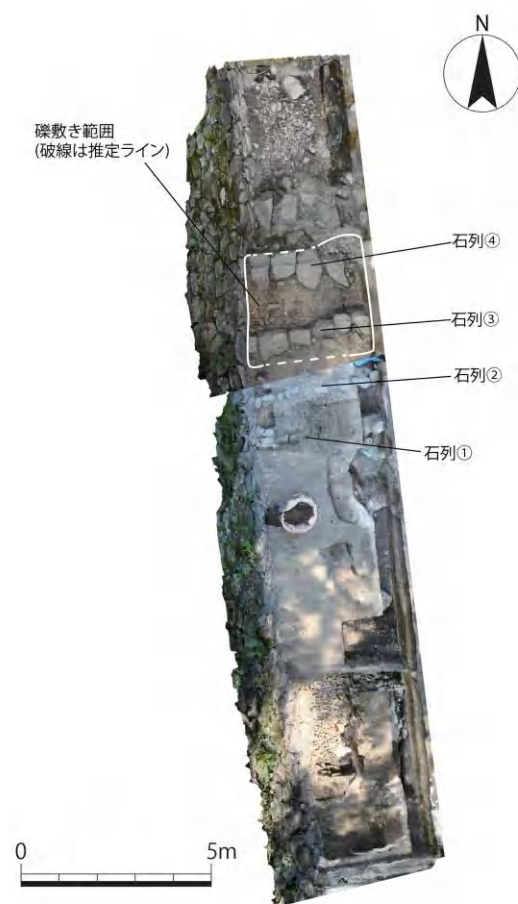


図3 南波渡場調査区

(2) 二之丸庭園第12次発掘調査

調査期間 令和7年(2025)1月14日(火)～2月21日(金)

調査地区 名勝名古屋城二之丸庭園 北池

調査面積 48 m²

調査目的 名勝名古屋城二之丸庭園保存整備に伴う発掘調査

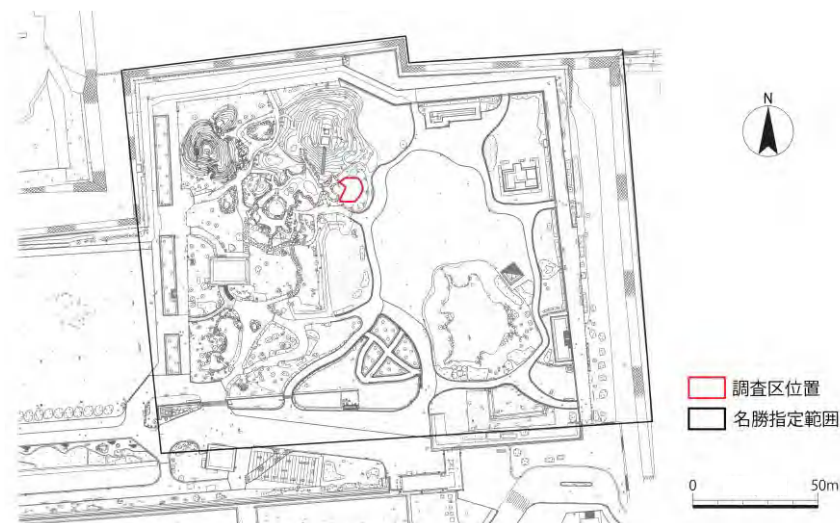
調査担当 高橋圭也、二橋慶太郎

調査概要

名勝名古屋城二之丸庭園北池の整備に際し、北池北東側の遺構の残存状況や新旧関係に不明な点があったため、発掘調査を実施した。当該地は名城公園旧二之丸試掘調査、名古屋城二之丸庭園1977年度発掘調査、名勝名古屋城二之丸庭園第2次、第4次、第10次の計5回調査が行われているが、整備に必要な情報が不足していた。

調査の結果、現存する北池に接続するタタキ製のテラスを確認した。また、テラス上に施工された礫敷、現存する北池に先行する池、池の両岸に存在する石製の橋台とそれに先行すると考えられる敷石を確認した。本調査区は全て既掘範囲であったため、覆土情報を得ることができなかったが、遺構に含まれている遺物や文献資料から礫敷は明治6年(1873)～明治15年(1882)までに構築された可能性が高いことが

分かった。現存する北池とそれに先行する北池の構築年代は明らかにできなかった。また、北池護岸との取り付きから現存する北池と橋台に先行する敷石は併存していた時期があることがわかった。



調査区位置図



北池、テラス、北池に先行する池



石製の橋台、石製の橋台に先行する敷石

(3) 多目的施設建設予定地試掘調査

調査期間 令和6年(2024)7月1日(月)～7月31日(水)

調査地区 三の丸地区

調査面積 40 m²

調査目的 金シャチ横丁第二期整備(多目的休憩所建設)に伴う事前調査

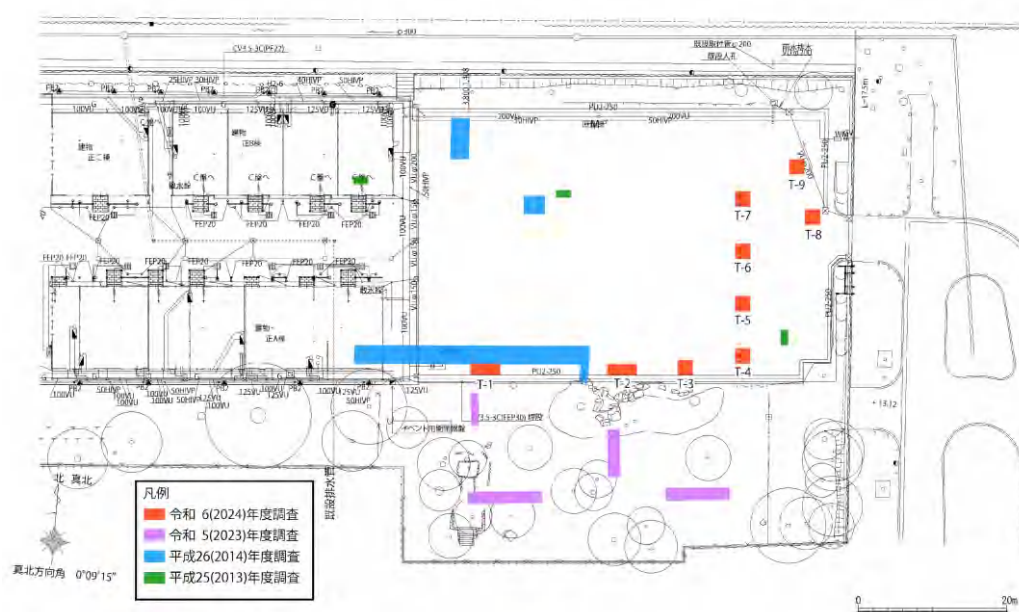
調査担当 大村陸、二橋慶太郎

調査概要

名古屋城正門(榎多門)の南側は金シャチ横丁第一期整備として飲食施設等が整備されており(義直ゾーン)、その西側が第二期整備の計画区域となっている。本調査は多目的休憩所を建設する際の掘削箇所に遺構が残存していないかを事前に確認する目的で実施した。調査地点は名古屋城の築城以前から江戸時代を通して天王社が位置しており、明治20年(1887)からは旧陸軍第三師団の敷地となり旅団司令部などが

置かれた。戦後は昭和 46 年(1971)に愛知県婦人文化会館が建ち、地上 3 階地下 1 階建てで地下にはプールが設けられた大規模な施設であった。平成 16 年(2004)には県婦人文化会館跡地に名古屋市が名城公園宿泊所(緊急一時宿泊施設)を開設し、平成 26 年(2014)に閉所、現在は更地としてイベント等で活用されている。また、金シャチ横丁第一期整備の事前調査として、平成 25・26 年(2013・2014)に本調査地点にも調査区が設定されて試掘調査が行われており、令和 5 年(2023)には本調査地点南側で試掘調査を実施した。

調査区は 9 箇所設定し、調査面積は計 40 m²であった。調査の結果、全ての調査区で地表より約 1.5m～1.8m まで近現代の盛土が堆積し、近代以前の遺構が残存しないことを確認した。今回の調査では最も深い箇所でも約 1.8m までしか掘削できなかったが、平成 25・26 年(2013・2014)の試掘調査では深さ 2.7m まで掘削して近現代の盛土が下に続くことを確認している。ほとんどの箇所でも近現代の盛土が厚く堆積していることから、愛知県婦人文化会館の建設時に大きくかく乱を受けていると考えられる。T-9 では地表より約 1.8m の深さで熱田層の地山を確認したが、遺構は確認できなかった。



調査位置図



T-1 完掘状況(北東より)



T-2 完掘状況(北東より)



T-6 完掘状況(南より)



T-9 完掘状況(南より)

2 その他調査

(1) 二之丸地区レーダー探査

調査期間 令和7年(2025)1月27日(月)～1月31日(金)

調査地区 特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)南側 愛知県体育館周辺

調査面積 3,225 m²

調査担当 高橋圭也

調査概要

令和元年(2019)11月に二之丸西鉄門東側にて近世～近代と推定される暗渠が原因とみられる陥没が発生した。この暗渠の広がり及び他の遺構の残存状況を明らかにするためにレーダー探査を実施した。レーダー探査の結果、陥没箇所周辺はかく乱が原因とみられるノイズが多く、暗渠の広がりを確認することはできなかった。

地表から約1m下層で近代の建物およびそれに伴う溝とみられる反応を確認することができた。米軍航空写真等各種資料を照らし合わせた結果、歩兵第六連隊本部の基礎とそれに伴う溝が残存している可能性が判明した。

(2) 二之丸庭園石造物調査

調査期間 令和6年(2024)9月30日(月)～10月31日(金)

調査対象 名勝二之丸庭園北池東の景石、石灯籠1基

調査担当 高橋圭也

調査概要

名勝二之丸庭園を西、東、北池に便宜的に区分し、西にて景石鑑定を行った。景石に対して肉眼観察と計測を行い、景石の石種、大きさ、産地などを景石カードに記載した。景石カードは1石に対して1枚作成した。また、平面図に石種ごとに色分けを行った石種分布図を作成した。今年度は二之丸庭園南池及び発掘調査出土景石を対象に調査を行った。南池では角礫岩を多く確認できた。調査以前は角礫岩を将校集会

所周辺で集中して確認していたため、近代に陸軍が設置した景石と考えられていたが、近代の早い段階で埋没した南池で確認できたことから近世に配石された可能性が高い。しかし南池の角礫岩と将校集会所周辺の角礫岩は包有物が異なっているため、一概に角礫岩＝近世の景石と断定することはできない。また、過去2年間の調査成果を総合すると北池は結晶片岩(桃取石)が目立つ一方で、南池から結晶片岩(桃取石)を確認することができなかった。南池は角礫岩主体の庭園であり、北池は結晶片岩(桃取石)主体の庭園であるというおおよその傾向をつかむことができた。

灯籠は先行研究¹のとおり由来は建中寺で、灯籠の銘文から2代藩主徳川光友を弔うために建中寺へ寄贈されたものであることが分かった。

¹ 大村陸 2023『《資料紹介》御深井丸茶席庭園の石造物』『名古屋城調査研究センター研究紀要』4,pp89-102

(3) 石垣カルテの作成

調査期間 令和6年(2024)11月8日(金)～令和7年(2025)3月31日(月)

石垣カルテ作成面積 1,711㎡(計23面)

オルソ画像作成面積 4,714㎡(計56面)

調査目的 特別史跡範囲内の石垣の基礎的情報(長さ・高さ・勾配・積み方など)を収集し、健全性を調査するもの。

調査担当 二橋慶太郎、村上慶介

調査概要

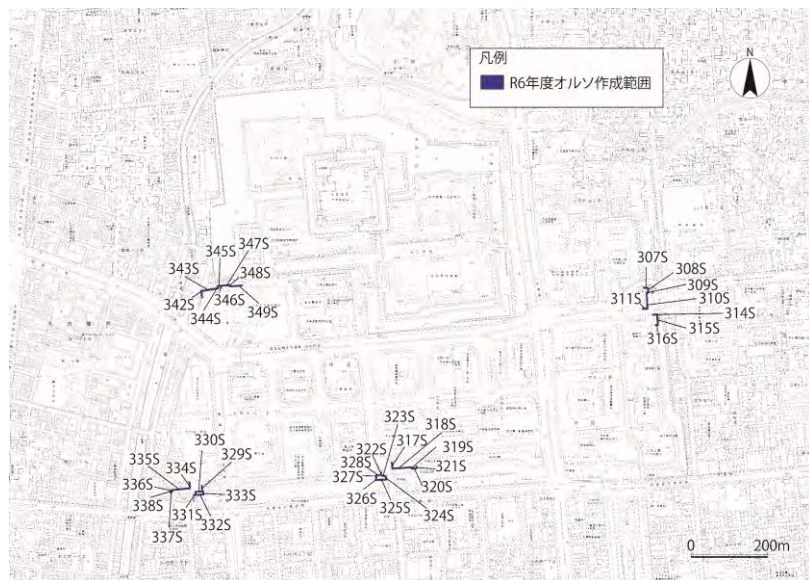
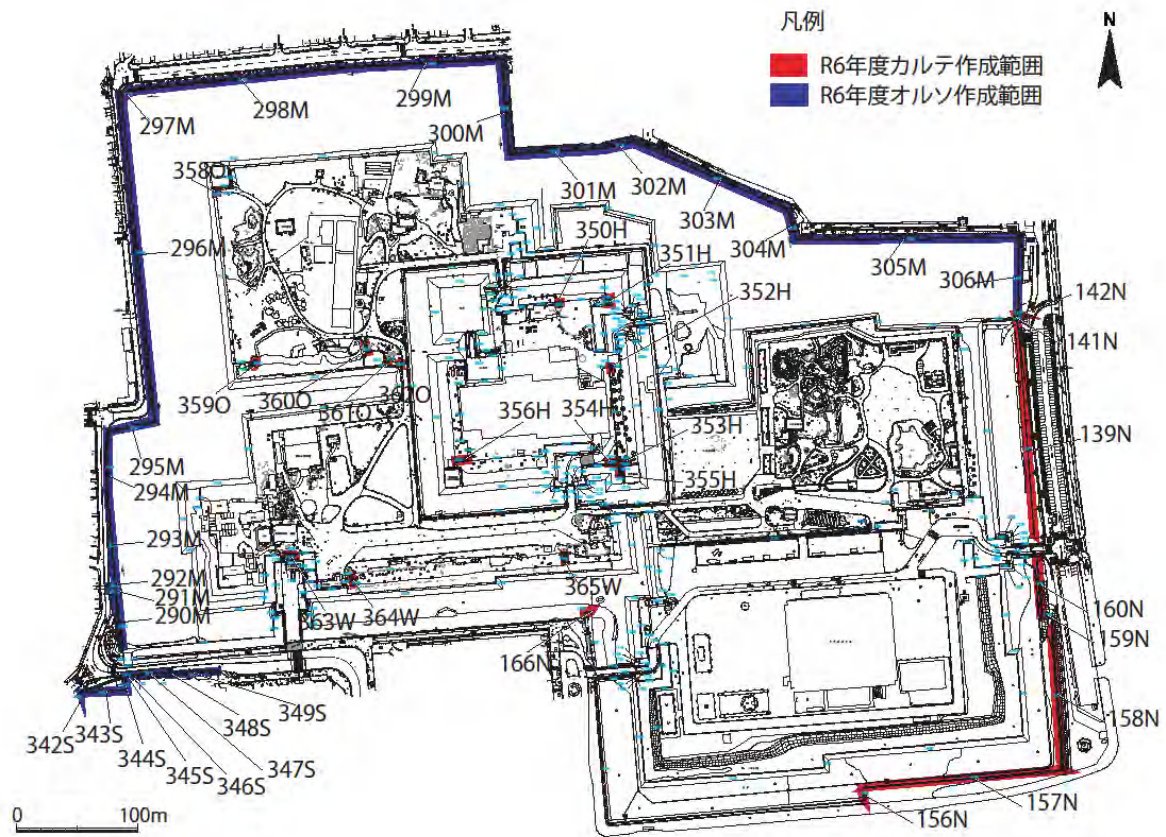
名古屋城跡内石垣の保存、整備の一環として、石垣カルテの作成を行った。名古屋城跡内の石垣カルテは平成29年(2017)度から実施、令和6年(2024)度で8年目となる。今年度は石垣オルソ画像作成、カルテ作成を行った。

オルソ画像作成は、三之丸の各所に所在する石垣、水堀沿いの現代擁壁を対象に実施した。作成に際してはデジタルカメラによる石垣の写真撮影を行ったが、水堀や高石垣など、接近が困難な個所についてはドローンにより撮影した。

カルテ作成は、城内の雁木、階段、二之丸外堀石垣の一部を対象に実施した。今回の調査範囲内において顕著な変状は見られなかったが、二之丸外堀の南面、東面の一部において石垣面の膨らみが認められた。各石垣は直ちに崩落するような状況ではないが、今後も継続して観察を行う。



二之丸外堀南側における石垣面の膨らみ(157N)



令和6年(2024)度石垣カルテ、オルソ画像作成範囲(三之丸)

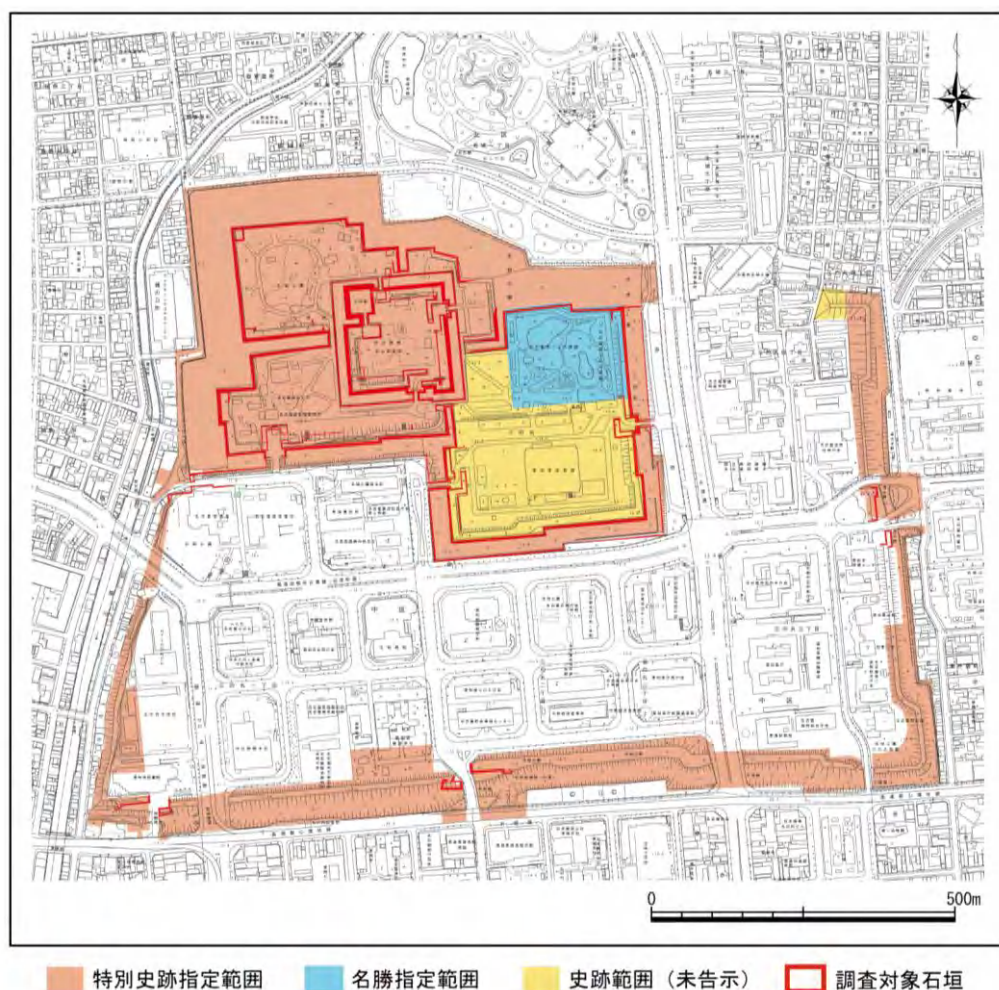
(4) 名古屋城内石垣現況調査

調査期間	令和6年(2024)4月1日(月)～令和7年(2025)3月31日(月)
調査地区	本丸・二之丸・西之丸・御深井丸・三之丸地区(特別史跡範囲内)
調査面積	約67,300㎡(365面、搦手馬出解体範囲を除く)
調査目的	日常点検として石垣に大きなき損や変状がないか確認し、現状を記録するため
調査担当	瀬川貴文、酒井将史、二橋慶太郎、濱崎健、高橋圭也、大村陸、村上慶介、岡千明、大西健吾
調査概要	

名古屋城跡内における石垣管理の一環として、特別史跡範囲内石垣の現況確認調査を行った。

調査は名古屋城調査研究センターの考古担当学芸員が分担し、担当の石垣を半年に1回の頻度で通年観察した。調査にあたっては石垣石材の落下など、石垣に大きなき損や変状がないかを確認し、写真撮影による記録を行った。

通年による調査の結果、石垣に大きなき損や変状は確認されなかったものの、一部の石垣では間詰石の落下が確認された。今後も継続して調査を実施し、石垣の保全に努めていく。



調査対象石垣位置図

3 工事立会

(1) 本丸搦手馬出周辺石垣修復工事

工事期間 令和6年(2024)4月1日(月)～令和7年(2025)3月31日(月)(令和8年(2026)度末までを予定)

工事地区 本丸搦手馬出

事業面積 約6,000㎡

工事原因 崩落の危険性がある石垣の修復

立会担当 村上慶介、大西健吾、酒井将史

立会結果

本丸搦手馬出では、経年に伴う石垣面の変状により崩落の危険のある箇所に対する石垣解体・修復工事を平成14年(2002)度から継続的に行っている。令和3年(2021)度までに石垣の解体・関連調査検討を完了し、令和4年(2022)度から積み直しを開始、今年度末までに約2,500石の積み直しを完了した。

本センターは、主に文化財の専門的な立場から修復工事に際して、石垣石材や遺構などが適切に扱われるよう注意を払って立会に当たった。

今年度の特記事項としては、通常の築石・裏込め・盛土修復とは別に、北側石垣面中ほどに吐水口があり石垣内を南北方向に通っていた石組暗渠排水溝遺構の復元を行った。復元暗渠排水溝内には塩ビ管を設置し、石垣上面からの排水機能を回復させた。

その他、7月26日(金)に「なつやすみ！子ども石垣教室」、11月23日(土)に「石垣修復工事市民説明会」を開催し、修復現場の公開・江戸時代の石積み技術の体験イベントなどを行った。また、二之丸庭園と名城公園の修復現場を見渡せる場所に工事説明板を設置し、市民・来城者への周知活動を行った。

立会写真



積み直し全景(東から)



石組暗渠排水溝遺構復元(北西から)



来城者への工事説明板設置(二之丸・名城公園)



なつやすみ！子ども石垣教室(石割体験)

(2) 二之丸庭園修復整備工事

工事期間	令和6年(2024)10月21日(月)～令和7年(2025)3月21日(金)
工事地区	二之丸(北)二之丸庭園
事業面積	—
工事原因	名勝名古屋城二之丸庭園修復整備工事(北池護岸と景石の修復)
立会担当	高橋圭也
立会結果	

タタキ製の北池護岸と護岸上に配石された景石の一部は傾倒し不安定な状態になっている。その中でも崩壊の危険性が高い護岸及び景石に対して修復を行った。修復整備は名古屋城総合事務所保存整備課が実施し、名古屋城調査研究センターが立会を行った。修復に際し、現状と背面土の記録、傾倒原因の推測、原位置推定に関する助言を行った。護岸及び景石背面土を掘削する必要が生じた際は流入土及び樹木の生長等によって押し出された土のみの掘削にとどめた。なお、掘削は委託業者の補助を受けて名古屋城調査研究センターが行った。修復の際は傾倒したタタキ及び景石は原位置を推定して戻した。一部では周囲の景石やタタキ等の庭園構成遺構が傾倒しているため、原位置に戻せなかった護岸があるが、庭園の景観に配慮して周囲と不自然な取り合わせにならないように再配置した。

背面土を広く掘削した箇所については分層及び立面図の作成を行った(図1～図2)。立面図の作成を行った6箇所のうちSP1-1'とSP6-6'を除く4箇所で樹木根を確認したことから、樹木の根によって護岸が押し出されて傾倒していたと考えられる。SP1-1'では護岸が上部に位置する景石に押し出されて傾倒した様子を確認した。景石は樹木の根によって押し出され原位置から動いていたため、検出した背面では樹木の根を確認できなかったが、原因は樹木の生長と考えられる。SP6-6'は護岸が土砂によって押し出されて傾倒していた。背面土から幅50cm×高さ50cmの掘り込みを確認した。周辺の発掘調査結果から掘り込みは景石の掘方と考えられている。傾倒は景石による影響もしくは景石が失われたことによる影響と考えられる。

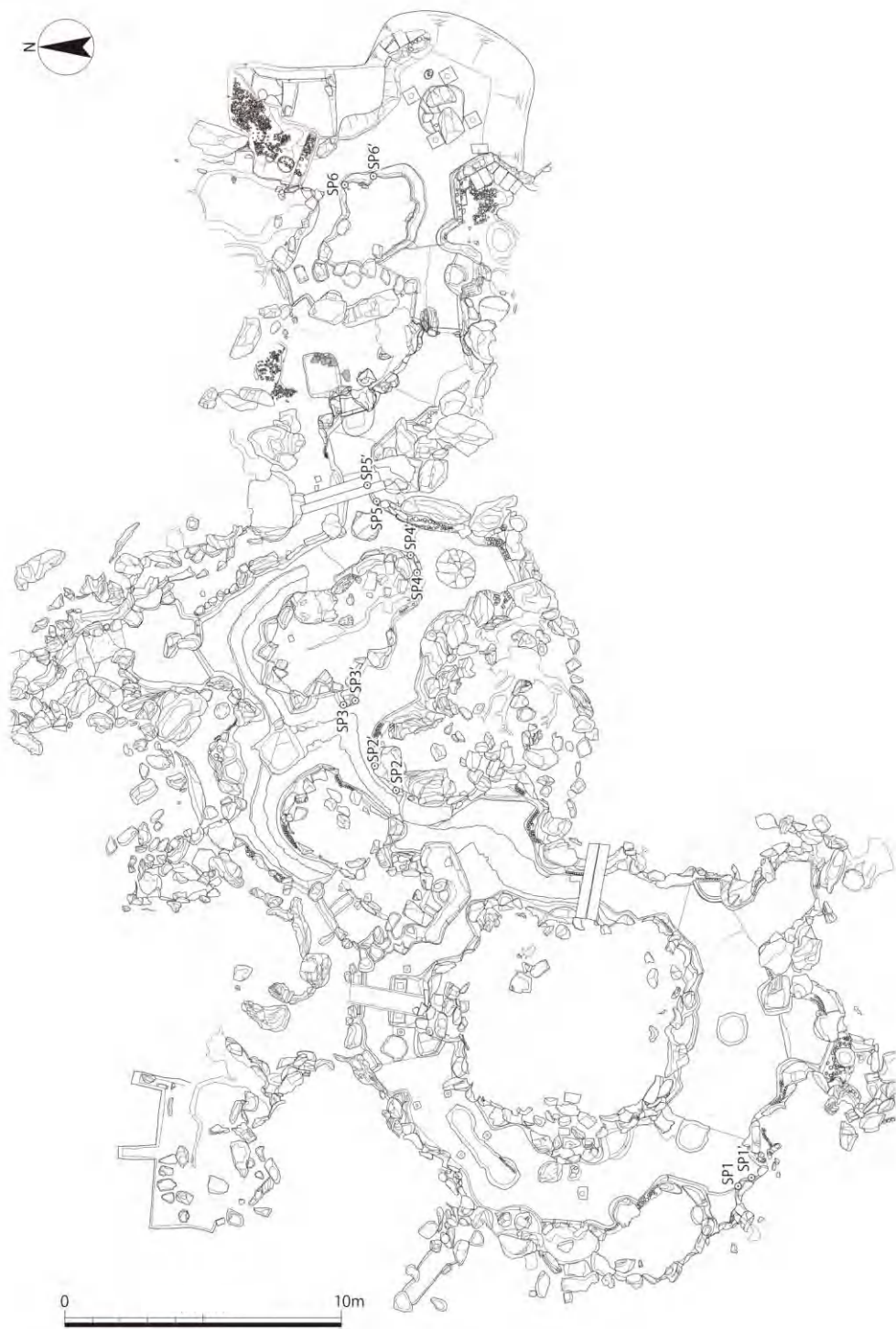


图 1 断面图取得位置

単位(m)

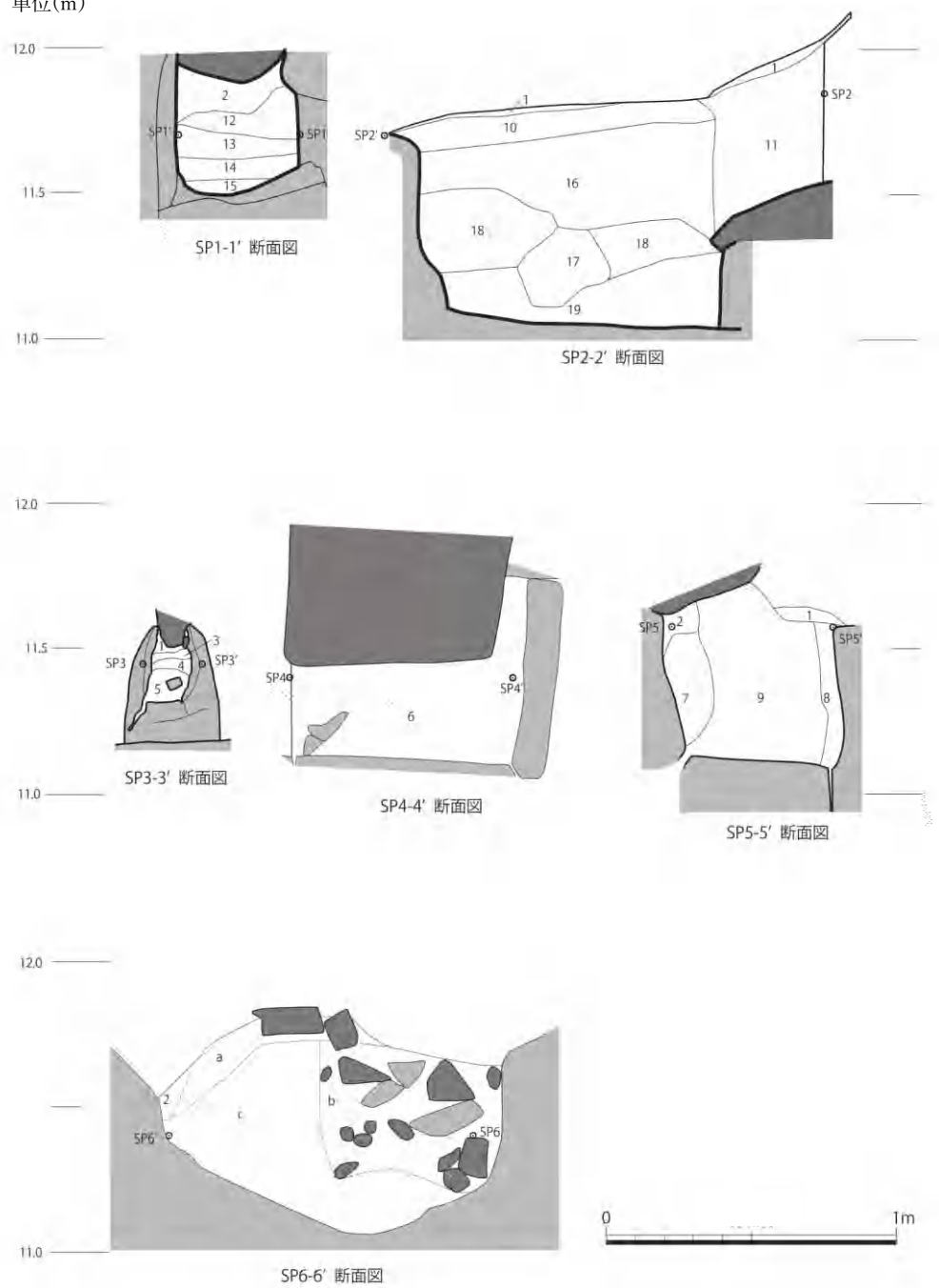


図2 立会調査 土層断面図

- 1 銅土
 - 2 にぶい橙色(7.5YR7/4)粘質土 しまり強い 粘性あり にぶい褐色・橙粘質ブロックを含む
 - 3 褐灰色(10YR5/1)粘質土 しまりなし 粘性やや強い
 - 4 -
 - 5 褐灰色(10YR6/1)粘質土 粘性やや強い
 - 6 暗褐色(10YR3/4)粘質土 しまりあり 粘性やや強い 黄褐色粘土・灰褐色粘土を少量含む
根かく乱による空洞が多い 褐色と黄褐色のタタキ片含む(義直タタキか)
 - 7 灰褐色(10R5/1)細粒砂 しまりなし 粘性低い
 - 8 灰褐色(10R4/1)細粒砂 しまりあり 粘性あり
 - 9 灰黄褐色(10R6/2)細粒砂 しまりあり 粘性あり 部分的に明るいブロック土が入る
 - 10 暗褐色(7.5YR3/4) しまりややあり 粘性低い 稀に灰白粘土ブロックを含む
 - 11 暗褐色(2.5YR4/4)シルト質 しまりややあり 粘性弱い 44由来の黄褐・灰白ブロックをやや含む
瓦片・結晶片岩チップ・砂岩チップを含む(景石掘方)
 - 12 にぶい黄褐色(10YR7/3)粘質土 しまり強い 粘性あり 直径約5cmの黄橙砂質ブロックを含む
 - 13 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土 しまり強い 粘性強い 下部に粘性が強くしまりが強い黄橙色(10YR7/6)のブロックが帯状に入る
 - 14 明黄褐色(2.5YR7/6)シルト質 しまりやや強い 浅黄シルト質から砂質ブロックがまだらに入る 灰褐色ブロック含む
 - 15 明黄褐色(2.5YR8/6)シルト質 しまりあり 粘性低い 1mm程度の黄ブロック稀に入る
 - 16 褐色(7.5YR4/4) しまりあり 粘性やや強い 5~10cm大の灰褐粘ブロックを含む
 - 17 黄褐色(10YR5/8) しまりあり 粘性やや強い 5~10cm大の灰褐・暗褐・灰白粘土ブロックを含む(袋状の土坑か)
 - 18 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質 しまりあり 粘性弱い 地山由来の土中の少量の黒色ブロックを含む
 - 19 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質 しまりあり 粘性弱い 地山
- a 明黄褐(10YR7/6) 山砂
b 灰黄褐(10YR4/2) 32層をまばらに含む しまりなし 粘性弱い
c 明褐(10YR3/4) 粘質土 しまりあり 粘性あり 均質な土 黄橙砂質ブロックをまれに含む



SP1-1'



SP2-2'



SP4-4'



SP5-5'



SP5-5' 傾倒護岸



SP6-6' 傾倒護岸 取り外し状況

(3) 西の丸御蔵城宝館外構整備

工事期間 令和6年(2024)6月20日(木)～令和7年(2025)3月31日(月)

工事地区 西之丸

事業面積 約6,500 m²

工事原因 史跡整備

立会担当 濱崎健、大西健吾、酒井将史

立会結果

西之丸に存在した六棟(一番御蔵～六番御蔵)の米蔵のうち、三番御蔵と四番御蔵については、令和3年(2021)より外観を再現した展示収蔵施設(西の丸御蔵城宝館)として開館している。しかし、その外構については未整備であったため、発掘調査等の成果に基づき整備を実施した。

一番御蔵・二番御蔵・五番御蔵は、発掘調査・文献資料・絵図等から、蔵の位置を平面に表示した。六番御蔵は発掘調査により礎石や地覆石の一部が検出されたため、それらを再現して現地に表示した。また、一番御蔵と二番御蔵の間には、調査成果をもとにして、門の礎石や水道(水路)を表示した。整備は検出遺構の上に保護層を設けた上で施工した。



整備後平面図



六番御蔵の石材据え付け



土系舗装の施工

4 資料調査（文書典籍・美術工芸）

令和6年(2024)度も引き続き、調査研究センターが発足した令和元年度より継続的に収集してきた名古屋城関連の文献・史料の内、公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所(東京都豊島区)が所蔵する歴代藩主の名古屋城巡覧記録である『国秘録 御天守御修復留』3冊を翻刻の上、解題を付して『名古屋城史料叢書3』として刊行した。文献・史料収集は継続して実施し、13件の名古屋城関連資料を複写・収納した。

名古屋城総合整備事業に基づく発掘調査で、令和5年(2023)度に実施した天守台・本丸表二之門・西之丸御蔵構での発掘調査において、発掘の裏付け・補完を行う文献調査を実施した。その成果の一部は各報告書に反映した。

重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画修理事業並びに障壁画復元模写事業において、修理及び復元模写方針策定に関する助言・管理指導を行い、修理・復元模写が完了した案件については納品確認・保管措置を行った。令和3年(2021)度より継続して実施している織田信長関係染織品の修理については完成を確認し、本年度より新たに実施した名古屋市指定有形文化財「中国宮廷・当世遊楽図屏風」六曲一双の修理経過指導を行った他、名古屋城銅鯨・金鯨鱗片・焼損金具類の科学調査を実施し、成分・組成の解析を行った。

その他、昨年度に引き続き西の丸御蔵城宝館展示室において特別展2回(内1回は令和5年度より継続企画)・企画展4回・名古屋城振興協会所蔵品展1回を実施し、展示の裏付けとなる調査・検証を行った上で、初公開品を含む重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画を延べ208日間にわたって公開した。名古屋城振興協会所蔵品展「武具・甲冑」の実施に合わせて刊行した『名古屋城振興協会所蔵作品集 武具・甲冑』では編集協力を行い、特別展「名古屋城と相応寺—家康を愛した女性相応院の眠る寺」展では調査に基づき展示品リーフレットを編集・刊行した。

5 デジタル化事業

(1) 名古屋城史跡管理システム

概要

令和6年(2024)度は、発掘調査の調査区設定および城内における現状変更等に活用するため、特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置情報を下記の通り集成し、システムに登録した。

今後も、名古屋城内で実施された現状変更、発掘調査等について、情報の更新を進めていく。

登録情報

令和6年(2024)度 特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更(掘削を伴うものに限定)
位置全10件

(2) 名古屋城関係資料データベース

概要

名古屋城調査研究センターでは、令和元年度より名古屋城に関係する資料の高精細デジタル画像を検索・閲覧できる「名古屋城関係資料データベース」を導入した。現在は所内での調査研究事業に活用している。また、データベースの拡充を図るため、毎年継続的に名古屋城関連史料の高精細デジタル画像を作成し、データベースへの追加登録を行っている。

令和6年(2024)度は、徳川林政史研究所所蔵「名古屋城・名古屋城邸写真帳」、名古屋市博物館所蔵「御本丸御深井丸図」、名古屋市蓬左文庫所蔵「御天守御修覆留」など32件の資料の高精細デジタル画像(画像点数859点)をデータベースに登録し、画面上で原資料の閲覧ができるようにした。

6 計画策定

(1) 重要文化財建造物等保存活用計画の策定

概要

名古屋城では、西南隅櫓など3棟の隅櫓及び本丸表二之門など3棟の門が江戸時代から現存する建造物として重要文化財に指定されており、名古屋城の代表的文化財として、十分な調査研究を行い、適切に保存・活用していく必要がある。また、これらの建造物は経年的な劣化が進んでおり、早急に現況調査を行い、今後の修理方針を立てる必要がある。これらを目的として、重要文化財建造物等保存活用計画を策定する。令和5年(2023)度は基本調査を行い、令和6年(2024)度からは文化庁の国庫補助を受け、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議建造物部会にて検討を進めている。また、計画内でより具体的な修理方針を立てるため、計画策定と合わせて東南隅櫓及び西北隅櫓の耐震診断を実施している。

実施内容

重要文化財建造物等保存活用計画は、令和５年(2023)度の基本調査成果をもとにして「第１章 計画の概要」「第２章 保存管理計画」の内容から検討を開始した。下半期には「第３章 環境保全計画」の内容に着手した。計画の執筆を進めながら各種調査も実施した。

東南隅櫓及び西北隅櫓の耐震診断は、西北隅櫓付近での地盤調査と耐震診断に係る基本調査を実施した。西北隅櫓地盤調査は、構造解析に伴う地盤情報が不足していたため、西北隅櫓付近で深さ 80m のボーリング調査を１本実施し、標準貫入試験や弾性波速度検層(PS 検層)、各種土質試験を行った。また、耐震診断に係る基本調査は、構造解析のための図面作成を主として、現地調査や常時微動計測の調査を実施した。令和６年(2024)度における有識者会議での検討内容は以下の通りである。今後も継続して検討を進めていく。

有識者会議検討実績

開催日程				議 事
全体整備 検討会議	建造物 部会	石垣・ 埋文部会	日付	
第 61 回			8 月 7 日	西北隅櫓地盤調査
		第 62 回	9 月 17 日	西北隅櫓地盤調査
	第 35 回		9 月 18 日	保存活用計画(第 1 章 計画の概要・第 2 章 保存管理計画)、西北隅櫓地盤調査
第 62 回			10 月 11 日	西北隅櫓地盤調査
	第 36 回		1 月 31 日	保存活用計画(第 1・2 章の修正、第 3 章 環境保全計画)

(2) 石垣の保存方針の策定

名古屋市では、平成30年(2018)度に、特別史跡名古屋城跡を後世に確実に継承するとともに、一層の魅力向上を図るため『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』を策定した。本計画において、近世に築造された石垣を「本質的価値を構成する諸要素」と位置付け、石垣カルテを作成するとともに、それを踏まえて石垣の保全方針を定めることを示している。

上記の計画及び、天守台石垣及び天守台石垣周辺石垣の保存方針での検討も踏まえ、個別の石垣カルテの作成による現況把握と石垣評価の結果に基づき、石垣の保存と来場者等の安全確保の観点から、石垣の保存・管理方法について、基本的な考え方を整理し、優先度を設けて必要な対策を行うため方針を策定する。

令和６年(2024)度は策定開始から３か年目にあたる。昨年度は主に城内石垣の変状等に対する評価方法について石垣・埋蔵文化財部会で議論を行った。議論内容は下記のとおりである。

表 令和6年(2024)度 石垣の保存方針策定にかかる石垣・埋蔵文化財部会での議論一覧

日 程	回 次	内 容
令和6年5月31日(金)	第60回	石垣の安全性の評価項目、城内主要動線について
令和6年8月5日(月)	第61回	文化財石垣予備診断を踏まえた石垣の評価方法について
令和6年11月19日(火)	第63回	文化財石垣予備診断を踏まえた石垣の評価方法について
令和7年3月19日(水)	第65回	石垣の修復履歴の検討方法について

II 資料管理

1 所蔵資料・受託資料の概要

(1) 所蔵資料

①重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画(331面、附16面)

重要文化財 名古屋城本丸御殿天井板絵(331面、附369面) 計1,047点

②ガラス乾板写真 738枚

③昭和実測図 307枚

④その他(享元絵巻、金城温古録、木子コレクション、戦災資料、収集資料等)

(2) 令和6年度購入資料

該当資料なし。

(3) 令和6年度受贈資料

・朝見香城「名古屋城天守図」・宮田三郎「名古屋城天守版画」・宮戸松斎「岡山後楽園図」 3件3点

朝見香城(1890-1974)および宮田三郎(1924-2013)の名古屋城を主題とする絵画資料と離宮期に本丸御殿障壁画の修理に携わった宮戸松斎(1856-1906)の岡山城天守を借景とする絵画資料。

・名古屋観光協会発行絵葉書(西方より見たる名古屋城) 1件1点

昭和8年(1933)2月12日の拝観記念印がある名古屋城公開後に発行された着色写真絵葉書。御深井丸の西北方向から、大正・昭和両天皇の即位礼に関連して御深井丸に仮賢所があったことを示す石柱を挟んで天守西北面を写す。

・復元金鯢胴内銘板「鹽谷温作 漢詩」および「間組精神 微結」 2件2点

名古屋城天守金鯢が再建された昭和34年(1959)8月(竣工は同10月)に再建工事を担った間組(当時)により製作され、復元金鯢の胴内に入れられていた銘板。間組の神部満之助社長(当時)の知人で間組顧問の元東京帝国大学教授・漢学者の鹽谷温博士作の漢詩と間組精神標語を銘とする。サカエヒロバス等での展示のため、令和3年(2021)に金鯢を地上へ下した際に取り外された。

・名古屋城絵葉書 13件52点

「国宝建造物 恩賜名古屋城」(1件8枚組)など焼失前の名古屋城の様子を知ることができる絵葉書。すべて名古屋城総合事務所で未所蔵のもの。

・「名古屋城再建資料」および「模写・下絵類」 2件 524点

名古屋城本丸御殿の欄間彫刻修理にたずさわった細工職人である早瀬家に伝わった資料。早瀬家代々は彫り物師として活躍したほか、昭和30年代の名古屋城天守再建に名古屋市職員として関係した。

名古屋城天守再建時の建築過程の写真を含む「名古屋城再建資料」1件60点と代々の名古屋市内外の社寺の彫り物下絵と下絵の材料とするための古画模写などからなる「模写・下絵類」1件464点。

・「刀 銘 濃州住岩捲氏信 軍刀拵付」および「小刀 無銘」 2件 2点

陸軍軍人だった寄贈者の祖父・伯父が使用した美濃派刀剣と祖母の守り刀。氏信は美濃国揖斐に住した刀工で、室町時代中頃に作刀する。伝世品の少ない美濃派刀剣で、日露戦争・第二次世界大戦中国戦線において使用された。「銃砲刀剣類登録証」(2枚)、「刀剣鑑定葉書(封筒付)」(1通)、「研磨外装代領収書」(1通)、「銃砲刀剣類登録手数料領収書」(1通)が附属する。

・旧名古屋城多春園障壁画(8枚 16面) 1件 8点 16面

「四季草花図」(8面)と「桜図」(8面)が表裏に仕立てられた襖絵。多春園は江戸時代後期に名古屋城二之丸御庭にあった茶屋で、明治初年に名古屋城三之丸にあった御屋形に移築され、その後売却された。

「四季草花図」「桜図」とともに元は画題ごとに4面ずつ表裏に仕立てられていたが、明治以降に現在のように改装されたと考えられる。「四季草花図」は一橋徳川家の画家だった東梧斎寛令の落款がある。「桜図」は落款がなく、画風から2名の画家によって描かれたことが明らかで、框に梅山と彫られていることから、尾張の狩野派画家松野梅山が参加したことがわかる。制作年代は、文献類から文化10年(1813)から文政11年(1828)頃と考えられる。大名庭園内の建物の襖絵がまとまって現存する例は全国でもほとんどなく、きわめて貴重である。

・「炎上する名古屋城」(1945年5月14日、岩田一郎撮影)の複写画像 1件 3点

昭和20年(1945)5月14日の名古屋市北部市街地が対象となった空襲で焼失した名古屋城天守の炎上する様子を東海軍管区報道部軍属の岩田一郎氏が東海軍管区司令部作戦室の屋上から撮影した写真の複製画像「4×5モノクロネガ」、「6×7モノクロネガ」、「キャビネモノクロ紙焼き」各1枚。東海軍管区司令部は、第三師団司令部から昭和20年2月に改組された。

名古屋城総合事務所は、名古屋空襲を記録する会から本画像の提供を受け、同会の依頼により一定の条件のもとに本画像の貸出しを行ってきた。受贈により所蔵資料となったが、使用に当たってはこれまで通り岩田一郎氏の撮影になることと名古屋空襲を記録する会提供であることを明示する。

(4) 令和6年度受託資料

計14件(継続10件、新規4件)。

継続1件は年度中に寄贈となったため、令和7年(2025)3月31日における総件数は13件。

(5) 令和6年度受贈・購入図書

(単位：件)

	報告書	図録	紀要	年報	資料集	リーフレット	一般書籍等	合計
受贈	42	22	24	7	2	5	34	136
購入	1	0	0	0	11	0	25	37
合計	43	22	24	7	13	5	59	173

2 資料の修理

(1) 名古屋城本丸御殿障壁画保存修理事業

昭和61年(1986)からの文化庁補助による継続事業として、名古屋城本丸御殿障壁画・天井板絵計1,047面(実数は1,049面)の修理を行っている。

障壁画331面は、平成17年(2005)度に根本修理(解体修理)が完了したことを受け、平成27年(2015)度から名古屋城内で点検修理を実施している。天井板絵331面(附369面)は平成14年(2002)から根本修理(解体修理)を実施し、令和6年(2024)度で終了した。また、天井板絵は令和4年(2022)度から点検修理も行っている。今年度は引き続き折上部天井板絵(R天井板絵)の点検を行った。

R天井板絵の修理が最終段階に入ったことを受け、令和4年(2022)度の構造模型作成に引き続き、修理過程の記録映像を制作した。令和5年(2023)度および令和6年(2024)度に撮影した動画にナレーションや追加音声、字幕を加え、修理過程の全容を記録した1時間版、一般向けにわかりやすくまとめてウェブサイト等で公開する15分版の2本を制作した。

令和6年度修理画面 ①点検修理

作品名	場所	形状		面数
帝鑑図〔明弁詐書〕 77	上洛殿一之間北側	襖絵	紙本着色	4面
帝鑑図〔露台惜費〕 78	上洛殿上段之間南側	襖絵	紙本着色	4面
草花流水図 21	表書院二之間南側	障子腰貼付絵	紙本金地着色	6面
桜花雉子図 22	表書院一之間南側	障子腰貼付絵	紙本金地着色	6面
山水図 9	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
山水図 10	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
竹図 11	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
楼閣山水図 12	上洛殿上段之間	天井板絵 R	紙本着色	1面
合計				24面

令和 6 度修理画面 ②根本修理

作品名	場所	形状		面数
梅朧月図 134	上洛殿一之間	天井板絵 R 変形大	紙本墨画	1 面
七宝唐草文図 附 345～351	上洛殿三之間	天井板絵	紙本着色	7 面
花文図 附 352～369	上洛殿菊之廊下	天井板絵	紙本着色	18 面
合計				26 面

(2) 「中国宮廷・当世遊楽図屏風」修理

令和 6 年(2024)から 8 年(2026)の 3 か年にわたって抜本的修理を行う。本紙が下地から剥離し、折りたたみ部分が半ば裂傷するなど危険な状態であったため、顔料の剥落止めをしたうえで屏風を解体した。解体後は、顔料の剥落止めをしつつ本紙の肌裏紙等を除去する。肌裏紙等の除去は令和 7 年(2025)にかけて行う予定である。

(3) 銅鯨 修理

名古屋城が所蔵する銅鯨(旧江戸城銅鯨)10 点のうち、2 点に錆(緑青)の増加がみられるため、清掃・防錆措置を行った。あわせて、銅鯨全点の現状を調査し、必要に応じ防錆措置を行った。

錆の付着箇所には凹みが見られることから、銅鯨に発生した錆は塩基性塩化銅の一種であるバラタカマイト($\text{Cu}_2\text{Cl}(\text{OH})_3$)が原因と考えられる。バラタカマイトは銅錆の一種であるが一般的な緑青より不安定で、資料を粉状に破壊し、増殖すると資料に穴を開ける可能性がある。これ以上の浸食を防ぐため、付着した錆を薬剤で取り除き、保護コーティング剤で塗布して膜をつくる処置を行った。

なお、下記表④⑤の銅鯨は状態が良いため今回の修理対象から除いた。⑨⑩は、錆はあるがバラタカマイトが銅を浸食している状態ではないため、刷毛で表面の粉や埃を除去するのみとした。

	名称	員数	法量(mm)	形状
①	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 基	奥行 360 幅 75 高 710	腰鰭・尾欠損。
②	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 基	奥行 540 幅 86 高 1360	目から緑青が涙状にたれる。腹鰭欠損。口中に焼けた木材・金属片残る。
③	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 基	奥行 430 幅 710 高 1390	鰭すべて欠損。腹部に大きな穴あり。
④	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 点	奥行 150 幅 225 高 290	鰭のみ。削り痕あり。
⑤	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 点	奥行 150 幅 225 高 290	鰭のみ。削り痕あり。

⑥	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	半基	奥行 155 横 850 高 1220	尾鰭上下とも欠損。
⑦	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	半基	奥行 155 横 850 高 1170	尾鰭上部一部欠損・下部大きく欠損。 腰鰭・棟鰭ともにあり。
⑧	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	半基	奥行 155 横 830 高 1330	尾鰭上部欠損 腰鰭あり 胸鰭欠損
⑨	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 基	奥行 460 幅 760 高 1340	尾鰭上部欠損、左鰭上・右鰭上下欠損
⑩	名古屋城銅鯨 (旧江戸城銅鯨)	1 基	奥行 430 幅 800 高 1450	尾鰭下部欠損、左鰭上下とも欠損

3 資料の利用

(1) 資料貸出

貸出先	貸出目的	貸出資料	展示期間
徳川美術館 名古屋市蓬左文庫	秋季特別展 みやび の世界「魅惑の源氏 物語」	【寄託資料】 名古屋城振興協会所蔵 田中訥言筆「清少納言図」 1 件 1 点	令和 6 年(2024) 9 月 22 日～11 月 4 日
岐阜関ヶ原古戦場記 念館	秋季特別展「関ヶ原 ーよみがえる天下分 け目の戦いー」	「徳川家康坐像」 1 件 1 点	令和 6 年(2024) 10 月 8 日～11 月 4 日
サントリー美術館	「儒教のかたち こころの鑑 日本 美術に見る儒教」	① 重要文化財名古屋城 本丸御殿障壁画「帝鑑図 明弁詐書」(上洛殿一之間 北側襖絵) ② 重要文化財名古屋城 本丸御殿障壁画「帝鑑図 露台惜費」(上洛殿上段之 間南側襖絵) 2 件 4 点 8 面	① 令和 6 年(2024) 11 月 27 日～12 月 23 日 ② 令和 6 年(2024) 12 月 25 日～ 令和 7 年(2025)1 月 26 日 会期を前後期に分けて展示

(2) 写真貸出

62 件 258 点(観光写真を除く)

(3) 熟覧

熟覧日	熟覧者	熟覧目的	熟覧資料
令和 6 年(2024) 5 月 16 日	中之島香雪美術館	「相応寺屏風」を制作した絵師集団の研究のため	「中国宮廷・当世遊楽図屏風」
令和 6 年(2024) 5 月 22 日	名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿復元模写制作の参考とするため	「竹林豹虎図」はじめ重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画・天井板絵 19 件 23 面
令和 6 年(2024) 9 月 4 日	名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿復元模写制作の参考とするため	「竹林豹虎図」はじめ重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画・天井板絵 17 件 22 面
令和 6 年(2024) 12 月 18 日	名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿復元模写制作の参考とするため	「竹林豹虎図」はじめ重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画・天井板絵 13 件 18 面
令和 7 年(2025) 2 月 14 日	名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿復元模写制作の参考とするため	「竹林豹虎図」はじめ重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画・天井板絵 11 件 16 面
令和 7 年(2025) 2 月 21 日	中京大学教学部教務センター(古文書室)	中京大学古文書室を運営していくための基礎資料とするため	『金城録』付属絵図

III 展示事業

1 西の丸御蔵城宝館 展示室

(1) 企画展「名古屋城本丸御殿障壁画と復元模写」

展示概要

会期 令和 6 年(2024) 5 月 14 日(火)～7 月 15 日(月・祝) 63 日間

入館者数 48,860 人(1 日平均 775.6 人)

出品件数 25 件

担当者 朝日美砂子

展示趣旨

名古屋城本丸御殿は、江戸時代初めに創建された広大な御殿で、戦前には国宝に指定されていた。昭和 20 年(1945)、空襲により焼失したが、名古屋市では木造復元に取り組み、平成 30 年(2018)、平成の復元本丸御殿が完成した。復元本丸御殿の内部を飾る障壁画は、創建時の色彩を再現した復元模写としてあらたに制作したもので、900 面以上の襖絵や天井絵が復元されている。廊下の間仕切りである杉戸絵も復元模写が制作されているが、復元本丸御殿に建て込むと観覧動線の支障となるため、別途保管されている。

本展では、それら通常非公開の杉戸絵を公開した。本歌ともいふべき江戸時代の重要文化財障壁画も展示した。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

解説パネル

1 名古屋城 本丸御殿

名古屋城本丸御殿は、初代尾張藩主徳川義直の居処として、義直実父である徳川家康の命により慶長 20 年(1615)に造営された。寛永 11 年(1634)、三代将軍家光の御成に備え壮麗な上洛殿が増築され、本丸御殿はさらに美しい姿となった。明治維新後、本丸御殿は宮内省により管理され、昭和 5 年(1930)、名古屋市に下賜され国宝に指定された。しかし昭和 20 年(1945) 5 月 14 日の空襲により、天守とともに炎上した。名古屋市では、昭和 34 年(1959)に鉄筋鉄骨コンクリートにより天守閣を復元し、さらに本丸御殿の木造による復元を計画した。着工から 10 年の年月をかけ、平成 30 年(2018)、復元本丸御殿が完成した。

II 重要文化財 本丸御殿障壁画

本丸御殿は、幕府御絵師・狩野探幽をはじめとする狩野派絵師が描いた障壁画で彩られていた。障壁画は襖絵、杉戸絵、天井板絵など多種におよび、床の間や廊下の壁にも狩野派による絵が貼り付けられていた。昭和20年(1945)5月14日の空襲により、それら壁貼付絵は本丸御殿とともに焼失した。一方襖絵や杉戸絵、天井板絵は、空襲直前に取り外され、城内御深井丸の乃木倉庫に搬入されていたため、奇跡的に焼失を免れた。それら障壁画は、1,047面が文化財保護法で定める重要文化財に指定され、ここ西の丸御蔵城宝館の収蔵庫で保管されている。

III-1 復元本丸御殿と復元模写

昭和20年(1945)5月の空襲時、本丸御殿から取り外せず焼失した壁貼付絵は、300面を越える。一方、本丸御殿の障壁画は名品として知られ、名古屋市のみならず多くの研究機関が調査し、ガラス乾板写真を撮影していた。それら膨大なガラス乾板写真が今も各機関に残っており、焼失した壁貼付絵の構図を教えてくれる。また名古屋市は、国宝建造物調査として詳細な実測調査を行っており、その図面には、各壁貼付絵の実寸法が記されている。さらに各壁貼付絵の色彩や筆使いは、現存する襖絵から推定することが可能である。すなわち名古屋城本丸御殿障壁画は、焼失画面も含め正確な復元模写が可能な日本で唯一の障壁画群なのであり、よって名古屋市は、本丸御殿復元を視野に入れ、平成4年(1992)、復元御殿にはめこむべく障壁画復元模写制作事業を開始した。

III-2 杉戸絵と復元本丸御殿

杉戸絵は、入側(廊下)の端にたてこまれるもので、建物の棟と棟の仕切りとなる。名古屋城本丸御殿でも、玄関、表書院など各棟の廊下の入口部分と出口部分に杉戸絵がはめられていた。復元本丸御殿は、史実に正確な復元を基本方針とするものであり、すべての杉戸絵を復元する計画をたてている。しかし、廊下は本丸御殿を観覧するお客様の通路であり、杉戸絵をはめてしまうと通行の支障となる。よって現在は、制作された杉戸絵は別途保存し、本展のような機会にのみ公開している。

IV 復元模写の制作体制

復元模写は、当初、愛知県立芸術大学美術学部助教授であった日本画家の林功氏が指導された。模写は名品「竹林豹虎図襖絵」からはじまり、平成6年(1994)には「花車図杉戸絵」の復元模写が制作された。平成12年(2000)、林氏は急死され、当初から本丸御殿復元模写に参加され「竹林豹虎図襖絵」などの復元模写制作に携われた加藤純子氏を、指導者としてお迎えした。本丸御殿復元が本格化すると、加藤純子氏ならびに愛知県立芸術大学御出身の方々を中心として復元模写制作が営々と行われ、制作はしばしば深夜に及んだ。平成30年(2018)に完成した復元本丸御殿には、多くの復元模写がはめこまれた。しかし、制作すべき復元模写は膨大で、杉戸絵や天井板絵などが今なお制作されている。

V 復元模写と現状模写

模写は、顔料の剥落や本紙の欠損等をそのまま写す現状模写と、描かれた当時の色彩を復元する復元模写に大別される。名古屋城本丸御殿の場合、あらたに復元する御殿に入れることが目的であったため、制作開始当初から復元模写を選択した。制作にあたっては、現存障壁画の写真(焼失画面についてはガラス乾板写真)から、原寸大の紙焼写真を作成する。この紙焼写真を転写し、原寸大の天下絵を作成する。一方で、現存する重要文化財障壁画を熟覧し、顔料を特定し、筆使いを練習しつつ、揮毫していく。巨大な杉戸絵の場合も、現在は1名が担当している。絵具や筆、紙などの材料や道具は、江戸期と同様の伝統的なものを用いている。

VI 上洛殿の天井画

寛永11年(1634)に増築された上洛殿においては、主要な部屋と廊下の天井には天井画がはめこまれていた。絵を描いた本紙を板に貼り込む構造のため、名古屋城では天井板絵と言っている。昭和20年(1945)5月の空襲の直前、襖絵だけでなく天井画700枚もすべてとりはずされ、別途保管された。それらは今も現存し、重要文化財に指定されている。これほどの天井画が残る江戸期の建物は、二条城二の丸御殿と名古屋城だけである。

VII 上洛殿の天井画 通称Rと模写計画

上洛殿一之間の天井は折上格天井といい、四周の壁の上に曲面をえがく格天井を一段分立ち上げ、その上に平面の格天井を並べたもの。曲面部分の天井画をR天井、折上天井などと呼んでいる。復元模写においては正対写真を用いて下絵を制作する必要があるが、R天井は弧を描いているため正確な下絵が作れない。そのため、解体修理時、支持体の板から本紙をはずした段階で本紙を撮影し、その写真から下絵を作成している。名古屋市では長期計画にそって天井板絵700面を解体修理しており、今年度、R天井の最後の一枚の修理を行う。よってその復元模写制作は来年度以降となる。

VII-1 速報 R天井修理 映像撮影

名古屋城では、重要文化財本丸御殿障壁画1,047面について、修理は永遠という基本方針のもと、文化庁の補助事業として点検・修理を続けている。天井板絵については、本紙を本部からはずし、補修して再度張り込むという抜本的な解体修理を行っており、今年度で全700面の修理が終了する。それを受け、令和5年度からR天井を中心に修理工程の記録映像を撮影している。完成後の動画は広く公開する予定である。

VII-2 速報 復元本丸御殿 松之間完成

令和5年(2023)度、松之間への復元模写のはめこみが完了した。松之間は、上洛殿北側の一室で、南側三室の裏になる。現存する襖絵は顔料の剥落がはなはだしい上、床の間壁など大半の障壁画が焼失しているため、注目されてこなかった。しかし、復元模写は、総金箔地に濃彩により満開の桜や雉子を描くもので、床の間の大壁はもちろん、長押上小壁という高い位置まで、輝くばかりの復元模写がはめこまれた。

桜に雉子図とは、藩主のお目見が行われた本丸御殿表書院一之間に描かれるなど、殿の威信を示す格の高い画題である。また、松之間ほど金箔を用いた部屋は他にない。松之間は実は、將軍近臣などが伺候する、格上の部屋であったと考えられる。

VII-3 速報 復元本丸御殿 入側天井

令和 5 年(2023)度、上洛殿入側(廊下)天井の一部に、復元模写天井画がはめこまれた。上洛殿入側に天井画をはめこむ作業は、まず、絵のない天井板を外すことから始まった。お客様が帰られた夜間、上洛殿の畳敷廊下を養生し、足場を組み、天井板を一枚ずつはずして下に降ろした。その天井板に、仮板から剥がした復元模写を貼り込み、乾燥させた後上洛殿天井に戻した。作業は本丸御殿復元工事に当初から携わってきた表具師が行った。屋根裏は狭く、昭和 20 年(1945)5 月、空襲の危険の中で 700 枚に及ぶ天井板絵を一枚ずつ外す作業がいかに困難であったかを、まざまざと感じ得た作業であった。

VIII 上洛殿天井画の復元模写

そもそも、本丸御殿天井画 700 面の復元模写制作には膨大な時間がかかる。しかも 700 面の内の室内分の 331 面は、一枚一枚絵が異なっており、オリジナルを熟覧しての復元模写制作となる。現在、復元本丸御殿の上洛殿一之間や入側、御湯殿書院上段之間には、絵のない無地の天井板がはめこまれており、名古屋城内の模写室で、天井画の制作が続けられている。出来上がった復元模写は仮板に仮貼されており、本丸御殿にはめこむには、無地板を一度下におろし、仮板からはがした復元模写を貼ってから、再び天井に上げることになる。

作品解説

1 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画図 梅図杉戸絵(前期展示)

2 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画図 芦図杉戸絵(後期展示)

江戸時代前期 寛永 11 年(1634) 上洛殿西入側 雁之廊下境

上洛殿の西入側(廊下)の北端にたてられていた杉戸絵。この杉戸絵を開けると、御湯殿書院などの別棟に渡ることができる。筆使いはやや硬く色彩も明瞭で、本丸御殿の他の杉戸絵とは異質である。

3 重要文化財 山水図天井板絵 名古屋城本丸御殿障壁画 寛永 11 年(1634) 上洛殿一之間

上洛殿一之間天井の折上部分(立ち上がり部分・通称 R)の角にはめられていた天井画。絵の薄板を湾曲させ、裏から支輪を打ち付け湾曲を固定した木製下地の表面に、唐花模様の装飾料紙を直貼りし、その上から山水図を描いた本紙を貼っている。

4 重要文化財 松図天井板絵 名古屋城本丸御殿障壁画 寛永 11 年(1634) 上洛殿一之間

一之間天井の水平面にはめこまれていた天井画。今見える画面は、本来は下を向く。R 天井とは仕立てが異なり、格子状の骨組の表面に下貼りとして楮紙を重ね、その上に竹紙の本紙を貼っている。骨組の裏面には薄板が打ちつけられている。

5 重要文化財 秋草図天井板絵 名古屋城本丸御殿障壁画 寛永 11 年(1634) 上洛殿一之間

秋草を描く本紙には、一之間の襖絵と同じく竹紙が用いられている。周囲の装飾料紙は、雁皮紙に唐花模様を金で擦りだしたものの。一之間の天井画は 96 面現存し、さまざまな山水図や花鳥図が狩野派の筆法で描かれている。

6 重要文化財 松月図天井板絵 名古屋城本丸御殿障壁画 寛永 11 年(1634) 御湯殿書院上段之間

上洛殿の北西奥に建てられていた御湯殿書院の天井画。御湯殿書院は、風呂場(湯殿)と床の間付きの座敷からなり、將軍を風呂と酒食でもてなすための建物であった。

7 重要文化財 山水図天井板絵 名古屋城本丸御殿障壁画 寛永 11 年(1634) 御湯殿書院上段之間

御湯殿書院は、明治維新後は風呂としては使われず、皇后・皇太后の行啓時に御寝所とされる程度であった。皇后らの行啓はほとんどなく、天井画の保存状態は上洛殿にくらべはるかに良い。色彩や筆法は繊細優美で、上洛殿天井画とは筆者が異なると考えられる。

8 ガラス乾板写真 上洛殿一之間東北側 昭和 15～16 年(1940～41)撮影

名古屋市が撮影した国宝建造物写真約 700 枚のうちの一枚。薄いガラス乾板に塗られた感光剤が、膜状に定着している。現在はガラス乾板を現像してから紙焼写真をつくるのは困難であり、現在はすべてデジタルデータ化し活用している。

9 名古屋城本丸御殿 復元模写 梅図杉戸絵 令和 4 年(2022)度制作 原本 寛永 11 年(1634)

上洛殿西入側 雁之廊下境

令和 4 年度に制作された復元模写。今回が初めてのお披露目となる。

10 名古屋城本丸御殿 復元模写 芦図杉戸絵 令和 3 年(2021)度制作 原本 寛永 11 年(1634)

上洛殿西入側 雁之廊下境

令和 3 年度に制作された復元模写。今回が初めてのお披露目となる。

11 名古屋城本丸御殿 復元模写 竹鶏図杉戸絵 令和 2 年(2020)度制作 原本 慶長 19 年(1614)

表書院西入側・対面所東廊下境

表書院廊下の杉戸絵の復元模写。表書院は公式行事を行う大広間で、廊下の幅も広い。よって廊下の間仕切りである杉戸絵も巨大であった。この復元模写は、1 人の画家により、2 年かけて制作された。

12 名古屋城本丸御殿 復元模写 花車図杉戸絵 平成 6 年(1994)度制作 原本 寛永 11 年(1634)

上洛殿南入側 一之間・二之間境 西側

上洛殿廊下の杉戸絵。名古屋城復元模写の代表作であるが、上洛殿廊下はせまいため、残念ながらこの復元模写をはめることはできない。

13 名古屋城本丸御殿 復元模写 滝図杉戸絵 令和元年(2019)度制作 原本 寛永 11 年(1634)

鷺之廊下・梅之間境

表書院と上洛殿をつなぐ「鷺之廊下」にはめられていた杉戸絵の復元模写。本来引手と鍵がついているが、復元模写制作のためとりはずした。そのため杉板に穴が開いている。作品 24 参照。

14～22 出品目録のとおり

23-1 復元模写の道具・材料【原寸大写真】

復元模写を制作するにはまず、現存する杉戸絵のポジフィルムから、原寸大の紙焼写真を作る。フィルムには多少の歪みがあるため、補正して焼いてもらう。紙焼写真の上にトレース用の透明シートを置き、細筆で線描を写し取る。元の絵を深くつかむための、重要な工程である。絵を描くべき無地の杉板戸に、顔料を塗った念紙とこの透明シートを重ね、さらに上からなぞって顔料を杉板に付着させる。

23-2 復元模写の道具・材料【筆・刷毛】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

模写を描く基本が筆である。「面相筆」と呼ばれる細筆はじめ、多くの筆を使い分ける。面的に描く時や下地に用いる刷毛もある。

23-3 復元模写の道具・材料【墨】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

墨は、煤を膠で練り固めたもの。油煙墨と松煙墨に大別される。油煙墨は、菜種油など植物性の油を燃やした煤を固めたもので、茶墨ともいい、墨色に艶がある。松煙墨は、松の煤を材料とし、青味があり青墨とも言う。さらに、個々の墨によっても微妙に発色が異なる。

23-4 復元模写の道具・材料【緑青】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

名古屋城復元模写事業では伝統的な天然顔料を用いている。緑の松の葉などを描くには、緑青という岩絵具を用いる。緑青は、マラカイト(孔雀石)という、銅が風化した錆(これも緑青という)が濃集した緑色の石を、細かく砕き粉状にしたもので、粉の粒が大きければ濃い緑色となり、細かければ淡くなり、白緑と呼ばれる。

23-5 復元模写の道具・材料【群青】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

水流などの青色は、アズライト(藍銅鉱)を粉状にした群青を用いている。アズライトは、マラカイトにまじって産出される事があり、精製に手間がかかるため、高価な顔料として知られている。アズライトが縞状にまじったマラカイトはたいへん美しく、装身具にも用いられる。

23-6 復元模写の道具・材料【胡粉】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

胡粉は、代表的な白色顔料。牡蠣などの貝殻を風化させ細かくしたもので、主成分は炭酸カルシウム。使う時には、乳鉢に入れ乳棒で丹念にすりつぶしてから、膠とよくまぜて用いる。竹鶏図杉戸絵の鶏や、滝図杉戸絵の水流などの他、下塗りなどに用いられている。

23-7 復元模写の道具・材料【朱・丹】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

赤色顔料としては、朱と丹を主に用いる。朱は、水銀朱とも呼ばれる硫化水銀鉱物で、ややオレンジ系統の赤色(朱色)が得られる。丹は、鉛丹とも呼ばれ、鉛を高温で酸化させたもの。朱より黄味の強い赤(丹色)になる。

23-8 復元模写の道具・材料【膠】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

粉状の岩絵具には粘着性がないため、水で溶かした膠の溶液とよく混ぜてとろみを出してから、筆に付けて描く。膠は動物の骨や皮などを煮出し、コラーゲン(高タンパク質の繊維。ゼラチンの材料)を濃縮し、乾燥させたもの。束状の三千本膠や板状のものなどがある。

23-9 復元模写の道具・材料【ガンボージ】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

ガンボージは、ガンボウジノキなどと呼ばれる高木の樹脂。棒状になっており、指に水をつけてなでると、冴えた黄色の絵具が得られる。

23-10 復元模写の道具・材料【臙脂綿】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

カイガラムシの体液に含まれるコチニール色素を円盤状の綿に染み込ませたもの。細片に水分を与え揉み出すと、青味を帯びた赤色が得られる。中国からの高価な輸入品であるため、小さく切っては用いられてきた。桜の花びらなどを淡く染める時などに用いるが、退色はきわめて早い。

23-11 復元模写の道具・材料【雁皮紙】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

雁皮紙は、ジンチョウゲ科の低木である雁皮から作られる紙。裏打ちなどに広く用いられる楮紙に比べ、繊維が細く短いため、薄手でつやのある紙となる。雁皮は栽培が難しく、雁皮紙も貴重な紙となっている。

23-12 復元模写の道具・材料【竹紙】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

竹紙は、竹から作られる紙で、中国から輸入された高級紙。繊維が短くもろいが、墨の発色はすばらしい。本丸御殿では、上洛殿の上段之間・一之間・二之間のみに用いられた。復元模写制作時、国内では渡かれておらず、高知県の紙業試験場(現高知県立紙産業技術センター)に特別に依頼した。

23-13 復元模写の道具・材料【型紙 御湯殿書院用】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

上洛殿の天井板絵は、金色に輝く文様が絵の周りに擦られている。文様を擦るため、型紙から制作した。顔料を塗った本紙の上に、型紙を載せ、小麦澱粉糊を塗る。型紙を外し、金箔を置くと、糊のついた部分にのみ金箔がつき、立体感のある文様が現れる。

23-14 復元模写の道具・材料【砂子 切板・竹刀】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

本丸御殿の杉戸絵や天井板絵には、金箔を小さな正方形に切った繊細な切箔が散らされている。切箔を作るには、鹿皮を張った板の上に金箔を置き、竹刀で切っていく。切り終えたら、つぶさないようふんわりと紙で包む。板も手製である。

23-15 復元模写の道具・材料【撒き筒・紙包】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

切箔を撒くには、下面に網を張った竹製の筒を用いる。網の目には粗密があり、切箔の大きさにあわせて選ぶ。紙で包んだ切箔を筒に入れ、軽くたたき、本紙に落としていく。本紙には、布海苔溶液を加えとろみを付けた膠溶液を塗っておき、切箔定着後、さらにごく薄い礬水(明礬と膠の水溶液)を引いて固着させる。

23-16 復元模写の道具・材料【手板】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

色彩や筆使いを確認するため、実際に本紙に描く前に、練習を繰り返す。とくに杉戸絵は、杉板という、木目があり一枚ごとに個性が異なる素材に描くため、稽古を重ねる。

23-17 復元模写の道具・材料【手板】 名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体蔵

将来復元模写を制作する予定の杉戸絵には、胡粉を厚く盛り上げて満開の八重桜を描くものもある。胡粉盛り上げをむらなく仕上げるには、高い技術が必要である。経年による劣化を検証するためにも、実際に制作にかかる数年以上前から、様々な技法を試みている。

24 引手・打掛金物 平成

滝図杉戸絵の引手と打掛金物(鍵)。平成 30 年(2018)の本丸御殿完成時、杉戸絵用の杉戸も全枚数が制作された。大半の杉戸は絵がない素地であったが、引手と鍵はすべてはめこまれていた。それら金具は絵を描くには支障となるため、絵を描く前に取り外している。小さな金具であるが、葵紋や唐草文がびっしりと彫り込まれ、七宝で加飾されている。

25 金箔 令和

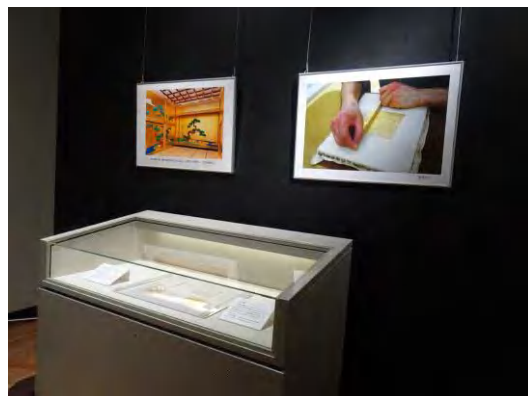
本丸御殿の障壁画には、大量の金箔が用いられていた。金箔には、縁付金箔と、断切箔がある。縁付金箔は、金の薄片を箔打紙に挟んで打ち延ばし、裁ってから箔合紙に重ねたもの。箔打紙は雁皮を原料とし、利用後は高級なあぶらとり紙として販売されている。断切箔は、工業製グラシン紙を箔打紙に用い、

まとめて裁ったもの。復元本丸御殿では、上洛殿松之間の松雉子流水図襖や鷺之廊下の一部、菊の廊下の障壁面に縁付金箔を用いている。

金箔用の金には、微量な銀や銅が混ぜられている。それぞれの含有量により色合いが異なり、銀が多いほど青味がかかり、銅を入れると赤くなる。名古屋城復元模写では、主として一号色(金 97.666%・銀 1.357%・銅 0.977%)を用いている。金箔の大きさは、三寸六分(109mm 角)を基本とする。天井板絵は、最小の御湯殿書院でも 60 cm角で、大きなものは 80 cm 近くになる。一之間の平天井では、一面につき 30 枚前後の金箔を使う。絵の中にも金砂子を散らすため、天井板絵だけでもかなりの量の金箔が必要となる。

一号色	金 97.666%	銀 1.357%	銅 0.977%
三号色	金 95.795%	銀 3.535%	銅 0.670%
青金	金 94.438%	銀 4.901%	銅 0.661%
定色	金 75.534%	銀 24.466%	
水色	金 59.740%	銀 40.250%	
ホワイトゴールド	金 50.000%	銀 50.000%	

展示風景



出品目録

名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展「名古屋城本丸御殿障壁画」と復元模写 出品作品一覧

令和6年5月14日(火)～7月15日(月・祝)

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

no		資料名	備考	制作年度	展示期間	所蔵
1	重要文化財	梅図杉戸絵	上洛殿西入側 雁之廊下境	寛永11年(1634)	前期	名古屋城総合事務所
2	重要文化財	芦図杉戸絵	雁之廊下南側 上洛殿西入側境	寛永11年(1634)	後期	名古屋城総合事務所
3	重要文化財	山水図天井板絵 折上	上洛殿一之間	寛永11年(1634)	全期	名古屋城総合事務所
4	重要文化財	松図天井板絵	上洛殿一之間	寛永11年(1634)	全期	名古屋城総合事務所
5	重要文化財	秋草図天井板絵	上洛殿一之間	寛永11年(1634)	全期	名古屋城総合事務所
6	重要文化財	松月図天井板絵	御湯殿書院上段之間	寛永11年(1634)	全期	名古屋城総合事務所
7	重要文化財	山水図天井板絵	御湯殿書院上段之間	寛永11年(1634)	全期	名古屋城総合事務所
8		ガラス乾板 上洛殿一之間東北側		昭和15～16年	全期	名古屋城総合事務所
9	復元模写	梅図杉戸絵	上洛殿西入側 雁之廊下境	令和4年度(2022)	前期	名古屋城総合事務所
10	復元模写	芦図杉戸絵	雁之廊下南側 上洛殿西入側境	令和3年度(2023)	後期	名古屋城総合事務所
11	復元模写	竹鶏図杉戸絵	表書院西入側 対面所境	令和2年度(2020)	全期	名古屋城総合事務所
12	復元模写	花車図杉戸絵	上洛殿南入側	平成6年度(1994)	全期	名古屋城総合事務所
13	復元模写	滝図杉戸絵	梅之間北側 鷺之廊下境	令和元年度(2019)	全期	名古屋城総合事務所
14	復元模写	梅水仙図天井板絵	上洛殿一之間	令和2年度(2020)	全期	名古屋城総合事務所
15	復元模写	松図天井板絵	上洛殿一之間	令和4年度(2022)	全期	名古屋城総合事務所
16	復元模写	薔薇鳥図天井板絵	上洛殿一之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
17	復元模写	秋草図天井板絵	上洛殿一之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
18	復元模写	柿図天井板絵	上洛殿一之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
19	復元模写	山水図天井板絵	上洛殿一之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
20	復元模写	菊流図天井板絵	御湯殿書院上段之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
21	復元模写	松月図天井板絵	御湯殿書院上段之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
22	復元模写	山水図天井板絵	御湯殿書院上段之間	令和5年度(2023)	全期	名古屋城総合事務所
23	復元	滝図杉戸絵 引手・打掛金物	鷺之廊下・梅之間境	平成	全期	名古屋城総合事務所
24		道具・材料一式		平成～令和	全期	名古屋城本丸御殿復元模写制作共同体
25		金箔		令和	全期	名古屋城総合事務所

※都合により出品内容が変更になる場合があります。

(2) 名古屋城振興協会所蔵品展「武具・甲冑」

展示概要

会期 令和 6 年(2024)7 月 20 日(土)～9 月 9 日(月) 52 日間

入館者数 66,055 人(1 日平均 1,270.3 人)

出品件数 45 件

担当者 一般財団法人名古屋城振興協会(渡邊美津子・渡部穂香)・原史彦

展示趣旨

名古屋城振興協会は、名古屋城に関する資料を収集し、提供するなど名古屋城の振興に資する事業を行い、市民の教養の向上と地域社会の発展に寄与することを目的として、昭和 34 年(1959)に設立された。これまでの活動の中で収集してきた尾州名古屋コレクションは 590 点に及び、すべて名古屋城総合事務所に寄託され、名古屋城所蔵作品を補完する作品群となっている。武具・甲冑は兜や鎧だけでなく刀剣や火縄銃など多種多様な作品を含み、歴史資料には徳川家康をはじめとする武将たちの肖像や合戦図がある。これらから戦国時代から江戸時代の武士たちの戦の様相を知ることができる。

この展覧会では、名古屋城振興協会が所蔵する武具・甲冑と歴史資料の一部を通して戦国時代から江戸時代の武士たちの戦の様相を紹介するとともに名古屋城振興協会の活動の一端を知っていただく機会とした。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。特記のないかぎり所蔵は一般財団法人名古屋城振興協会。

第 1 章 武士の装束

戦場で目を引くのは武士たちが身にまとった甲冑です。甲冑とは胴部を守る鎧と、頭部を守る兜からなる武具のことで、日本の伝統的な防具です。多くの人々が入り混じる戦場で家臣は主君に自分の活躍を顯示する必要があります。そこで、いかに自身が目立つかが重要となります。そんな中豪華で派手な甲冑を身にまとう事は自分の武功を示すのに役に立ちます。甲冑は身を守る防具であり、武士を際立たせる装束でもありました。また一人一人に合わせているため、甲冑は個性豊かで様々な姿を見ることができます。

1 徳川家康画像 江戸時代

色鮮やかな衣装を身に着け、白い神馬にまたがり弓矢を持つ徳川家康です。神格化された像です。

2 李満弓 江戸時代

李満弓とは、籠の中から敵を討つための弓矢です。籠の中に納まるよう全体的に小ぶりの作りになっています。紀伊国の兵法家・林李満によって考案された携帯・非常用の弓です。

3 矢屏風 江戸時代

弓矢を立てるための屏風です。21本の弓矢が付属します。

4 徳川十六将図 江戸時代

徳川家康を筆頭に十六将と呼ばれる武士たちが淡い色合いで描かれています。その表情や姿はやや固さを感じさせます。

5 徳川十六将図 江戸時代

同じく徳川十六将図を描いています。色鮮やかに描かれ、それぞれの甲冑を見比べるのも楽しい作品です。

10 黒漆塗椎実形兜(面頬付) 江戸時代

兜の天辺を尖らせて椎の実のように似せた兜を椎実形兜と呼びます。左頭部にある傷は弾痕といわれていますが、確証はありません。

11 鉄錆地百二十間筋兜(面頬付) 江戸時代

筋兜は縦に細長い鉄板を順々に重ねて小さな鋲でとめ、鋲の頭を平らにたたきつぶして鉄板の重ね目(筋)だけを見せた兜で、筋の数により、〇〇間といいます。

12 畳具足 江戸時代

畳具足は兜や胴を折りたたむことができ、持ち運びがしやすい具足です。通常の具足と比べて軽量で実用性に優れており、主に下級武士が使用しました。

13 黒漆塗紺糸威具足 附 鉄錆地六十二間筋兜 銘 八乙女家成 江戸時代

胴や袖などを紺色の糸で威しています。「威す」とは、鎧の札を糸や革で綴り合せることをいいます。細部に目をやると、手の甲に花の文様があるなど、こだわりのみえる一具です。

14 朱塗紺糸威具足 附 蝶前立付黒漆塗六十二間筋兜 江戸時代

朱漆の鉄板に紺糸の威しが映える一具です。鎖が多用されているため重量があります。蝶の前立てが輝かしい兜です。

15 色々威二枚胴童具足 江戸時代

一般の具足よりも小さい子供用に作られた具足です。3色から5色の多色の糸を使用した威のことを色々威といいます。中央には丸に剣酢漿草紋があります。

16 鉄錆地八枚張南蛮兜 江戸時代

西洋の兜を輸入・改造・模倣した兜を南蛮兜と言います。当時は西洋の輸入品がなかなか手に入らないため南蛮兜は高価でしたが、耐久性が高く徳川家康をはじめ多くの武将が愛用しました。

17 黒漆塗日根野頭形兜 江戸時代

日根野頭形兜は日根野備中守弘就が自作したことが名前の由来とされています。眉庇が頭上の板の上に重なり、鍔が肩の線に沿うように湾曲した形態で、実戦向きであるとして重宝されました。

18 深藍色羅紗地紋付龍・蔦唐草文火事兜頭巾 江戸時代

火事の際に炎から身を守るための火事兜頭巾ですが、龍や蔦唐草の文様があしらわれたきらびやかな一点です。一般的に火事兜頭巾は江戸時代になってから作られました。

19 伊予札紺糸綴陣羽織 江戸時代

甲冑の上から着用する羽織物です。裏地には紅葉と梅の文様が金糸で織られる華やかな陣羽織です。

20 白羅紗地丸に山文字紋付火事装束 江戸時代

火事になった際に着る服装です。主に、消火や警備などに出動する武家が用いました。

参考出品 黒漆塗横剥胴具足 附 長烏帽子形兜(加藤清正複製甲冑)

加藤清正着用の烏帽子を象った長烏帽子形兜の複製です。加藤清正の家紋である蛇の目紋が目を引きま

第2章 資料を見る

現在のようなカメラや電子機器などの便利な道具がない時代、当時の戦の状況などが分かる資料として布陣図があります。布陣図には主要な場所が簡易的に描かれており、敵側と味方側の両方の武将がどの場所にどのように陣をしいていたのかが書かれています。布陣図のおかげで戦に参加した人物などの様々な情報を得ることが出来ます。また、じっくりと見て自分の知っている武将の名前を探すのも面白いです。

6 小牧・長久手合戦図 江戸時代

天正12年(1584)3月から11月にかけて羽柴秀吉陣営と織田信雄・徳川家康陣営の間で行われた戦いの布陣図です。緊迫する戦場の様子が伝わります。

7 関ヶ原合戦布陣図 江戸時代

慶長5年(1600)に行われた天下分け目の戦いとも言われる合戦です。徳川家康方の東軍と、石田三成方の西軍の布陣が描かれています。

8 大坂冬陣布陣図 江戸時代

慶長 19 年(1614)に行われた大坂冬陣の布陣図です。図には真田信繁(幸村)が築いた大坂城南側の出丸・真田丸が描かれていることが分かります。

9 大坂夏陣布陣図 江戸時代

慶長 20 年(1615)江戸幕府と豊臣家との間で行われた戦いの布陣図です。北西の大坂城を包囲する江戸幕府陣営の布陣が分かります。

参考解説 徳川十六将

徳川十六将は、徳川家康に仕え江戸幕府の創立に功績を立てた 16 人の武将を顕彰した呼称です。徳川四天王と呼ばれる酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の 4 人に米津常春、高木清秀、内藤正成、大久保忠世、大久保忠佐、蜂屋貞次または植村家存、鳥居元忠、鳥居忠広、渡邊守綱、平岩親吉、服部正成、松平康忠または松平家忠の家臣 12 人を加えますが、選出される武将には違いがあります。

東照大権現の神号を持つ家康を権現様に見立て、家臣を仏教の四天王・十二神将に見立てていると近年では考えられ、4 と 12 の 2 つの数字を合計して 16 にしたと考えられています。人選の基準は不明ですが、大部分は三河時代からの家臣で、領土拡張期に家康と共に戦場で活躍した武功派と呼ばれる武将たちが選ばれています。

21 徳川十六将図 江戸時代

約 9 m にもおよび徳川十六将の来歴と姿が描かれた巻物です。三河鳳来寺(愛知県新城市)伝来の什物であったことが巻頭に記されています。

第 3 章 武士の誇り

武士が肌身離さず持っていた日本刀は武士の象徴とも言えます。日本刀は、日本刀を作る刀工に加えて鞘を作る鞘師、目貫や筭・小柄などを作る金工師など一つ作るために多くの職人が携わっています。それぞれの職人が自身の持っている技術を詰め込んで作り上げた日本刀は、刃文や拵など様々な魅力に溢れています。また、その美しい姿から美術品として現代も多くの人を魅了しています。

22 脇差 銘 兼則 附 唐花唐草文金襴貼合口拵 江戸時代

兼則は美濃国の刀工で、同名の刀工は江戸時代初期からの活躍が確認できます。装飾的な裂貼りの鞘には、鶴の飾り金具が付き、三つ葉葵紋の目貫の他、金銀の象嵌が施された小柄と割筭が付属します。

23 刀 銘 河内大掾藤原義植/越前住 附 蠟色塗刀拵 江戸時代

義植は越前下坂の刀工で、初代は寛永年間(1624-44)頃、二代は天和年間(1681-84)頃に活躍したと言われています。また、拵の頭・縁は金象嵌雷紋散、目貫には龍、鐔には鳳凰と桐紋が施されています。

24 鎧通 銘 政常 附 黒漆塗蝶文小サ刀拵 江戸時代

鎧通は、寸の詰まった頑丈な造り込みの短刀で接近戦用に用いられました。手元部分が厚く、先が薄いのが特徴です。鞘には黒漆塗に蝶のような紋があり、頭や縁は雷紋梅鉢紋散、目貫は獅子、鐔は雲紋が施されています。

25 十文字槍 銘 近江守継平 附 皺革鞘・黒漆塗柄 江戸時代

穂の側面に「鎌」と呼ばれる枝刃がついている鎌槍の一種で刺突に不向きですが、受けや打ち込んで懸け倒すこともできます。継平は越前下坂の刀工で、「近江守継平」と切るのは江戸時代前期に活躍した初代から三代目までです。各代とも、主に直刃を得意としており、比較的多くの作品を残しています。

26 鎖帷子 江戸時代

上着や袴に鎖を巡らせて防具とした衣装です。頭巾、腰巻、草履付足袋などが付属します。どのような階級の人が着用したか、他にどのような防具が付属したのかなど、不明な点が多いです。

第4章 新たな戦力・火縄銃

日本の種子島に伝来した火縄銃。自国で生産が可能になったことで、刀や弓矢を使用していた従来の武士の戦の姿をがらりと変えました。戦に導入されるようになると火薬を使用した火縄銃の大きな音と威力は戦況をひっくり返すことのできる強力な武器として活躍することとなります。

27 気砲 江戸時代

空気ポンプで銃の台かぶ部分のタンクに空気を繰り返し送り込んで、高圧になるまで圧縮し、その力で弾丸を発射する鉄砲です。壊れた舶来の風砲(空気銃の一種)を修理した鉄砲鍛冶の国友一貫斎は、修理の過程で構造を詳しく学び、この経験から空気が動力になることに気づいて作り上げた銃が気砲です。

28 気砲記 江戸時代

国友一貫斎による気砲の撃ち方や部品についての解説書です。気砲に関する問い合わせに答える時間がなかったことが、この記録を執筆した動機である旨が巻頭に記されています。

29 襷早合 江戸時代

最初の弾丸を発砲してから次の弾丸を発砲するまでの時間を短くし、素早く装填できるように作られた筒状の容器です。適量火薬と弾丸一個がそれぞれに入れた一種の薬莢です。この早合は肩から襷掛けにして使用しました。

30 黒漆塗蔦紋付胴乱 江戸時代

胴乱は日本古来の小型のかばんの呼び名です。多くが革製で、火縄銃の火薬を保存するケースとして使用されました。

31・32・34・36・41・42・43 出品目録のとおり

33 三つ扇に片喰紋付胴薬入 江戸時代

弾薬入とも呼ばれます。銃身に込める火薬を入れる携帯用の容器です。蓋一杯分が一回分の火薬量になるように工夫されています。木製・竹製・革製・金属製など多種多様な材質で作られました。

35 丸に違い鷹羽根紋付口薬入 江戸時代

導火用の火薬(口薬)を入れるための容器です。表面に紋様として家紋を入れた容器が多く見られます。

37 太刀筭槍鉄砲名処之図 江戸時代

太刀・筭・槍・鉄砲の各部分の名称が書かれた文書です。「鉄砲惣名之論」として鉄砲の分類に関する説明も書かれています。

38 火縄銃(九十匁筒)銘 芝辻藤左衛門清永 江戸時代 天保8年(1837)

銃身には「荒浪」の銀象嵌銘があり、銃身銘の「天保八年酉七月力薬七拾匁目」により製作年が判明します。口径4cmの大きな弾丸を装填します。

39 火縄銃(三匁五分筒)銘 鍛惣巻張 谷口金蔵内改阿州臣笠井真信 江戸時代


笠井真信は阿波国(徳島県)の鉄砲鍛冶です。銃床の木目が美しい一挺です。

40 茶漆塗一文字形三鱗紋陣笠 江戸時代

陣笠にはたくさんの形や文様、鉢の深さの違いがあります。兜の前立てにつける鍬形を模した文様も見られます。

44 幟旗・切裂旗 江戸時代


背旗は敵味方の区別がつけるためや自分の活躍をアピールするために使われました。



特別公開 西の丸御蔵城宝館
NISHIKAWA CASTLE MUSEUM

名古屋城振興協会所蔵品展 武具・甲冑

令和6年(2024)
7月20日(土) ↓ 9月9日(月)



名古屋城 西の丸御蔵城宝館

宝館拝観時間：午前8時～午後4時(最終入館：午後4時)
ただし、催事等により変更となる場合があります。

宝館拝観料：大人500円、小児250円
※名古屋城宝館(宝館)は、名古屋市中区錦2-1-1(錦町)・中津区錦町
宝館(宝館)です。

主催：名古屋城振興協会・名古屋城調査研究センター
一般協力：名古屋城振興協会



特別公開 西の丸御蔵城宝館
NISHIKAWA CASTLE MUSEUM

名古屋城振興協会所蔵品展 武具・甲冑

令和6年(2024)
7月20日(土) ↓ 9月9日(月)

















出品目

名古屋城振興協会所蔵品展

「武具・甲冑」

会期：令和6年7月20日（土）～9月9日（月）

名称	員数	作製年代	図録
1 徳川家康画像	1幅	江戸時代	●
2 李満弓	1張	江戸時代	●
3 矢屏風	1基	江戸時代	●
4 徳川十六将図	1幅	江戸時代	●
5 徳川十六将図	1幅	江戸時代	●
6 小牧・長久手合戦図	1枚	江戸時代	●
7 関ヶ原合戦布陣図	1枚	江戸時代	
8 大坂冬陣布陣図	1枚	江戸時代	
9 大坂夏陣布陣図	1枚	江戸時代	●
10 黒漆塗椎実形兜（面頬付）	1頭	江戸時代	●
11 鉄錆地百二十間筋兜（面頬付）	1頭	江戸時代	●
12 畳具足	1具	江戸時代	
13 黒漆塗紺糸威具足 附 鉄錆地六十二間筋兜 銘 早乙女家成	1具	江戸時代	●
14 朱塗紺糸威具足 附 蝶前立付黒漆塗六十二間筋兜	1具	江戸時代	●
15 色々威二枚胴童具足	1具	江戸時代	
16 鉄錆地八枚張南蛮兜	1頭	江戸時代	
17 黒漆塗日根野頭形兜	1頭	江戸時代	
18 伊予札紺糸綴陣羽織	1着	江戸時代	●
19 深藍色羅紗地紋付龍・蔦唐草文火事兜頭巾	1頭	江戸時代	●
20 白羅紗地丸に山文字紋付火事装束	1着	江戸時代	
21 徳川十六将図	1巻	江戸時代	●
22 脇差 銘 兼則 附 唐花唐草文金襴貼合口拵	1振	江戸時代	●
23 刀 銘 河内大掾藤原義植/越前住 附 蛸色塗刀拵	1振	江戸時代	●
24 鎧通 銘 政常 附 黒漆塗蝶文小サ刀拵	1振	江戸時代	●
25 十文字槍 銘 近江守継平 附 皺革鞘・黒漆塗柄	1本	江戸時代	●
26 鎖帷子	1着	江戸時代	●
27 気砲	1挺	江戸時代	○
28 気砲記	1巻	江戸時代	○
29 襷早合	1合	江戸時代	○
30 黒漆塗鳶紋付胴乱	1合	江戸時代	○
31 黒漆塗菱紋付胴乱	1合	江戸時代	○
32 黒漆塗丸に二引両紋付胴乱	1合	江戸時代	○
33 三つ扇に片喰紋付胴薬入	1合	江戸時代	○
34 亀甲羅胴薬入	1合	江戸時代	○
35 丸に違い鷹羽根紋付口薬入	1合	江戸時代	○
36 八段鞠袂に片喰紋付口薬入	1合	江戸時代	○
37 太刀筭槍鉄砲名処之図	1巻	江戸時代	○
38 火縄銃（九十匁筒） 銘 芝辻藤左衛門清永	1挺	江戸時代 天保8年	○
39 火縄銃（三匁五分筒） 銘 鍛惣巻張 谷口金蔵内改阿州臣笠井真信	1挺	江戸時代	○
40 茶漆塗一文字形三鱗紋陣笠	1頭	江戸時代	●
41 黒漆塗円錐形兎付鍬形文陣笠	1頭	江戸時代	●
42 黒漆塗円錐形陣笠	1頭	江戸時代	●
43 漆塗円錐三本抱角紋陣笠	1頭	江戸時代	●
44 幟旗・切裂旗	2枚	江戸時代	
参考出品 黒漆塗横剥胴具足 附 長烏帽子形兜（加藤清正複製甲冑）	1具		

*すべて一般財団法人名古屋城振興協会蔵

*都合により出品内容が変更になることがあります。

*●は作品集「武具・甲冑」に掲載している作品

○は作品集「火縄銃」に掲載している作品

(3) 企画展「文化財を伝える」

展示概要

会期 令和 6 年(2024)9 月 14 日(土)～10 月 14 日(月・祝) 31 日間

入館者数 21,713 人(一日平均 700.4 人)

出品件数 33 件

担当者 瀬川貴文

展示趣旨

名古屋城では名古屋城や近世武家文化に関わる資料を継続的に収集、保管している。こうした資料は、時代の変遷の中で様々な人によって残されたものや、さらに、市民の皆様によって守り伝えられてきたものもある。焼失前の名古屋城を記録したガラス乾板写真や昭和実測図は、当時の人々が名古屋城を後世に伝えるために作成した。このおかげで、戦後の高い水準での修理や整備・復元事業が可能となっている。

また、刀剣は近世武家文化を語るうえで欠かせない資料であり、その保存と継承を目的として活動する日本美術刀剣保存協会名古屋支部の会員が所蔵する刀剣類を紹介した。文化財は多様な人々の思いと活動により守り伝えられる。そうした一端を紹介した。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。

第 1 部 文化財を記録する(ガラス乾板写真と昭和実測図)

焼失前の名古屋城を記録したガラス乾板写真や昭和実測図は、名古屋城が保管する資料のなかでもひときわ重要な文化財です。これらは当時の人々が名古屋城を後世に伝えるために作成しました。戦争で天守をはじめ多くの建物が焼けてしまいましたが、これらの記録のおかげで、戦後の整備・復元事業が高い水準で可能となっています。これらは記録をこえた文化財となっています。

1 金城温古録

奥村得義編 江戸時代後期～明治時代成立、明治時代写(19 世紀) 名古屋城総合事務所蔵

尾張藩士奥村得義が編纂した、名古屋城の故事来歴に関する大著である。これにより江戸時代の名古屋城の様子は他城郭に比べて詳細にわかる。この資料は、名古屋離宮時に宮内省が写し、名古屋市に引き継がれた写本である。管理や研究、整備事業に欠かすことができない書物である。

昭和実測図

昭和 5 年(1930)名古屋城が宮内省から名古屋市に下賜され、国宝(旧国宝)に指定されました。昭和 7 年(1932)に名古屋市は国宝建造物の実測事業を開始しました。建物の外観や構造の図面を作成し、金具などは拓本でも記録しました。この事業は戦時中に一時中断されながらも昭和 27 年(1952)に製図が完成する

まで続けられました。戦時の記録に「万一空襲ニヨリ破損シタル場合ノ復旧又万一大破を来シタル時ノ記録トシテ頗ル貴重ナルモノ」とあり、焼失しても実測図を基に復元されることが期待されていました。

2 名古屋城天守南側立面図 昭和実測図 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵

外観の壁・屋根・飾りなどを詳細に記録する。

3 名古屋城天守北側鯨詳細図 昭和実測図 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵

正・背・側面を図にし、寸法を詳細に記録する。

4 天守閣北鯨盗難部分摺物 名古屋市土木部建築課 昭和12年(1937) 名古屋城総合事務所蔵

実測作業は建物に足場を組んで行われた。昭和12年(1937)1月4日、ある男がその足場を利用して天守に登り、北側の金鯨の鱗58枚を取り去る事件が発生した。犯人は1月27日に逮捕された。この資料は、破損した鱗を紙に写して記録したもの。金鯨はこの後修理された。

5 名古屋城正門正面図 昭和実測図 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵

天守と同時に焼失したが、図面などをもとに外観復元された。

6 名古屋城東北櫓東側姿図 昭和実測図 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵

天守と同時に焼失した。現在石垣台が残る。

7 野帳 名古屋市土木部建築課 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵

これらは昭和実測図の作業時などに作成されたメモ。現場で書かれた寸法等の走り書きや、図面を整理する段階のものなどがある。実測図を作成するために、現場での綿密な作業や、整理するための工程を経て製図されたことがわかる。

ガラス乾板写真

名古屋城は、幕末に日本に写真技術が導入された直後から撮影の対象となり、多くの写真が残されている数少ない城郭です。なかでも体系的に撮影されたのが、名古屋市が昭和15年(1940)から開始した国宝建造物の撮影事業です。大判のガラス乾板を用いて、建物の遠景と外観、内部の部屋、柱構造、調度、本丸御殿にでは障壁画や金具までもが細かに写されています。

現在名古屋城で保管する昭和のガラス乾板738枚は、往時の名古屋城の実像を伝え、調査研究や修理、復元の時に欠かせない重要な資料群となっています。

8・11～13・15～22 出品目録のとおり

9 本丸郭内遠景(南西面) ガラス乾板写真 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵
遠景写真から建造物が連なる城内の様子が見てとれる。

10 表二之門正面 ガラス乾板写真 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵
この門は焼失をまぬがれ今に伝わる。重要文化財。

14 東北隅櫓(焼失)棟上銅鯨(南方) 昭和時代 名古屋城総合事務所蔵
櫓は失われたが、この銅鯨は半身が残る。

復元

昭和 20 年(1945)5 月 14 日、名古屋城はアメリカ軍の焼夷弾により多くの建造物が焼失しました。24 棟あった国宝のうち、隅櫓 3 棟(東南隅櫓、西南隅櫓、西北隅櫓)、門 1 棟(表二之門)だけが残りました。昭和 34 年(1959)に本丸の大手守・小天守・西の丸の正門、昭和 53 年(1978)に不明門の外観を復元しました。平成 30 年(2018)には本丸御殿を木造で、外観、内部構造、金具や調度など精巧に復元しています。昭和実測図とガラス乾板写真などの記録があるからこそ可能でした。今後もこうした記録を基礎に整備が行われます。

第 2 部 刀剣を受け継ぐ

明治維新や第二次世界大戦の敗戦による社会変革によって武家や公家などの旧所蔵者から手放された刀剣類を、現代において保存と継承を目的に市民が所蔵することを日本美術刀剣保存協会名古屋支部の活動を通して紹介します。第 2 部展示資料はすべて日本美術刀剣保存協会名古屋支部会員の所蔵です。

1 刀 無銘 則長 金切金塗鞘葵紋打刀拵

刃長 2 尺 4 寸 1 分(73.1 cm) 鎌倉時代(13～14 世紀) 大和国・尻懸派

大和鍛冶は鎌倉時代に僧兵の力が増すとともに各寺院のお抱え工として栄え、五流派がある。本刀は無銘ながら、本阿弥光常の折紙が付く。鍛えは板目に柃目が交じり、刃文は直刃調に連ねた互の目が小さく乱れる。水戸徳川家伝来。

2 太刀 銘 宇多國宗 朱色塗鞘打刀拵

刃長 2 尺 2 寸 8 分(69.2 cm) 南北朝時代(14 世紀) 越中国・宇多派

宇多派は鎌倉時代後期の古入道國光を祖とする。國宗はその子と言われる。鍛えは板目流れて柃目交じり、刃文は互の目に尖りこころの刃が交じる。宇多派は室町時代に大いに栄えたが、作刀時のままの姿で現存する太刀は極めて少ない。

3 太刀 銘 元包 黒呂色塗鞘打刀拵

刃長 2 尺 1 寸 9 分(66.4 cm) 鎌倉時代(13 世紀) 備前国・古備前派

身幅広めに反りの高い刀身の元先に差の少ない鎌倉時代中期の姿をする。鍛えは板目肌に映りを表し、刃文は直刃仕立てに小丁子・小互の目が交じる。製作時のまま現存する太刀は極めて少ない。諏訪藩家老千野家伝来。

4 刀 無銘 長光 黒呂色塗鞘打刀拵

刃長 2 尺 2 寸 5 分(68.2 cm) 鎌倉時代(13 世紀) 備前国・長船派

長光は備前・長船派の 2 代目である。同派は皆名工揃いで、作品も多く残されている。この刀の鍛えは板目肌に乱れ映りを表し、刃文は互の目に丁子を交えた長船派の典型である。長光作の刀剣は、国宝に 6 振、重要文化財に 20 振以上が指定されている。

5 刀 銘 尾州清須住 若狭守藤原氏房 茶石目地塗鞘打刀拵

刃長 2 尺 3 寸 2 分(70.3 cm) 室町時代(16 世紀) 尾張国

氏房は美濃関鍛冶の惣領家である善定一門に生まれた。はじめ兼房を名乗り、永禄 13 年(1570)若狭守を受領し、名を氏房に改めた。晩年、尾張清須に住した。鍛えは板目に柁がかり、刃文は互の目に小湾れが交じる。清須銘は貴重である。子に飛騨守氏房がいる。

6 太刀 銘 備州国分寺助國作(折返銘) 黒呂色塗鞘打刀拵

刃長 2 尺 3 寸 4 分(71.0 cm) 鎌倉時代(13~14 世紀) 備後国

助國は備前の福岡一文字の末裔で、助村の子と伝わる。後に備後国分寺に移る。鍛えは板目が詰んで映りを表し、刃文は浅く湾れ、小互の目交じる。すりあげされた際、作者銘を残すため茎を折り返している。

7 短刀 銘 貞國 筑州住 金梨子地家紋散鞘合口拵

刃長 7 寸 7 分 2 厘(23.4 cm) 南北朝時代(14 世紀) 筑前国・左一派

貞國は左一門の国弘の子と言われ、応安(1368-1375)ごろに活躍した刀工である。左一門の鍛えは板目に杓目交えて沸映りを表し、刃文は小湾れに小互の目を交えて明るく冴える。帽子は突き上げて深く返る。『光山押形』所載、毛利家伝来。

8 脇指 銘 出羽大掾藤原國路 茶梨子地塗鞘脇指拵

刃長 1 尺 2 寸 2 分(37.0 cm) 江戸時代(17 世紀) 山城国・國廣一派

国路は新刀期を代表する刀工である京都堀川住の国広の弟子である。始め「國道」と切銘し、慶長 14 年(1609)頃より「國路」と銘を切る。作刀期間は長く、多くの作品を残している。鍛えは板目に杓交じり、刃文は大互の目・湾れ・直刃調の刃交じり。華やかな出来であり、表裏に彫刻を施す。

9 短刀 銘 飛騨守藤原朝臣氏房作 慶長十年八月日 黒呂色塗鞘合口拵

刃長 9 寸 7 分(29.4 cm) 江戸時代(1605) 尾張国

氏房は美濃鍛冶・若狭守氏房の子。天正 20 年(1592)に関白豊臣秀次の斡旋で飛騨守を受領した。清須に住し、慶長 15 年(1610)の名古屋城築城に伴い城下に移住した。刃文は湾れに互の目交じり、働きの豊富な出来であり、鍛えは杣目肌良く詰んで美麗である。表裏に彫刻を施す。

10 脇指 銘 近江大掾藤原忠廣 寛永二十年二月日 朱色塗鞘脇指拵

刃長 1 尺 2 寸 3 分(37.3 cm) 江戸時代(1643) 肥前国・忠吉派

初代忠吉の子。寛永 18 年(1641)に近江大掾を受領した。80 歳で没し、優れた作品が多く残る。表切刃造、裏平造、身幅広く、鍛えは小板目よく詰み、刃文はのどかな湾れ刃を焼き沸が深い。表裏に彫刻を施す。

出品目録

西の丸御蔵城宝館企画展

「文化財を伝える」

出品目録

会期：令和6年9月14日(土)～10月14日(月・祝)



名古屋城では名古屋城や近世武家文化に関わる資料を継続的に収集、保管しています。こうした資料は、時代の変遷の中で様々な人によって残されてきました。さらに、市民の皆様によって守り伝えられてきた文化財もあります。

焼失前の名古屋城を記録したガラス乾板写真と昭和実測図は、当時の人々が名古屋城を後世に伝えるために作成した文化財です。このおかげで、高い水準での修理や整備・復元事業が可能となっています。

また、刀剣は近世武家文化を語るうえで欠かせない資料であり、その保存と継承を目的として活動する日本美術刀剣保存協会名古屋支部の会員が所蔵する刀剣類を紹介します。

文化財は多様な人々の思いと活動により守り伝えられます。そうした一端を紹介します。

第1部 文化財を記録する(ガラス乾板写真と昭和実測図)

番号	名称	頁数	時代	備考	資料種別/建物など	寸法等(縦×横cm)
1	金城温古録	一括	明治時代写	19～20世紀		—
2	名古屋城天守南側立面図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/大天守	68.0×98.5
3	名古屋城天守北側鯉詳細図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/大天守	68.0×98.5
4	天守閣北鯉盗難部分摺物	1組	昭和12年	1937年	大天守	—
5	名古屋城正門正面図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/正門	68.0×98.5
6	名古屋城東北櫓東側立面図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/東北隅櫓	68.0×98.5
7	野帳	一括	昭和時代	20世紀		—
8	本丸敷地内建造物(焼失)俯瞰	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/大天守、小天守、本丸御殿	25.4×30.5(四切)
9	本丸郭内遠景(南西面)	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/大天守、小天守、西南隅櫓	25.4×30.5(四切)
10	表二之門正面	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/表二之門、東南隅櫓、枡形	25.4×30.5(四切)
11	正門(焼失)正面	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/正門	25.4×30.5(四切)
12	天守閣(焼失)南面	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/大天守	25.4×30.5(四切)
13	東北隅櫓(焼失)内2階東北側	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/東北隅櫓	25.4×30.5(四切)
14	東北隅櫓(焼失)棟上銅鯉(南方)	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/東北隅櫓	30.5×25.4(四切)
15	玄関一之間北側壁貼絵(焼失)	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	25.4×30.5(四切)
16	対面所上段之間西側連棚(焼失)	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	16.5×21.6(八切)
17	上洛殿上段之間(焼失)東北側	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	30.5×25.4(四切)
18	上洛殿上段之間天井板絵部分	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	25.4×30.5(四切)
19	本丸御殿車寄(焼失)正面外観	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	25.4×30.5(四切)
20	名古屋城御殿玄関車寄大廊下南側立面図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/本丸御殿	68.0×98.5
21	上洛殿一之間より上段之間(焼失)東北側を望む	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	25.4×30.5(四切)
22	名古屋城御殿上洛殿上段之間四面起図	1枚	昭和時代	20世紀	昭和実測図/本丸御殿	68.0×98.5
23	上洛殿上段之間東側帳台構 北より4本目柱釘隠(焼失)	1枚	昭和時代	20世紀	ガラス乾板写真/本丸御殿	25.4×30.5(四切)

すべて名古屋城総合事務所所蔵です。出品番号は展示順と異なります。

第2部 刀剣を受け継ぐ(「第48回 名古屋城刀剣展示会」)

番号	名称	頁数	製作年代	国・流派	刃長
1	刀 無銘 則長 金切金塗鞘葵紋打刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13～14世紀	大和国・尻懸派	2尺4寸1分(73.1cm)
2	太刀 銘 宇多國宗 朱色塗鞘打刀拵	1振 1口	南北朝時代 14世紀	越中国・宇多派	2尺2寸8分(69.2cm)
3	太刀 銘 元包 黒呂色塗鞘打刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13世紀	備前国・古備前派	2尺1寸9分(66.4cm)
4	刀 無銘 長光 黒呂色塗鞘打刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13世紀	備前国・長船派	2尺2寸5分(68.2cm)
5	刀 銘 尾州清須住 若狭守藤原氏房 茶石目地塗鞘打刀拵	1振 1口	室町時代 16世紀	尾張国	2尺3寸2分(70.3cm)
6	太刀 銘 備州国分寺住助國作 黒呂色塗鞘打刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13～14世紀	備後国	2尺3寸4分(71.0cm)
7	短刀 銘 貞國 筑州住 金梨子地家紋散鞘合口拵	1振 1口	南北朝時代 14世紀	筑前国・左一派	7寸7分2厘(23.4cm)
8	脇指 銘 出羽大掾藤原國路 茶梨子地塗鞘脇指拵	1振 1口	江戸時代 17世紀	山城国・國廣一派	1尺2寸2分(37.0cm)
9	短刀 銘 飛騨守藤原朝臣氏房作 慶長十年八月日 黒呂色塗鞘合口拵	1振 1口	江戸時代 1605年	尾張国	9寸7分(29.4cm)
10	脇指 銘 近江大掾藤原忠廣 寛永二十年二月日 朱色塗鞘脇指拵	1振 1口	江戸時代 1643年	肥前国・忠吉派	1尺2寸3分(37.3cm)

すべて日本美術刀剣保存協会名古屋支部会員の所蔵です。出品番号は展示順と異なります。

(4) 企画展「名古屋城と名古屋まつり」

展示概要

会期 令和 6 年 10 月 19 日(土)～12 月 15 日(日) 58 日間
前期 10 月 19 日(土)～11 月 15 日(金) 28 日間
後期 11 月 16 日(土)～12 月 15 日(日) 30 日間

入館者数 28,063 人(1 日平均 483.3 人)

出品件数 34 件

担当者 朝日美砂子

展示趣旨

江戸時代の名古屋城下では、東照宮祭礼をはじめとする祭礼があり、からくり人形をのせた山車が繰り広げられた。第二次世界大戦により大半の山車が焼失したが、名古屋まつりという名称のもと、秋の名古屋の祭として市民に親しまれている。

本展では、名古屋東照宮の御神宝をはじめ、江戸時代の祭の賑わいを描く絵巻などを展示し、今につながる市民の楽しみを紹介した。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

解説パネル

I 名古屋城と名古屋のまつり

江戸幕府初代将軍徳川家康は元和 2 年(1616)4 月 17 日、駿府城で亡くなった。家康は東照大権現として神格化され、命日である 4 月 17 日には家康を祭神とする東照宮祭が日光をはじめとする全国の東照宮で営まれた。名古屋東照宮は家康の九男で初代尾張藩主となった徳川義直により、元和 5 年(1619)9 月 17 日、名古屋城三之丸に建立された。毎年 4 月 17 日には東照宮祭が尾張藩により挙行された。三基の神輿が名古屋東照宮を出発し、城南末広町の御旅所をめざして本町通を南下し、山車九輦と大勢の仮装行列が供奉する、盛儀を尽くした祭礼であった。明治維新後、東照宮祭は形をかえながらも存続し「名古屋祭」として市民に親しまれた。昭和 20 年(1945)の空襲により九輦の山車全てが焼失したが、昭和 30 年(1955)から名古屋市主催の「名古屋まつり」が開催され、英傑行列をはじめとするイベントが行われている。

II 本町通と宗春治世

東照宮祭の舞台となった本町通(本町筋)は名古屋城本町御門から南に延びる道で、幅も広く、城下の基幹道路であった。名古屋東照宮の南には成瀬家・竹腰家という尾張藩家老の広大な邸宅があり、本町御門をへて碁盤目状の武家屋敷が続く。東西の大通りである広小路と交差して寺町に入り、さらに南へ続き熱田にいたる。享保 15 年(1730)に尾張藩七代藩主となった徳川宗春(1696-1764)は、藩士の芝居見物を許す

など、規制を緩め消費を奨励した。その結果、本町通沿いに芝居小屋や料理屋が立ち並び、老若男女の娯楽の場としてにぎわった。しかし宗春は、行き過ぎた規制緩和を幕府から咎められ、元文元年(1736)には芝居小屋の数を減らすなどの規制強化に転じた。事態は収束せず、元文4年(1739)正月、謹慎蟄居を命じられる。本町通の賑わいは、わずか数年で幕を下ろしたのである。宗春治世下における本町通の繁栄を描く唯一の絵画が「享元絵巻」である。尾張藩家老であった石河男爵家に伝来し、戦後名古屋城振興協会の所有となり、同協会から名古屋城管理事務所に寄贈され、今に至っている。

III 「享元絵巻」の成立年代

「享元絵巻」は、縦約56cmという大形の絵巻である。その画面一杯に、南北にのびる本町通を左右方向に俯瞰して描いている。巻頭が今の広小路本町の交差点で、むかって右が北、左が南となる。本町通の東西に、寺や神社、芝居小屋、見世物小屋、料理屋がぎっしりと立ち並ぶ。巻末に広がる建物は、西小路、葛町、富士見町の三遊郭である。富士見遊郭の中の芝居小屋に「浄瑠璃太夫 宮古路豊後」という看板がある。宮古路豊後(1660-1740)は京都の浄瑠璃太夫。名古屋の畳屋喜八と遊女おさんが起こした心中事件をもとに、享保19年(1734)当地で「睦月連理椿」を上演した。この人形浄瑠璃は大当たりし、翌年には江戸に打って出てさらに評判となった。しかし元文4年(1739)幕府に咎められて上演禁止とされ、宮古路豊後は翌年没した。よってこの看板のみから言えば、「享元絵巻」の景観年代は享保19年(1734)となる。当時流行の食物も描いており、まさに享保・元文期の名古屋を知ることができる。実際の制作時期は、宗春が失脚した元文四年以降の可能性が高く、有力者の肝入による制作と考えられる。宗春を賛美する内容であるため、宗春が復権する幕末期までは秘蔵されたはずである。

IV 「享元絵巻」 グルメストリート

「享元絵巻」には、菓子屋や小料理屋がたくさん出てくる。たとえば「幾世餅」。享保18年(1733)刊『江戸名物鹿子』に「両国の幾世餅」がのっており、汁粉のような甘い餅で、遊女を受け出された幾世が江戸の両国で売り出し、評判となったという。「享元絵巻」成立時期、最新の江戸グルメであったのだ。「幾世餅」のとなりは「赤福」。延享3年(1746)編「ゆめのあと」(名古屋市蓬左文庫本)には「伊勢より飛び来りて風味あらた也」とあり、名古屋人には目新しい味であった。「いろいろ餅」、「姫まんじゅう」など、大小の甘い餅も売り出されている。目立つのは「芝居弁当」の看板。当時の芝居(歌舞伎・浄瑠璃)は一日がかりの上演で、飲食品持ち込みが普通であった。「川うなぎ」もある。当時の蒲焼は、鰻をぶつ切にして焼き、塩や味噌をつけ、酒の肴としたもの。「うどん」は、店頭で小麦を練り、伸ばしている。なぜかきしめんは登場しない。小料理屋にならんで小間物屋や香りたばこ屋、香油屋もあり、芝居に食事、そしてしゃれた買物まで楽しめる、一大消費地がこの本町通であった。

V 「享元絵巻」 歓楽街の表裏

「享元絵巻」に記された料理屋や旅館の屋号は、宗春治世下の賑わいを懐古する「ゆめのあと」・「名古屋錦」などの書物類にも登場しており、実在した店と考えられる。たとえば「浅野屋」は、酒と鰻で知られていた。「美濃屋」は、酒と蛸、焼き海老を出す手軽な店だったという。「いろはや」は長崎風の「しっ

ぼく料理」で、「笹屋」は女芝居小屋。「かし座敷」・「酒肴有」という看板は、酒と手軽な料理を出し昼間利用も可能な安宿である。ただし「享元絵巻」の店の位置は「ゆめのあと」とは異なっており、正確な再現ではない。「享元絵巻」後半は、東西の本願寺と広大な遊郭街である。宗春は享保16年(1731)、遊廓設置を公認し、翌年三遊郭が開業した。最も立派な西小路遊郭(『享元絵巻』上方)は、28軒の茶屋が1,244人の遊女を抱えていた。本町通をはさむ東側(下方)が富士見遊廓で、巻末が葛町遊廓である。駕籠に乗る上級武士や僧、町人や若い女性など、実にさまざまな年齢・職業の人々が、昼間から遊郭街に繰り出し買物と酒食を楽しむ様子がうかがえる。しかし、元文元年(1736)、幕府の圧力により宗春は遊郭の退去を命じ、元文3年には遊郭自体禁止した。遊郭街は、もとの空き地に戻ったという。

VI 「享元絵巻」への新視点

「享元絵巻」巻頭は梅が咲く新春で、正月二日の初荷が駆ける。大須清寿院境内では大相撲が行われ、櫓を掲げた芝居小屋では大勢の若女形や立役の名を看板に大書する。尾張の芝居の記録集『尾陽戯場事始』(天明2年・1782序)によれば、宗春治世前は江戸・上方の看板役者が来ることはなかったが、宗春の芝居奨励により名古屋に参集したという。大須観音真福寺の仁王門の前には見世物小屋が建ち、怪力の俵持や、信濃駒ヶ根産という角を生やした馬などの看板が並ぶ。『人倫訓蒙図彙』(元禄3年・1690刊)に載る放浪の宗教者「高履」も交じる。諸芸の者が、門前の雑踏の中にさりげなく描かれているのである。喧噪を描く一方、七寺三重塔など古刹を象徴する建物はきっちりととらえられ、遊郭は同じ角度の俯瞰視で整然と描かれる。さらに筆者は、季節描写を忘れていない。春の桜、夏の菖蒲、秋の芙蓉から紅葉へと季節は移り、薄のゆれる裏庭で着物を洗う女性が一卷を締めくくる。こうしてみると「享元絵巻」は、享保元文期の職人尽絵であり遊楽図であり四季名所絵でもある。単なる歴史資料にとどまらず、中世以来の四季名所風俗図の系譜を引く正統的な絵画なのである。

VII 東照宮祭礼図巻

本町通は、城下最大の祭礼である東照宮祭の舞台でもあった。家康命日の4月17日、山車行列に先導された三基の神輿が、名古屋城下三之丸の名古屋東照宮を出て本町通を南下し御旅所にむかう。「東照宮祭礼図巻」七巻本は、この祭礼を絵に残すよう藩主から命じられた画家が、文政5年(1822)、藩に提出した伺下絵である。写真のない時代、行事の記録画を制作するのは御用絵師の任務であったが、当時の藩主十代斉朝は先例に従わず、森高雅(1792-1864)という新進の浮世絵師に命を下した。各町内が提出した山車・練物の文字記録も高雅に示され、高雅は自身の写生を加えてこの伺下絵を提出した。藩主の指示により大幅に書き換えた完成作品九巻が、同年藩主に献上され、徳川美術館(名古屋市中区)に伝えられている。一方返却された伺下絵は高雅が保管していたらしく、30年後高雅自身により箱に納められ、今は名古屋市博物館(名古屋市瑞穂区)が所蔵する。下絵本のみ名古屋城内の建物を描いており、藩政に関わる場面が藩命により削除されたことがわかる。家臣の家紋や店の屋号も、献上本では削除された。彩色のある巻、簡略な墨線だけの巻など、巻によって完成度に差があり、下絵制作の過程もわかる。

VIII 名古屋東照宮の御神宝

名古屋東照宮の御神宝として、三振の太刀が知られていた。銘「国行」(國行・鐔は葵・桐紋)、銘「遠近」、銘「正恒」の三振であり、東照宮祭では、それぞれ東照宮・山王・日光の神輿に従っていた。また明治以降の名古屋東照宮の宝物台帳には、御神宝の三振の他に銘「国行」(國行・鐔は桐紋)と銘「直吉」の二振が宝物として登録されている。これらの太刀五振は関係神社に移管されるなどし、現在、「国行」銘(葵・桐紋鐔)一振が名古屋市博物館、別の「国行」銘(桐紋鐔)一振が徳川美術館に所蔵されている。とくに名古屋市博物館所蔵の「国行」(出品番号 17)の拵は、葵紋と桐紋の両紋を鞘と鐔にあしらうもので、その仕様が江戸時代の諸記録と一致することから、名古屋東照宮第一の御神宝であったことが確認できる。さらに、森高雅筆「東照宮祭礼絵巻」(5)や『張州雜志』に描かれた袋も現存しており、江戸時代前期の東照宮の盛儀のさまを伝えるきわめて貴重な御神宝といえる。

IX-1 名古屋東照宮の御神宝 袋

「太刀 銘国行」(出品番号 17)は、東照宮祭では華やかな拵袋に入れられ、烏帽子をかぶった町代に担われていた。袋の色は『張州雜志』(1788 年以前成立)では紺色で、森高雅筆「東照宮祭礼図巻」(1822 年成立)では赤色であり、明治以降の宝物台帳には「赤地錦」と記されている。現在太刀には紺地と赤地の旧袋二点が付属しており、紺地が『張州雜志』に描かれた古い袋、赤地がその後新調された袋とわかる。

IX-2 名古屋東照宮の御神宝 箱

名古屋東照宮は、昭和 20 年(1945)の二度にわたる空襲により本殿など国宝建造物の大半を失った。しかし祭礼資料の多くは焼失をまぬがれ、木箱に入れられ戦後も大切に保存されてきた。箱には江戸時代の墨書や書付があり、伝来の様子を伝えてくれる。たとえば「空穂」は、箱蓋の墨書から、尾張藩の細工所で箱が作られたことが知られる。東照宮祭の挙行には膨大な神宝が必要で、それらも尾張藩の費用で箱が作られ、東照宮内で保管されたと考えられる。一方、御神宝の太刀三振を納めていた箱は、御神宝の箱としては簡素で、紙に書かれた墨書が裏面に貼られている。明治維新後新しく作られた箱に、古い記録が貼り込まれた可能性が高い。

IX-3 名古屋東照宮の御神宝 旗

主要神事である神輿渡御には、六流の神旗が随行した。東照宮の神輿には青龍・白虎、山王神輿には朱雀・玄武、日光神輿には勾陳(金色の蛇)・騰蛇(炎に包まれた蛇)の旗が先導した。江川町・樽屋町(いずれも現名古屋市西区)の町人が捧げ持つ決まりであった。名古屋東照宮には、江戸期のものと思われる六流と、ミシン目があり大正以降の新作と思われる六流の計十二流が伝えられる。ここでは後者を展示する。

X 「天下泰平」旗指物

東照宮祭では、工夫をこらした練物行列が各町内から出された。中でも人気は、十四の町内が合同で出す旗指(旗差)の練物(武者行列)で、『張州雜志』によれば総勢 75 名の町人が揃いの具足(鎧と兜)を着用

し、町ごとに異なる旗を差して練り歩いた。具足は名古屋城の多門櫓に保管される「お貸具足」を拝借したという。御園町と下御園町の旗は、「天下泰平」の文字を染めたもので、7名の町人が差し、各町の責任者である裁許人と床几持が付き添った。

XI 受け継がれる東照宮祭

明治維新後、東照宮祭は中断を余儀なくされたが、明治14年(1881)、徳川家の援助と各町内の尽力により、地域のまつりとして東照宮祭が復興された。それに先立って明治8年(1875)、藩祖義直と二代光友が東照宮に合祀されており、明治18年(1885)からは「名古屋祭」という名のもと、東照宮と義直の神輿を山車と甲冑姿の旧士族らが供奉する形となった。当時の新聞記事や写真から、人々が熱狂的に名古屋祭を見物したことがうかがえる。

作品解説

1-1 葵紋散鞍・鐙のうち 鞍 江戸時代前～中期 名古屋東照宮蔵

名古屋東照宮の御神宝。4月17日の東照宮祭で、神馬の背にのせられていた鞍一式である。内藤東甫(1728-88)編『張州雑志』は、神馬三頭のうちの筆頭は「梨子地蒔絵金具御紋」の鞍を着用すると記しており、まさにこの鞍のことと考えられる。箱の裏に、安政2年(1855)に箱を調進した旨の墨書がある。人が座る鞍橋(鞍骨。いわゆる鞍)、二枚重ねの轡、泥除けの障泥、鐙を吊り下げのための力皮、胸繫や尻繫を留めるための四緒手などが当初のまま揃っている。鞍橋は、金の蒔絵粉を蒔いた梨子地蒔絵に、金銀銅の葵紋形薄板を貼り、前輪や後輪、轡の裾の野杓には、葵紋を金蒔絵で表す。なお前輪・後輪ともに海と磯があり、海有鞍となる。

1-2 葵紋散鞍・鐙のうち 鐙 江戸時代前～中期 名古屋東照宮蔵

鐙は、騎馬のさい足を置くもの。ただし本作品は東照宮祭の神馬に付ける御神宝であり、人が乗ることはない。「葵紋散鞍」(出品番号1)と同様葵紋を散らし、意匠を統一している。

2 尾州名古屋城下図 江戸時代前期 名古屋城振興協会蔵

江戸時代前期の名古屋を描く絵図。万治年間名古屋図として知られてきた。左上が堀に囲まれた名古屋城。内部は白く抜かれ、秘密とされていたことがわかる。名古屋城本町御門から画面中央を南北に伸びる道が本町通。万治3年(1660)の大火のあと拡張された広小路が、画面ほぼ中央を横切っている。『金城温古録』の著者奥村得義の養子定による添書があり、定の曾祖父の時代から奥村家に伝わっていたこと、万治年間(1658-61)に成立し延宝年間(1673-81)に改定されたことが記されている。

今徴之 諸書此圖萬治年製而／延寶年為訂正之物不容疑焉／

表書并裏書予曾祖父之傳／宝曆年中之書也／累世所口蔵主 奥村定鑑識／

于時明治四十二年六月

3 享元絵巻 享保 19 年(1734)以降 江戸時代中期

徳川宗春が尾張藩主となり治世を開始した享保 16 年(1731)から綱紀肅正に転じた元文元年(1736)までの、広小路本町から南の地域の繁栄を描く絵巻。箱蓋表に「享元絵巻」と記す貼紙があり、この名で知られてきた。

- ①絵巻巻頭の右下隅に、煙管を手にする謎の人物がいる。絵巻では、注文主など関係者が描かれる定位置である。
- ②小路と本町通がまじわる辻。路上で軽業師が三段重ねの三方に乗る。紅白の餅を売る者もいる。立看板は、大須の芝居小屋の宣伝。
- ③本町通を駆け抜ける初荷の車。梅が咲き柳も芽吹く新春の景である。
- ④正月の寿ぎに來た、伊勢太神樂の一団。獅子が舞い、箱に乗せた大太鼓を打つ。「浅野屋」、「美濃屋」という料理屋もある。
- ⑤若宮八幡の境内。櫓をあげた芝居小屋が、役者名を看板に書き客を呼び込む。名古屋の賑わいを知り、江戸・京・大坂の役者が集まったという。
- ⑥いろは屋、おもだか屋、笹屋、若松屋など、料理旅館が軒をならべる。実在した店であるが、場所や店先の品はかなり異なる。
- ⑦その南(左)の立派な二階建ては、藩主宗春の隠茶家「このくにや」であるらしい。
- ⑧看板は、「江戸幾世餅・赤福餅・芝居弁当・大あたり」。幾世餅は、遊女あがりの幾世が江戸の両国で売り出し人気となった、最新グルメ。右側は「新そば有」。秋の新蕎麦粉を打ち、麺棒でのばしている。左側は「香入りたばこ」。
- ⑨「浄瑠璃太夫 宮古路豊後」が上演中。富士見遊郭の中の芝居小屋で享保 19 年(1734)に初演され大当たりとなった人形浄瑠璃。梵天を掲げた櫓で太鼓を打ち、にぎやかに客を呼び込む。
- ⑩西本願寺の太鼓池。菖蒲の花が咲く、初夏の庭である。
- ⑪高履とも呼ばれる放浪の宗教者。高下駄を履き、櫛の枝を挿した手桶を頭に載せ、櫛で水をふりかけ祭文を唱えたという。
- ⑫右上から「小間物いろいろ・湯屋・御香油・饅頭・田楽」。田楽屋は、団扇を持ち串にさした豆腐を焼いている。
- ⑬大須観音(真福寺)の仁王門。赤く塗られた阿吽の仁王が描かれている。
- ⑭看板は「奈良茶めし 酒肴色々」。奈良茶飯は、炒り大豆と塩を入れほうじ茶で炊きあげた飯。奈良発祥だが、江戸の浅草寺付近の店でも出されてから人気となった。小屋の中の茶碗が茶飯、小皿が肴。
- ⑮西小路遊郭の芝居小屋と花魁道中。鮮やかな紅葉が郭を彩る。
- ⑯山王稲荷(古渡)の赤鳥居と葛町遊郭。新蕎麦屋、うどん屋に「かし座敷 酒肴有」のあやしげな店が混じる。
- ⑰七寺の三重塔。奥に芝居小屋の看板がある。三重塔は惜しくも戦災で焼失したが、観音菩薩・勢至菩薩がのこる(国指定重要文化財)。
- ⑱巻末は、歓楽街の裏庭でのお洗濯。着物をほどいて反物の形に仮縫いし、伸子針をつけた竹ひごで形を整え、木に吊るして乾かす。薄がそよぎ、さわやかな秋の時間が流れる。

4 享元絵巻絵葉書 五枚 封筒付き 昭和前期 個人蔵

名古屋近辺の古社寺や古美術品を撮影し出版していた名古屋温故会の絵葉書。封筒に「男爵石河光昂氏所蔵 享元繪巻」とあり、戦前から石河男爵家所蔵品として知られていたことがわかる。石河光昂(1882-1932)は、尾張藩家老石河家に生まれ、大正12年(1923)家督を継ぎ二代男爵となった。

5 東照宮祭礼図巻 箱蓋

(表)文政壬午御改正 四月十七日／名古屋御神事 御還幸車練物棧敷細画／半出来巻物下地

(裏)壹枚目 御成 出来／三枚目 成瀬様前 出来／四枚目 三ノ丸御番所前 出来／

六枚目 町役所前 出来／七枚目 御茶屋前 半出来／終 末廣町通 半出来／

御旅所前 〃出来／〆七枚／森高雅／此箱出来 嘉永寅戌年五月吉日

5-1 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻一 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

十代藩主斉朝の命により東照宮祭の行列図を描くことになった森高雅が、斉朝に提出した伺下絵。第一巻では名古屋城内の大手守や隅櫓を描く。完成品である徳川美術館蔵「東照宮祭礼図巻」九巻本に名古屋城内の図はなく、貴重である。

5-2 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻二(前期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻二は、行列の最後尾を描いている(行列先頭は巻七に登場する)。東照宮別当の尊寿院が長柄輿に乗り、尊寿院末寺の僧侶が騎馬で従う。画面上(東側)の立派な門には酢漿草紋があり、付家老であった成瀬家の屋敷とわかる。

5-2 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻二(後期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻二後半は、名古屋城三之丸に設けられていた「御厩座敷」と、きらびやかな天冠をかぶった大童子を描いている。御厩座敷では藩主斉朝が祭を見物していたはずだが、その姿は御簾で隠されている。

5-3 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻三(前期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻三は、東照宮祭でもっとも重要な神輿渡御の場面である。東照宮・山王・日光の神輿を六流の神旗が先導する。西側の屋敷の幕にはいわゆる織田木瓜紋が染め抜かれている。

5-3 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻三(後期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻三は、東照宮祭でもっとも重要な神輿渡御の場面である。東照宮・山王・日光の神輿を四神旗が先導する。東側の屋敷の幕には、滝川家の木瓜花菱紋が染め抜かれている。行列は左(東)に曲がり、三星一文字紋の幕がかかった渡辺家屋敷の前を通る。

5-4 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻四(前期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻四には、各町内から出された華やかな練物(仮装行列)が描かれる。展示は、揃いの具足を着た町人たちの大行列。「天下泰平」の旗を差した御園町・下御園町の武者もいる。

5-4 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻四(後期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻四後半は、本町通茶屋町(今の名古屋東照宮周辺)を中心とした、練物(仮装行列)と見物人のにぎわいを描いている。「呉服太物類 現金掛値なし」と大書されるのは、松坂屋いとう呉服店の大暖簾。いとう丸(丸の中に井桁と藤)の商標は今も大丸松坂屋で用いられている。

5-5 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻五(前後期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻五は、本町通を南下する練物を引き続き描いている。西側には、料理屋や魚屋がびっしりと軒を並べ、町人が酒食を楽しんでいる。実際には藩からの達しにより祭当日店は閉じており、目立つ宴会は不可能であった。

5-6 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻六 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻六の前半部(前期展示)は、ほとんど色のない線描画である。将軍や藩主に提出される伺下絵は、きちんと彩色したものが一般的であるため、ここでの高雅は提出を急がされたのであろう。前例にこだわらない、藩主斉朝の性格もあったのかもしれない。巻六の後半部(後期展示)は、祭の華ともいえるべき橋弁慶車を描く。全体に薄彩色であるのに山車には濃彩が施されている。高雅は、下絵提出を急がされる中、山車好きの藩主を慮り山車だけには色をつけたのであろう。

5-7 東照宮祭礼図巻 全七巻のうち巻七(前後期展示) 森高雅筆 文政5年(1822) 名古屋市博物館蔵

巻七は行列の先端が御旅所に入る場面である。御旅所は、東照宮から約2km南の本町通沿いの地(若宮八幡宮の北)に設けられていた。

6 東照宮祭旗指物「天下泰平」 江戸時代後期 個人蔵

東照宮祭で実際に用いられていた旗指物。今は乳(竿を通す輪)を断ち落とし掛軸に仕立てられている。「天下泰平」の文字が青地に白く染め抜かれており、御園町・下御園町の旗指物七流のうちのひとつとわかる。旗指物がのこることは少なく、貴重である。

7 東照宮祭旗指武者図 安政5年(1858) 渡辺清筆 個人蔵

「天下泰平」の旗さす武者を描く。筆者の渡辺清(1778-1861)は、穏やかな大和絵を描き人気のあった名古屋の画家。清作品には珍しく「八十一翁」の年紀がある。ぼつりとした筆使いも、晩年期の様式を示している。

8 東照宮祭林和靖山車図 江戸時代後期～明治 喜田華堂筆 個人蔵

祭の山車を描く掛軸は少なくない。名古屋の祭好きは、祭の日の床の間に飾るべく一年に一回しか掛けられない山車の絵を集め、わくわくして当日を待ったのである。本図は、当地の四条派系の画家喜田華堂(1802-79)による、伝馬町の林和靖車図。

9 名古屋祭図 林和靖車・橋弁慶車・狸々車 明治 柳田樵谷筆 名古屋城振興協会蔵

中幅に七間町の橋弁慶車、むかって右幅に林和靖車と東照宮、左幅に本町の狸々車と名古屋城天守を描く。筆者の柳田樵谷(1849-?)は名古屋の四条派系の画家。

10 名古屋祭図 大正 今泉樸溪筆 名古屋城振興協会蔵

名古屋祭の山車全九輦を描く三幅対。今泉樸溪(1869-?)は広小路に住んだ画家で、祭好きであったらしく、遺作は東照宮祭の絵が圧倒的に多い。山車は巡行順に描かれており、右幅が橋弁慶、林和靖、雷電。中幅が二福神、湯取、唐子。左幅が小鍛冶、石橋、狸々。

11 名古屋祭図 林和靖車・雷電車 大正 伊勢門水自画賛 名古屋城振興協会蔵

宮町の唐子車と伝馬町の林和靖車を、祭や狂言の絵で知られる伊勢門水(1859-1932)が描く。賛は、くるくる回る唐子と、梅と鶴を愛した林和靖を詠む。

小車に遊ぶ唐子のさま見ても／けにおもしろきけふの祭りや／
これやこの鶴と梅とを友とせし／聖のすかたうつし出けむ

12 林和靖車人形覚 享保 17 年(1732) 名古屋東照宮蔵

宗春の祭豪華化政策を受け、享保 17 年、伝馬町(今の中区錦一丁目・二丁目)の山車が梵天王車から林和靖車へ一新された。本書は、人形一式を注文された大坂の人形師山本飛騨掾らが伝馬町に提出した代金・仕様の覚書。地元名古屋ではなく大坂の著名な人形師に注文したところにも、当時の上昇志向の気風がうかがえる。

13 名古屋東照宮神事山車引出シ之図

明治 18 年(1885)5 月 1 日届・20 日出版 塚本康満画 名古屋城振興協会蔵

山車九輦を描く錦絵。金泥が使われ、刷りも極上である。「版權所有 名古屋市中区茶屋町 東照宮発行所 東照宮社務所」と記されており、東照宮祭が名古屋祭の名で復活した明治 18 年、名古屋東照宮が発行した記念的な錦絵とわかる。この後同様の刷物が数多く出版されるがこれほど美しいものはない。

14 名古屋東照宮神事山車引出シ之図

明治 18 年(1885)5 月 1 日届・20 日出版 塚本康満画 名古屋東照宮蔵

13 とほぼ同じ図様の刷物。出版日と出版人も同じだが、名古屋東照宮の名はない。仔細に比較すると描線が微妙に異なり、色版もずれている。同じ下絵を用いつつ新たな墨版を起し、合羽摺という簡易な方

法で色を刷った廉価版の土産物と考えられる。出版人の塚本康満は東照宮のそばに住んでおり、同工の刷物を多数のこしている。

15 名古屋東照宮例祭行粧之図 明治 27 年(1894)5 月 8 日印刷 塚本康満画 名古屋東照宮蔵

明治 18 年からの名古屋祭では、神輿は家康と義直の二基となった。練物行列も縮小され、「天下泰平」の旗は六流に減り模様も変わったようだ。本刷物が印刷された 5 月 8 日は、旧暦では 4 月 4 日。旧暦 4 月 17 日の祭礼にあわせて刷られ、当日は絵草紙売が竹にはさんで本町を売り歩いた。ふだんは別の商売屋が、この日だけ絵草紙売に転業したという。

16 玄武 神旗のうち 大正～昭和前期 名古屋東照宮蔵

山王神輿を先導していた神旗。北を護る玄武を描いている。制作時期は不明であるが、江戸時代の旗の図様を忠実に踏襲した近代の補作と考えられる。絵を描いた布の間に一枚の薄布をはさみ、ミシンで縫い合わせている。剥落がひどく、いたましい。

17 太刀 銘 国行 付 桐葵紋散糸巻太刀拵 太刀 鎌倉時代中期 拵 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

国行は、山城国来派の祖で、鎌倉時代中期に活躍したとされる。遺品の多くは太刀で、十振以上が国宝や重要文化財に指定されている。本作品には、桐葵紋を散した糸巻太刀拵と、葵紋と桐紋をあらかず鍔が付属しており、名古屋東照宮の宝物台帳や『張州雑誌』の記述と一致する。

17 太刀 銘 国行 拵袋 江戸時代 名古屋市博物館蔵

「太刀 銘 国行」の拵を入れていた袋二枚。紺地が 18 世紀以前、赤地が 19 世紀のものと考えられる。

参考出品 太刀 箱蓋(裏) 寛政 7 年(1795)貼紙 名古屋東照宮蔵

現在長刀類を保管する箱。蓋裏の墨書から、名古屋東照宮御神宝の太刀が三振あり、明和 2 年(1765)家康の百五十回忌にあわせて研ぎに出され袋が作られ、30 年後の寛政 7 年(1795)再び袋が新調されたことが知られる。最初の行に記された「國行」の太刀が、出品の太刀である。残りの二振も現存し、重要文化財に指定されている。なお山王社の太刀は、江戸時代は銘「宗近」とされてきたが、「遠近」が正しく、別筆で「遠近」に訂正されている。

御太刀三振

東照宮

山王

摩多羅新

一國行 一振

一宗近 一振

一正恒 一振

御拵金作り 御鞘梨地

遠

御拵金作り 御鞘梨地

御紋葵桐 御袋赤地錦

御拵金作り 御鞘梨子地

御袋紺地錦

御紋桐 御袋萌黄地錦

明和二酉年四月就

百五十回御神忌御研

御袋出来

寛政七卯年四月

御祭禮前御袋出来

18 葵紋散小太刀拵刀 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

葵紋を散らす小振りの太刀の拵。鮫皮の柄、棗鐔、二尾の鮒形を完備する。単独の朱塗箱に保管されてきたが、名古屋東照宮宝物台帳に記載がなく、伝来詳細はわからない。

19 呂色塗金葵紋馬柄杓 江戸時代中期 名古屋東照宮蔵

馬に水を与える柄杓であるが、表面は黒漆の呂色仕上げ、内側が朱漆塗という上質の加飾がなされ、大葵紋が側面と底にあしらわれている。東照宮祭には、神馬はじめ十数頭の馬が加わり、それぞれ柄杓係が付き添った。名古屋東照宮宝物台帳にも呂色塗の馬柄杓が記載されており、この柄杓と一致する。

20 葵紋蒔絵空穂・鎗矢 江戸時代中期 三柄のうち二柄 名古屋東照宮蔵

矢を入れる空穂(鞆)。蓋(間塞)には金箔押の革を貼り黒漆で葵紋をあらわし、穂には毛皮を貼り雨除とする。毛皮は、名古屋東照宮宝物台帳によれば猪の皮。中には羽黒鷲の鎗矢が納められている。外箱に文化13年(1816)の墨書があり、それ以前の作となる。『張州雜志』にも、この空穂と極似する空穂が描かれている。

参考出品 空穂 箱蓋(裏) 文化13年(1816) 名古屋東照宮蔵

空穂(出品番号20)を保管する箱。二方棧式の簡素な蓋に、「御空穂三柄之箱」と墨書がある。蓋の裏には、同じ筆跡で、「文化十三年子四月／於御作事方出来／ニ而無之御細工方於て／出来之」と墨書がある。建築を行う作事方ではなく、木工品を扱う細工方で文化13年(1816)に作られた箱であることがわかる。中には空穂が三柄入っており、『張州雜志』の記述とも合致する。

21 長刀 銘 越後守藤原氏恒 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

氏恒は、延宝年間(1673-81)頃尾張で活躍した刀工。名工若狭守氏房の二男である。名古屋東照宮宝物台帳や『張州雜志』の記載と一致する。なお台帳には「金具赤銅毛彫葵紋二ツ」の拵があったとするが、現存しない。

22 長刀 銘 丹波守藤原延房 江戸時代前～中期 名古屋東照宮蔵

丹波守延房については知られないが、江戸時代前期から中期頃の刀工と見られる。銘は名古屋東照宮宝物台帳や『張州雜志』の記載と一致する。この他、無銘の大長刀も名古屋東照宮に伝来しており、御神宝の長刀が三振とも現存することになる。

23 朱塗葵紋雨具長持 江戸時代中期 名古屋東照宮蔵

東照宮祭において、神具としての雨具を納めた長持。神輿の次に運ばれた。『張州雜志』には、紙垂と三本の藁をさげる注連縄を張り巡らす「雨具御長持」が描かれている。その大きな葵紋や金具が、この長持と一致する。なお『張州雜志』は「釣人十三人」と記すが、長持を運ぶ人を「釣人」というのはおそらく尾張・岐阜の方言である。

24～30 山車模型 昭和後期

東照宮祭の山車は、昭和 20 年(1945)の戦災によりすべて焼失した。それを惜しむ市民は多く、戦前の写真や絵画をもとに、精緻な模型が作られている。名古屋城に寄贈された山車模型の数々を紹介する。

24 橋弁慶車模型 東照宮祭 七間町 太田一三氏制作・寄贈 昭和後期

25 猩々車模型 東照宮祭 本町 太田一三氏制作・寄贈 昭和後期

26 雷電車模型 東照宮祭 和泉町 太田一三氏制作・寄贈 昭和後期

27 小鍛冶車模型 東照宮祭 京町 太田一三氏制作・寄贈 昭和後期

28 道成寺車模型 東照宮祭 長者町 太田一三氏制作・寄贈 昭和後期

29 二福神車模型 東照宮祭 上長者町 佐藤忠好氏制作・寄贈 昭和後期

30 福祿寿車模型 若宮祭 鉄砲町 滝川喜男氏制作・寄贈 昭和後期

31-1 東照宮祭礼図巻 巡礼 江戸時代後期 個人蔵

東照宮祭礼を描く絵巻を額に仕立てたもの。当初は行列全体を描く長大な絵巻であったと考えられ、他場面の出現が待たれる。筆者は不明ながら、浮世絵師系であろう。本図は、和泉町・上畠町・五条町から出されていた巡礼練物の場面。揃いの法被をはおり納札を首に掛けた遍路十人が、季節の花の造り物を活けた桶を背負っている。

31-2 東照宮祭礼図巻 鷹 江戸時代後期 個人蔵

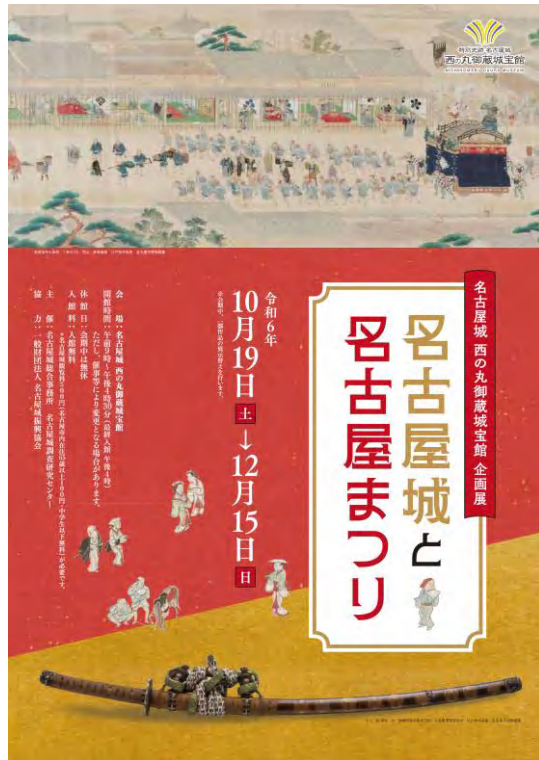
東照宮祭のうち、鷹二羽の彫刻(細工作り物)の行列を描く。鷹は、家康から義直が譲り受けたもので、父同様鷹狩を好んだ義直の愛鷹となった。家康没後は野に放ち、その姿を木で彫らせて偲んだという。家康の象徴ともいべき木彫りの鷹は、東照宮祭でも行列に加えられていた。

32 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 上洛殿入側天井板絵 桐紋図

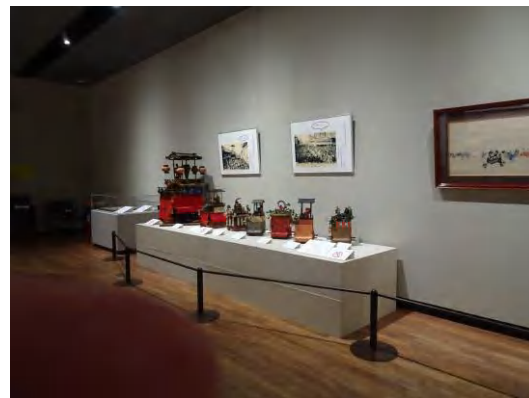
寛永 11 年(1634) 令和 3 年(2021)度修理 名古屋城総合事務所蔵

名古屋城本丸御殿は、家康により実子義直の住まいとして築かれた。展示作品は、寛永 11 年に増築された上洛殿の天井板絵。上洛殿は、三代將軍家光の京都への上洛のため、名古屋での宿として建てられたもので、入側(廊下)の天井まで絵で飾られていた。名古屋東照宮が被災した昭和 20 年(1945)の空襲により本丸御殿も炎上したが、内部の障壁画は天井も含め直前に取り外され保管されていたため、焼失を免れた。明治以降、名古屋城本丸御殿は天皇の離宮とされ、明治天皇をはじめとする皇族方計 12 人、宿泊回数延べ 105 泊に及ぶ行幸啓を仰いだ。昭和 3 年(1928)11 月の京都での昭和天皇即位式(御大礼)の前後には、昭和天皇と香淳皇后が名古屋城本丸御殿に宿泊された。当時の修理工事記録に「入側の格天井と剣璽之間の金箔天井は、係員の指示に従い、変色しないよう注意の上、剥落などを修理すべし」とあり、上洛殿入側の天井画が入念に修理されたことがわかる。「金箔天井」のある部屋が剣と玉(璽)を置く剣璽之間にあてられたことも知られる。この部屋は上洛殿納戸之間と考えられ、従来材質が知られなかった納戸之間天井が金箔地であったことになる。

チラシ



展示風景



出品目録

西の丸御蔵城宝館企画展「名古屋城と名古屋まつり」

令和6年10月19日（土）～12月15日（日）

主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター 協力 名古屋城振興協会

資料名	員数	時代	作者	所蔵者
1 菱紋散鞍・鎧	1 式	江戸時代中期		名古屋東照宮
2 尾州名古屋城下図	1 幅	江戸時代前期		名古屋城振興協会
3 享元絵巻	1 巻	江戸時代中期		名古屋城総合事務所
4 享元絵巻絵葉書	5 葉	昭和前期	名古屋温故会発行	個人
5 東照宮祭礼図巻	7 巻	文政5年（1822）	森高雅筆	名古屋市博物館
6 東照宮祭旗指物「天下泰平」	1 幅	江戸時代後期		個人
7 東照宮祭旗指武者図	1 幅	安政5年（1858）	渡辺清筆	
8 東照宮祭林和靖山車図	1 幅	江戸時代後期～明治	喜田華堂筆	個人
9 名古屋祭図 林和靖車・橋弁慶車・狸々車	3 幅対	明治	柳田樵谷筆	名古屋城振興協会
10 名古屋祭図	3 幅対	大正	今泉煤溪筆	名古屋城振興協会
11 名古屋祭図 林和靖車・雷電車	1 幅	大正	伊勢門水自画賛	名古屋城振興協会
12 林和靖車人形制作覚	1 巻	享保17年(1732)		名古屋東照宮
13 名古屋東照宮神事山車引出シ之図	1 枚	明治18年(1885) 5月1日御届 5月20日出版	東照宮社務所発行	名古屋城振興協会
14 名古屋東照宮神事山車引出シ之図	1 枚	明治18年(1894) 5月8日印刷	塚本康満出版	名古屋東照宮
15 名古屋東照宮例祭行粧之図	1 枚	明治27年(1885) 5月1日御届 5月21日出版	塚本康満出版	名古屋東照宮
16 玄武 神旗のうち	1 流	大正		名古屋東照宮
17 太刀 銘 国行 付 桐菱紋散糸巻太刀拵	1 口	鎌倉時代中期 拵 江戸時代前期		名古屋市博物館
18 菱紋散小太刀拵	1 口	江戸時代前期		名古屋東照宮
19 呂色塗菱紋馬柄杓	1 口	江戸時代中期		名古屋東照宮
20 菱紋蒔絵空穗	2 柄	江戸時代中期		名古屋東照宮
21 長刀 銘「越後守藤原氏恒」	1 口	江戸時代前～中期	藤原氏恒作	名古屋東照宮
22 長刀 銘「丹波守藤原延房」	1 口	江戸時代前～中期	藤原延房作	名古屋東照宮
23 朱塗菱紋雨具長持	1 棹	江戸時代中期		名古屋東照宮
24 橋弁慶車模型	1 輛	昭和後期	太田一三氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
25 狸々車模型	1 輛	昭和後期	太田一三氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
26 雷電車模型	1 輛	昭和後期	太田一三氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
27 小鍛冶車模型	1 輛	昭和後期	太田一三氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
28 道成寺車模型	1 輛	昭和後期	太田一三氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
29 二福神車模型	1 輛	昭和後期	佐藤忠好氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
30 福祿寿車模型	1 輛	昭和後期	清川喜男氏制作・寄贈	名古屋城総合事務所
31 東照宮祭礼図巻	2 面	江戸時代後期～明治		
32 名古屋城本丸御殿障壁画 天井板絵	1 面	寛永11年（1635）	重要文化財	名古屋城総合事務所
参考 太刀 箱蓋	1 点	寛政7年(1795)4月貼札		名古屋東照宮
参考 空穗 箱蓋	1 点	文化13年(1816)4月		名古屋東照宮

絵巻は前期・後期で場面替えをいたします。 前期：10月19日（土）～11月15日（金） 後期：11月16日（度）～12月15日（日）

(5) 特別展「名古屋城と相応寺－家康を愛した女性 相応院の眠る寺」

展示概要

会期 令和6年(2024)12月21日(土)～令和7年(2025)2月24日(月・祝) 63日間

前期 12月21日(土)～1月23日(木) 31日間

後期 1月24日(金)～2月24日(月・祝) 32日間

入館者数 28,641人(1日平均 454.6人)

出品件数 28件

担当者 朝日美砂子

特別協力 相応寺

展示趣旨

相応院お亀の方(1573-1642)は、尾張徳川家の基礎を築いた女傑である。最初の夫を失ったあと徳川家康と暮らし、のちの尾張藩初代藩主義直をもうける。お亀の方は、晩年の家康とともに駿府城で義直を慈しみ、家康が亡くなると剃髪して相応院と号し、名古屋城に入り藩主義直を支えた。寛永19年(1642)相応院は没し、翌年、菩提寺として宝亀山相応寺が名古屋城下に建立された。相応寺には、義直が描いた相応院の画像が伝えられ、創建時にさかのぼる貴重な杉戸絵も現存する。令和6年(2024)、それら相応寺所蔵の絵画や仏画・仏像、本堂・総門・山門などが、名古屋市指定有形文化財に指定された。それを記念し、障壁画を中心とした相応寺の寺宝を公開した。生前の相応院を取り巻いていた、豪華な空間をお楽しみいただいた。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。

解説パネル

I 相応院お亀の方

相応院お亀の方(1573-1642)は、石清水八幡宮(京都府八幡市)の祠官であった志水家に生まれた。はじめ竹腰正時に嫁ぎ、その後徳川家康の側室となった。文禄4年(1595)、家康の八男にあたる仙千代を生む。仙千代は慶長5年(1600)2月、六歳で早世し、同じ年の11月、家康九男の義直を授かった。慶長12年(1607)、義直の異母兄松平忠吉が亡くなったため、義直がその跡を継いで清須城主となり、名古屋城築城にともない初代名古屋城主となった。元和2年(1616)家康が亡くなると、お亀の方は剃髪して相応院と号し、義直とともに駿府から名古屋に移った。元和5年(1619)には江戸上屋敷に移り、義直の側室が生んだ光友と、三歳にして将軍家から光友に嫁いだ千代姫を養育した。寛永19年(1642)閏9月16日、江戸上屋敷で亡くなり、葬儀は仙千代の菩提寺高岳院で営まれた。翌寛永20年(1643)、宝亀山相応寺が、義直により名古屋城東の地に菩提寺として造営された。相応寺は、江戸時代を通じて藩主の帰依を受け、藩主の側室や子女が葬られた。寺内には、相応院御座所を飾っていたとされる杉戸絵や寺宝が伝わり、また障壁画の一部や相応院所用の食器などが名古屋市博物館や三河武士のやかた家康館に所蔵されている。

II 江戸御座所での相応院

江戸の上屋敷敷地内に住む相応院にたいし、藩主義直は、いわゆる盆・暮の祝儀のほか、折にふれ時節の食物類を贈っていた。たとえば寛永3年(1626)には、正月15日に鯨一桶、4月9日に服と帯、5月6日に瓜・茄子の漬物、8月6日に一尺の鮭、10月6日に茶壺を届けている。(『源敬様御代御記録』による。以下同。)二代將軍秀忠や世子家光が義直の江戸上屋敷に御成した時には、相応院にも下賜品があった。とくに寛永5年(1628)8月9日の家光御成においては、相応院が差し上げた盃台を用いて上屋敷の御成書院で三献の儀が行われ、家光から白銀二百枚と綿百把が相応院に贈られた。家康没後も相応院が將軍家から格別な扱いを受けていたことがうかがわれる。同年10月には相応院は家康を祀る日光東照宮を参詣しており、五十歳を過ぎてなお壮健であったこともわかる。相応院の御座所は、寛永9年(1632)と同19年(1642)に建て替えられたが、寛永10年(1633)には家光の乳母春日局が訪れるなど、対面儀礼と酒食の饗応が可能な規模と加飾であったと考えられる。

III 相応寺の創建

寛永20年(1643)9月16日、相応院一周忌の大法要が、新築された相応寺で善美を尽くして営まれた。相応寺の山門や本堂には義直自筆の扁額が掲げられ、鐘楼には義直が奉納した梵鐘が架けられた。本堂とは別に書院(内仏堂)が設けられ、経蔵も建てられた。当時の名古屋城下において、最大級の寺院であった。さらに注目すべきは、義直自画賛の相応院肖像画が相応寺に寄進され、しかも母を敬うその賛が『敬公実録』などの書に記録されていることである。義直は正室高原院春姫を早くに亡くしていたが、妻の菩提寺を新設することはなく、霊屋は大須の既存寺院である万松寺内に設けられた。霊屋(現名古屋東照宮本殿)の天井金具には高原院実家である浅野家の紋があしらわれ、葵紋はない。また義直は、高原院の肖像画制作を認めず、すでに描かれていた画像は破り捨てさせたという。これに対し、相応院への義直の待遇は破格といえる。家康側室という相応寺の立場がもちろん影響していようが、根底には義直の母への慈愛の念があったと考えたい。

IV 相応寺障壁画の制作年代

相応寺は、昭和7年(1932)、東区から現在地(千種区城山町)に移転した。堂宇の内の書院(内仏堂)は、昭和34年(1959)の伊勢湾台風で損壊した。書院は、慶長15年(1610)駿府城内に家康が建てた相応院御座所(駿河御殿)の移築とも伝えられる。徳川頼宣・頼房を生んだ家康側室養珠院(1577-1653)の菩提寺妙法華寺(三島市)の奥書院は養珠院駿府城御座所の移築とされるなど、駿河御殿説は尾張家以外にもある。しかし、現存する相応寺伝来の襖絵と杉戸絵は様式的に慶長期までは遡り得ない。文献から、義直が建てた相応院御座所として、①元和2年(1616)の家康逝去直後に使用された名古屋城本丸内の仮御座所、②元和3年(1617)末に完成した二之丸内御座所、③元和4年(1618)の相応院江戸下向に先立ち造営された尾張藩上屋敷(鼠穴屋敷・現東京都千代田区吹上御所)内の江戸御座所、④寛永9年(1632)に上屋敷周辺の旧竹腰家屋敷地に建て替えられた新御座所、⑤寛永17年(1640)11月の新御座所焼失後、寛永18年(1641)冬までに再建された再建御座所の5つがある。『源敬様御代御記録』は、寛永19年(1642)、相応院の葬儀が営まれた高岳院(仙千代菩提寺)に「相応院御座所」が移築されたと明記しており、名古屋城二之丸御座所が

高岳院に移築された可能性もある。一方竹腰家の家譜によれば、江戸の相応院御座所が相応寺の内仏堂として移設されたという。相応寺本堂や庫裏の障壁画は寛永 20 年(1643)に新規制作されたはずであり、現存する障壁画は、寛永 18 年(1641)末に制作された江戸御座所のものと、2 年後の寛永 20 年(1643)10 月までに描かれたものが混在すると考えられる。

V 相応寺と名古屋城本丸御殿上洛殿

相応寺障壁画群のうち、6「松桜図襖絵」4 面と 8「花鳥図屏風」現六曲一双(名古屋市博物館蔵)は、細部表現の比較から、名古屋城本丸御殿上洛殿松之間の「松桜図」と同じ筆者の作と見なしえる。たとえば、狩野派絵画で最もありふれたモチーフである笹の葉を比較すると、平らな葉がすべて手前を向くという正面性の高い造形感覚が、上記の作品に共通し、そしてこの感覚は少なくとも名古屋城本丸御殿の他の障壁画にはない。わずかに本丸御殿御湯殿書院上段之間に描かれる笹が近いが、筆力はやや軽く、同一筆者とはいいがたい。ここから、寛永 11 年(1634)制作の名古屋城本丸御殿上洛殿松之間と御湯殿書院を担当した絵師群が、寛永 18 年(1641)の相応院江戸御座所再建にも参加した可能性が浮上する。さらに細部を比較すると、画風が極似する作品群と、似てはいるが個性が異なる作品群、似てはいるが形式化した作品群に分けられ、それぞれ絵師を異にする可能性がある。ただし、画題・画材の違いも考慮すべきで、どこまでの細分化が現実的かは今後の検討に待ちたい。いずれにせよ、相応寺障壁画が絵画史に占める意義はきわめて高い。

VI 相応寺障壁画を描いた絵師

相応寺伝来の障壁画として、ここに展示する相応寺所蔵の杉戸絵や名古屋市博物館所蔵の襖絵類のほか、三河武士のやかた家康館に杉戸絵と額装にされた障壁画が保管されている(岡崎市蔵)。三河武士のやかた家康館保管分の杉戸絵は、相応寺所蔵の杉戸絵と画風が共通し、さらに名古屋城本丸御殿上洛殿の松之間や納戸之間、菊之廊下、さらにその奥の御湯殿書院の杉戸絵や襖絵と画風が似通う。名古屋城の松之間は將軍臣下が控える間で、納戸之間は將軍寢室と考えられる。菊之廊下は將軍トイレへの専用通路で、御湯殿書院は將軍専用の浴室であった。いずれも上洛殿の中では奥向きの部屋であり、対面儀礼などが行われた表四室(上段之間から三之間まで)とは厳密に区別される。寛永 11 年(1634)に上洛殿表四室の襖絵を描いたのは、文献・様式から幕府御絵師筆頭の狩野探幽であることが確実で、奥の諸室は杳之助をはじめとする探幽門人と考えられる。探幽は引きつづき尾張藩の絵画御用を勤めており、寛永 15 年(1638)には、江戸上屋敷御鎖之間の張付絵を弟尚信とともに命じられている。(『源敬様御代御記録』8 月 18 日条)。その 3 年後の寛永 18 年(1641)、同じような絵師集団が、尾張藩江戸上屋敷再建に携わったと考えられ、千代姫御守殿が探幽に、そして相応院御座所がその門弟に命じられた可能性がある。

なお、相応寺伝来の障壁画として岡崎市に所蔵される作品のうち、額装となっている作品群は様式を異にしており、別途考察する必要がある。

Ⅶ 名古屋城本丸御殿上段之間天井板絵と相応寺障壁画

名古屋城本丸御殿上洛殿のうち、上段之間から三之間までと入側(廊下)の天井は、四角く区切られ、それぞれの区界(格間)に山水や花鳥を描く墨画淡彩の天井画がはめこまれていた。また納戸之間には金箔張りの天井画があったが、明治維新後失われたらしい。昭和20年(1945)5月の空襲により本丸御殿は全焼したが、納戸之間以外の天井画は空襲直前にはずされておき、焼失を免れた。現在700枚の天井画があり、重要文化財に指定されている。天井画の画風は様々で、同じようなモチーフを描く図であっても構図や画風が微妙に異なる。ここから、かなりの人数の絵師が動員されたこと、指導者的な絵師による手本をもとに、各絵師がある程度自由に作画したこと、逆にそれが可能なほど画法の統一がなされていたことなどが推定できる。相応寺障壁画と画風が一致する天井画は現時点では見いだせない。しかし、本丸御殿天井画に見いだされる多様な個性と画法の統一とは、相応寺障壁画においても存在する。

Ⅷ 相応寺の梵鐘

相応寺には、創建時の鐘楼が移築され、総高147cmという大きな梵鐘が吊るされている。梵鐘には、義直が崇拝していた儒学者林羅山(1583-1657)の銘があり、「治工藤原政長」が作り、義直を檀那(施主)として寛永20年(1643)9月16日に相応寺に奉納されたことが記される。政長(1623-1705)は、尾張徳川家の御鑄物師筆頭を代々つとめた水野太郎左衛門家の五代当主。寛永13年(1636)、四代太郎左衛門則重(義父か)の早世にともない家督を継いだ。政長が鑄した梵鐘は、相応寺を初見とし、中区大須の真福寺、七ツ寺、犬山市の妙感寺、瀬戸市の万徳寺など、名古屋市内外の主な寺院に納められていた。しかし、戦時の供出や空襲などにより相応寺梵鐘以外はことごとく失われた。よって本作例が唯一の遺品となる。銘文撰者の林羅山は、朱子学派の儒学者。将軍家康・家光に仕え、義直の尊敬を受けた。銘文は、義直が亡き相応院に永遠の孝養の思いを抱く旨を記しており、文字は義直自身の筆と伝えられている。このように相応寺梵鐘は、奉納者、作者、制作時期、制作意図が明らかな、近世鑄物史における基準的作例として貴重である。

銘文 相應寺者／從二品亞相源公奉為／顯妣太夫人所被宮建／

也新鑄華鐘以架之樓／其愼終永念之孝至矣／於是奉／命謹為之銘／尾陽城東 相應紺宮／

三寶垂教 一筵達聰／禹聲不蠡 晁氏有功／長楽花外 天竺月中／葉城告曉 蓮社傳風／

千歳遺響 惟孝無窮／寛永二十年九月十六日／

大檀那 權大納言源朝臣義直卿／住持 眼譽上人／治工 藤原政長／灋印道春敬書

※紺宮は坤宮の意

Ⅸ 名古屋城ガラス乾板写真から見る相応寺障壁画

名古屋城本丸御殿は昭和20年(1945)5月の空襲により全焼したが、焼失前に数多くのガラス乾板写真が撮影されており、障壁画がはまっていた室内の様子を知ることができる。ガラス乾板写真によれば、上洛殿松之間は、襖や床の間だけでなく、長押上小壁、すなわち鴨居の上に広がる壁面や、その上の蟻壁にまで障壁画が貼り込まれていた(壁貼付絵)。しかも木々は下から上まで伸びあがり、長押をはさんで上下で完全につながっていた。左右、つまり部屋の四周の構図も連続しており、部屋全体が一繋がり

な障壁画で囲まれていたのである。長押の上下を連続する画面とみなす巨大構図法は、慶長19年(1614)造営の慶長度名古屋城本丸御殿では見られず、寛永3年(1626)造営の二条城二之丸御殿ではほぼ全ての部屋に用いられていることから、寛永期後半には御殿建築ではかなり普遍的になっていたと考えられる。よって寛永末年に建てられた相応院御座所は、松之間同様、長押を越え天井まで障壁画が描かれ、しかもその構図は上下と東西南北のすべてで連続するという、巨大な三次元空間であった可能性が高い。この場合、現存する襖絵の上にほぼ同面積の壁貼付絵が広がっていたことになり、「頭打ち」のように見える現存する襖絵の構図にも納得がいく。

X 相応寺の宝物と宝物帳

相応寺に伝えられていた膨大な宝物と障壁画の一部は現在岡崎市が所有し、三河武士のやかた家康館に保管されている。江戸時代後期に相応寺住職と寺社奉行の確認により書き上げられた宝物台帳二綴もその中にあり、貴重な情報を提供してくれる。相応院画像については、義直の賛がある掛軸二幅が記載されており、そのうちの一幅が本展の出品番号1にあたる。また、涅槃図、曼荼羅図、仏舍利及び舍利塔が記載されており、いずれも相応寺に現存する宝物と考えられる。さらに、「孔雀図屏風」二曲一双(2点)が記載されており、そのうち一隻(1点)が岡崎市に蔵されている。なお、相応院画像の残る一幅は、義直の印があり、元禄7年(1694)、三代藩主になったばかりの綱誠(1652-1699)が寄進したものと記述されている。

作品解説

1 相応院画像 徳川義直自画賛 名古屋市指定有形文化財 江戸時代前期 相応寺蔵

相応院実子である尾張藩初代藩主義直による、相応院の肖像画。相応院一周忌の寛永20年(1643)9月、相応寺落成法要にあたり義直が相応寺に寄進した。賛も義直の自詠自筆で、慈愛にみちしみ深く柔和であった母をたたえ、その姿を写し永遠に恩を忘れないと記している。相応院は69歳(満年齢)で亡くなっており、本図は義直の脳裏に残る若き母の画像と考えられる。令和6年(2024)、名古屋市の有形文化財に指定された。

菅家苗裔 穂月后孫／有慈有孝 慎行慎言／貞潔而直 柔須且温／崇寂滅教 帰釋氏門
信心堅確 了生死源／爰寫遺像 招他幽魂／定省如在 干晨干昏／以敬不怠 何忘洪恩

2 相応院画像 『尾陽国主』印 徳川義直筆 名古屋市指定有形文化財 江戸時代前期 相応寺蔵

出品番号1と同じく、出家後の相応院を描く肖像画。画面左下におされた『尾陽国主』印は、義直の所用印。尾張徳川家二代藩主の光友も使用した印であるが、本図は画風からも義直の作と見てよい。高位の人の肖像画は理想化するのが一般的であるが、本図は老いの忍び寄る姿をそのまま写しとっており、近親者しか描き得ない貴重な画像といえる。令和6年(2024)、名古屋市の有形文化財に指定された。

3 相応寺障壁画 鶴図・芍薬図杉戸絵のうち 芍薬図(前期展示) 江戸時代前期 相応寺蔵

相応寺の本堂廊下の杉戸。寺外で公開されるのは今回がはじめて。桃色と白色の大輪の芍薬を写実的に描いており、品種の違いも意識されている。とくに右端の株は、皿と呼ばれる最下段の花びらから、花卉

(花びら)化した蕊(雄しべ)が、二段・三段と階を重ねるように盛り上がる品種で、芍薬の中でも愛されてきた。芍薬は薬草であるとともに品種の多様性と美しさが尊ばれ、江戸時代初期には様々な品種が大名屋敷で栽培され、障壁画においても各品種が明確に描き分けられていた。本図は、新出の杉戸絵として貴重であるばかりか、当時の芍薬人気を示す新発見の本草学資料でもある。

4 相応寺障壁画 芙蓉図・薔薇笹図杉戸絵のうち 薔薇笹図(後期展示)

名古屋市指定有形文化財 江戸時代前期 相応寺蔵

やや多弁の庚申薔薇と笹を描く。庚申薔薇は冬も咲くことから長春花と呼ばれ、吉祥の植物として平安時代から絵画化されてきた。本杉戸絵は、あまり陰影を付けない画風で、名古屋城本丸御殿上洛殿松之間の障子腰貼付絵ときわめて近い。本作品の方がやや硬いが、板に描く杉戸絵であるがための違いとも考えられ、少なくともごく近い関係の絵師の作と見なされる。裏面の芙蓉図(今回は展示せず)も表と同じ絵師と考えられ、よって両面とも名古屋城松之間の障子腰貼付絵と近い絵師の作となる。名古屋城障壁画と同じ絵師集団が尾張徳川家の作事に関わっていたことが知られる貴重な事例である。

5 旧相応寺障壁画 梅椿図襖絵(前期展示) 愛知県指定有形文化財 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

相応寺伝来の障壁画の中でも白眉というべき逸品。文献から、寛永18年(1641)に尾張藩江戸上屋敷(鼠穴屋敷・現東京都千代田区吹上御苑内)の中に造営された相応院江戸御座所の襖絵の可能性が高い。雪の積もる土山の奥に紅梅が伸び、その奥から八重と一重の白椿二種が顔をのぞかせる。花や葉の描き方は自然で柔らかく古格を有するが、構図はやや技巧的で、寛永末年の時代性を示している。

6 旧相応寺障壁画 松桜図襖絵(後期展示) 愛知県指定有形文化財 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

大輪の八重桜と松を描く襖絵。文献から、寛永18年(1641)に尾張藩江戸上屋敷(鼠穴屋敷・現東京都千代田区吹上御苑内)の中に造営された相応院江戸御座所の障壁画の可能性が高い。おおらかな画風は、寛永11年(1634)に描かれた名古屋城本丸御殿上洛殿松之間の床の間と襖絵の「松桜図」にきわめて近い。上洛殿障壁画制作を指揮した狩野探幽の門人たちが、寛永18年の相応院江戸御座所作事にも関わったと考えられる。

7 旧相応寺障壁画 雪松図襖絵(前期展示) 愛知県指定有形文化財 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

4枚1組の襖絵。4枚で幅約550cmになることから、三間幅(一間は約180cm)の敷居にたてられていたと考えられる。引手は葵紋ではなく、裏葵紋と呼ばれる特殊な紋。裏葵紋は、尾張徳川家において奥向きあるいはやや格下の場所に用いる紋で、相応院御座所にふさわしい。

8 旧相応寺障壁画 花鳥図屏風 六曲一双のうち右隻(前期展示) 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

現在屏風二隻(一隻で約360cm)に仕立てられているが、各隻に引手跡が二つずつあり、もとは襖絵であったことがわかる。また木の幹が分断されていることから、本来は三間幅(約560cm)の敷居にたてられていた四枚引きの大襖二組で、大幅に切り詰められ屏風に仕立てられたことになる。画面は一重咲きの桜と

松を描くもので、6「松桜図襖絵」と一連の障壁画であった可能性が高い。また名古屋城本丸御殿上洛殿松之間障壁画(寛永11年・1634)と様式が似通っており、同じ筆者集団の作と考えられる。

8 旧相応寺障壁画 花鳥図屏風 六曲一双のうち左隻(後期展示) 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵
画面は八重咲きの桜と松を描くもので、6「松桜図襖絵」と一連の障壁画であった可能性が高い。「桜之間」ともいふべき豪華な部屋を飾っていたのであろう。

9 十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風 田中訥言筆 江戸時代後期 相応寺蔵
六曲一双のうち右隻(前期展示)、左隻(後期展示)

尾張の大和絵を代表する田中訥言(1767-1823)が季節の景物を順に描く。落款(サイン)の書体から、文化年間(1804-18)頃の訥言円熟期の作と考えられる。ありきたりな花鳥風月図ではない鋭敏な自然観察眼や、清新な色彩感覚から、訥言の個性と技量がいかに発揮された代表作といえる。相応寺に伝来した経緯は不明。

画題 右隻 右から

①小松福寿草図(正月) ②紅梅鶯図(二月) ③桜鳩図(三月) ④青麦雲雀図(四月)
⑤河骨水鶏図(五月) ⑥芦鶯図(六月)

画題 左隻 右から

①女郎花葛図(七月) ②月薄萩図(八月) ③菊雀図(九月) ④時雨紅葉鹿図(十月)
⑤水仙千両図(十一月) ⑥雪南天図(十二月)

落款「訥言」・『痴翁』『訥言陳』(いずれも白文方印)

10 裏葵紋引手 江戸時代前期 相応寺蔵

3「芍薬図杉戸絵」の引手。今は別途保管されている。中央の手掛かり(手を掛ける楕円形の部分)には、七宝繫文の中に裏葵紋を表す。周囲の縁座は、二重笄で区画し、唐草文を配する。裏葵紋は、尾張徳川家では表紋である葵紋とは区別し奥向きの部屋などに用いており、相応院にふさわしい。3の引手跡には、制作当初の顔料である胡粉が残っており、今なお純白に輝いている。

11 宝亀山扁額 徳川義直書 寛永20年(1643)9月11日 相応寺蔵

「宝亀山」は相応寺の山号。本額は、藩主義直が書したその三文字を、板に彫りこんだもの。周囲の枠には牡丹唐草文が彫刻され、緑青などの顔料が一部残っている。かつては華やかな彩色が全面に施されていたことがわかる。「宝亀山」は相応院生前の俗名「お亀の方」によるもので、女性の俗名が菩提寺の山号となるのはきわめて珍しい。義直がいかに母相応院を敬愛していたかが、ここからもうかがわれる。

裏面銘「寛永貳拾年癸未年九月拾壹日 従二位源朝臣義直書之」

12-1 敬公実録 全五冊のうち第三冊 江戸時代後期写 名古屋東照宮蔵

寛永 17 年(1640)11 月、尾張徳川家の江戸上屋敷地(鼠穴屋敷)にあった千代姫(二代藩主光友正室)の御守殿から出火し、相応院御座所の下馬長屋を残し上屋敷が全焼したことを記す。相応院と千代姫は江戸城本丸御殿に、義直と光友は水戸徳川家屋敷に避難した。同年末、尾州から切り出した材木 2,564 本と莫大な費用を用いて再建工事がはじまった。徳川林政史研究所蔵『源敬様御代御記録』にも火災と避難の記事があるが、経費の記述はない。

12-2 敬公実録 全五冊のうち第四冊 江戸時代後期写 名古屋東照宮蔵

『敬公実録』は、初代藩主義直の伝記をのちに編年体でまとめた書。他書にはない逸話も添える。徳川林政史研究所本・名古屋市蓬左文庫本が知られているが、名古屋東照宮にも二種類の写本がある。寛永 19 年(1642)閏 9 月に相応院が亡くなり、江戸伝通院で火葬された後遺骨が名古屋に運ばれ、義直の兄仙千代の菩提寺高岳院で葬儀が営まれたこと、その後義直が相応寺を名古屋城の東に建て、相応院の法号を自ら書いて山門に掲げたことなどを記す。三代将軍家光からの香典は銀 300 枚であったという。

13 蓬左遷府記稿 大正 15 年(1926)写 原本 文化 14 年(1817)編 加藤品房撰 名古屋城総合事務所蔵

築城前後の名古屋城の歴史について、出典を示して記す。元和 2 年(1616)4 月の家康死去にともない、義直と相応院が「御母子とも」に駿府城を出て名古屋城に入り、本丸に在住したことを記す。「母子」とわざわざ記す点、相応院と義直の深い結びつきが当時周知の事実であったことがうかがわれる。

一 同二年辰七月／公及／相應院殿 御母子共駿河方／

御入城 御本丸 御在住御家中諸士不残／駿河を引拂之上ル／金府記較全文

14 金城温古録 第 21 冊 明治写 原本 江戸時代後期成立 奥村得義編 名古屋城総合事務所蔵

尾張藩士奥村得義が著した、名古屋城百科ともいべき名著。「大奥の総説」の項目で、元和 2 年(1616)義直と相応院が母子で本丸に住んだという『編年大略』の記事を引用し、相応院御殿が本丸大奥にあったとする説があるも疑念ありと記している。寛永 11 年(1634)に改築される前の本丸御殿および本丸については不明部分が多く、相応院御座所がどこにあったか、そもそも本丸内にあったのか否かもわからない。

15 尾張名所図会 前編 七巻のうち巻二 明治 13 年(1880)再版 初版天保 15 年(1844)刊

岡田啓・野口道直撰、小田切春江賀 名古屋城総合事務所蔵

江戸時代後期の尾張の名所を絵入りで紹介する地誌本。相応寺の広大な境内が描かれている。山門、鐘楼、経堂、庫裏、本堂、書院を備えた大伽藍である。本堂奥の書院が、相応院御座所を移築した建物と考えられる。挿絵を描いたのは、精緻な写生図で定評のあった尾張の画家小田切春江。

16 名古屋武家寺社并町絵図 江戸時代中期 名古屋城総合事務所蔵

名古屋城から碁盤目状に広がる名古屋城下を描く地図。享保年間(1716-36)頃の成立と推定できる。名古屋城の東に相応寺がある。名古屋城の南に密集する他の寺院にくらべ、相応寺が圧倒的な規模であったことがよくわかる。相応寺の南東には、建中寺が位置している。相応院の実子で初代尾張藩主義直の葬儀は、相応寺で盛大に営まれ、その後菩提寺として建中寺が二代藩主光友により創建された。

17 名古屋城郭之図

昭和6年(1931)写・昭和23年(1948)再写 原本明治初期 縮尺 1200分の1 名古屋城総合事務所蔵

江戸時代前期の二之丸の様子はよくわかっていない。さらに明治初年、建物が破却され陸軍用地となったため、遺構もほとんどない。本図は、明治初年の二之丸を描く地図。注記から、明治6年(1873)以降名古屋鎮台が作成し、明治21年(1888)の名古屋鎮台廃止後第三師団に引き継がれた図を、昭和になって写した図とわかる。本図の青焼に陸軍の建物を描き込んだ図面も現存する。堀や池などの水は青、築山は緑で塗られている。二之丸御庭の池も青い。写しとはいえ、このような絵図は他になくきわめて貴重。

明治初年名古屋鎮臺に於て實測せる／第三師団経理部所蔵の圖による／

昭和六年三月謄写／昭和二十三年四月再謄写

18 水野太郎左衛門家文書 相応寺鐘につき覚書 水野政長筆 寛永20年(1643) 個人蔵

江戸時代を通じて尾張藩御鑄物師筆頭であった水野太郎左衛門家に伝わる膨大な資料の中の一葉。寛永20年(1643)9月16日の相応寺落慶法要の日付を記し、相応寺の梵鐘を政長が鑄造した旨を記す。相応寺梵鐘に関する基本資料である。水野政長(1623-1705)は、水野家の五代当主で、靈山良晴庵主と号した。「相応寺鐘につき覚書」は実父を助清とするが、不詳。

◆「指度し二尺七寸」とは、差し渡し(直径)が約82cmであることを示している。現存する相応寺梵鐘の口径は82cmで、本文書の記載と一致する。

一指度シ貳尺七寸鐘 相應寺 鑄工／寛永二十年 政長／九月十六日出来申候 助清子

19 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 花卉図(前期展示)

国指定重要文化財 242 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

19～21は、名古屋城本丸御殿上洛殿二之間の天井画のうち、椿を描く画面。構図、筆使いや色彩感覚がそれぞれ微妙に異なる。本丸御殿上洛殿障壁画制作は狩野探幽と狩野奎之助という二人の絵師に命じられたことが記録から知られているが、実際には多くの弟子が関わっていた。

20 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 椿図(前期展示)

国指定重要文化財 270 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

椿と笹を描く天井画。名古屋城本丸御殿上洛殿には、700面を越える天井画がはまっていた。制作期間に余裕はなく、複数の絵師が手分けして描いたと考えられる。

21 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 椿水仙図(前期展示)

国指定重要文化財 220 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

今は退色がはなはだしいが、もとは緑青で描かれた緑の葉が添えられていた。緑青とは、マラカイト(孔雀石・炭酸水酸化銅)という銅の二次鉱石。銅が紙の変色や劣化を引き起こすため、表面の緑青が剥落したあとの紙が茶色に変色することが多い。

22 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 椿水仙図(前期展示)

国指定重要文化財 223 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

21 と同じように椿と水仙を描く。構図は似ているが、よく見ると、花の形、葉脈の入れ方などがまったく異なり、筆の運び方もちがう。狩野家に伝わる粉本(絵手本)に従いつつ、複数の門人がこれら天井画を描いたことがよくわかる。

23 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 椿鳥図(後期展示)

国指定重要文化財 243 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

白椿に、シジュウカラかと思われる頬の白い鳥を添える。筆致は打ち込みの強い古風な筆致で、二之間の天井板絵の中でも特に優れる。

24 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 椿鳥図(後期展示)

国指定重要文化財 244 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

長い尾がしだれる白い鳥に、椿に似た葉を添える。鳥はオナガの一種かと思われる。筆使いは繊細優美。

25 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 薔薇図(後期展示)

国指定重要文化財 248 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

八重咲の薔薇がまっすぐ上に伸びあがる様子を描く、珍しい構図の作品。二之間の天井板絵は、このようなラフな趣きの作品が多い。

26 名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵 鳥図(後期展示)

国指定重要文化財 249 寛永 11 年(1634) 名古屋城総合事務所蔵

鳶が下がる枝と、二羽の鳥(ハクセキレイか)を描く。垂直に垂れる鳶やからまるような鳥など、個性の強い絵師の作。

新春特別公開 浅黄地鉄線唐草文長絹 平成元年作 生駒里翠氏寄贈 名古屋城総合事務所蔵

長絹とは、薄い絹で仕立てられた能装束。脇が縫われておらず、露がつく。一般に女性の舞に用いられ、体の動きにそって袖が優美に翻る。本衣装は、水色の地に、鉄線の花と蔓を金糸で縫い取る、涼やかな意匠の長絹。近年、名古屋城に御寄贈いただいた。

新春特別公開 白地四季花籠桐鳳凰文長絹 平成 10 年作 生駒里翠氏寄贈 名古屋城総合事務所蔵

桜、藤、桔梗など四季の花を活け込んだ花籠を色糸で刺繍し、桐と鳳凰を金糸で縫い取る。豪華な意匠であるが、色彩は柔らかく、優美な長絹となっている。近年名古屋城に一括して御寄贈いただいた能装束のうちの一点。

チラシ



名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展


名古屋城と相応寺

— 家族を愛した女性 相応院の眠る寺 —

令和6年 12月21日[土] → 令和7年 2月24日[月・祝]

会場：名古屋城 西の丸御蔵城宝館
開館時間：午前9時～午後4時30分（最終入館 午後4時）
ただし、催事等により変更となる場合があります。
休館日：会期中は無休（ただし、12月29日(日)～31日(火)は休館）
入館料：入館無料
※名古屋城観覧料200円（名古屋城内自由観覧は100円・中学生以下割引が必要）
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター
協力：一般財団法人 名古屋城振興協会
特別協力：相応寺






名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

名古屋城と相応寺

— 家族を愛した女性 相応院の眠る寺 —

令和6年 12月21日[土] → 令和7年 2月24日[月・祝]

会場：名古屋城 西の丸御蔵城宝館
開館時間：午前9時～午後4時30分（最終入館 午後4時）
ただし、催事等により変更となる場合があります。
休館日：会期中は無休（ただし、12月29日(日)～31日(火)は休館）
入館料：入館無料
※名古屋城観覧料200円（名古屋城内自由観覧は100円・中学生以下割引が必要）
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター
協力：一般財団法人 名古屋城振興協会
特別協力：相応寺



展示風景



出品目録

西の丸御蔵城宝館特別展「名古屋城と相応寺－家康を愛した女性 相応院の眠る寺」

令和6年(2024)12月21日(土)～令和7年(2025)2月24日(月・祝)

主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター 協力 一般財団法人 名古屋城振興協会 特別協力 相応寺

NO	指定	作品名	展示期間	作者等	年代	員数	所蔵
1	名古屋市指定有形文化財	相応院画像	全期	徳川義直自画賛	江戸時代前期	一幅	相応寺
2	名古屋市指定有形文化財	相応院画像 『尾陽国主』印	全期	徳川義直筆	江戸時代前期	一幅	相応寺
3		相応寺障壁画 鶴図・芍薬図杉戸絵のうち芍薬図	前期	裏 鶴図	江戸時代前期	二面	相応寺
4	名古屋市指定有形文化財	相応寺障壁画 芙蓉図・薔薇笹図杉戸絵のうち薔薇笹図	後期	裏 芙蓉図	江戸時代前期	二面	相応寺
5	愛知県指定有形文化財	旧相応寺障壁画 梅椿図襖絵	前期	表 松桜図	江戸時代前期	四面	名古屋市博物館
6	愛知県指定有形文化財	旧相応寺障壁画 松桜図襖絵	後期	裏 梅椿図	江戸時代前期	四面	名古屋市博物館
7	愛知県指定有形文化財	旧相応寺障壁画 雪松図襖	前期		江戸時代前期	四面	名古屋市博物館
8		旧相応寺障壁画 花鳥図屏風	前期右隻 後期左隻		江戸時代前期	六曲一双	名古屋市博物館
9		十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風	後期	田中訥言筆	江戸時代後期	六曲一双	相応寺
10		裏菱紋引手	全期		江戸時代前期	一枚	相応寺
11		扁額「宝亀山」	全期		寛永20年(1643)	一額	相応寺
12		敬公実録	全期		江戸時代後期写	一冊	名古屋東照宮
13		蓬左漣府記稿	全期	加藤品房撰	大正15年(1926)写	一冊	名古屋城総合事務所
14		金城温古録	全期	奥村得義	明治写	一冊	名古屋城総合事務所
15		尾張名所図会 巻二	全期	岡田啓・野口道直撰・小田切春江画	明治13年(1880)再版	一冊	名古屋城総合事務所
16		名古屋武家寺社井町絵図	全期		江戸時代中期	一舗	名古屋城総合事務所
17		名古屋城郭図	全期		昭和23年写	一舗	名古屋城総合事務所
18		水野太郎左衛門家文書 相応寺鐘につき覚書	全期	水野政長筆	寛永20年(1643)	一枚	個人蔵
19	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵花卉図	前期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
20	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵椿図	前期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
21	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵椿水仙図	前期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
22	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵椿水仙図	前期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
23	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵椿鳥図	後期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
24	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵椿鳥図	後期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
25	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵薔薇図	後期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
26	国指定重要文化財	名古屋城本丸御殿上洛殿二之間天井板絵鳥図	後期		寛永11年(1634)	一面	名古屋城総合事務所
新春特別公開		白地四季花箋桐鳳凰文長絹	全期	生駒里翠氏寄贈	平成10年	一領	名古屋城総合事務所
新春特別公開		浅黄地鉄線唐草文長絹	全期	生駒里翠氏寄贈	平成元年	一領	名古屋城総合事務所

前期=12月21日～令和7年1月23日 後期=1月24日～2月24日

(6) 企画展「名品でたどる名古屋城史 創建・戦災・そして明日」

展示概要

会期 令和 7 年(2025) 3 月 7 日(金)～4 月 20 日(日) 45 日間

入館者数 17,110 人(1 日平均 684.4 人)(令和 6 年度分の入館者数のみ)

出品件数 33 件

担当者 朝日美砂子

展示趣旨

名古屋城は江戸時代初期に創建され、明治以降は皇室の離宮となり、その後名古屋市に下賜された。第二次世界大戦末期の空襲により主要建造物を失ったが、戦後再建された天守閣は博物館機能をあわせもち、市民の皆様から貴重な資料をご寄贈いただき、修理しつつ保管してきた。今回の展示では、本丸御殿を飾っていた障壁画はじめ、天皇の御料品など名古屋城の近代を語る資料、またご寄贈資料の名品を公開した。なかでも「信長関係染織資料」は、令和 5 年(2023)度の修理完了後今回がはじめての展示である。あわせて、令和 6 年(2024)度に全 700 面の修理が完了する重要文化財本丸御殿天井板絵の修理過程を紹介した。

解説パネル・作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面及び内容が重複する文言などは省略した。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

解説パネル

I 築城

慶長 15 年(1610)、江戸幕府初代将軍徳川家康は名古屋城築城を下知し、天守と本丸御殿の造営がはじまった。本丸御殿は、家康九男で名古屋城の初代城主となった徳川義直の住まいであり、玄関、大広間、対面所などからなる巨大な建物で、慶長 20 年(1615)春に完成した。本丸御殿の各部屋には、幕府御絵師である狩野家の絵師集団により極彩色の障壁画が描かれていた。昭和 20 年(1945)5 月 14 日、第二次世界大戦の戦火により本丸御殿は全焼したが、障壁画のうち襖絵や天井画は、空襲直前の 4 月に取り外されていたため、焼失を免れた。全 1,049 面が現存し、そのうち 1,047 面が重要文化財に指定されている。

II 将軍来臨

寛永 11 年(1634)、三代将軍家光の京都への上洛のため、上洛殿が本丸御殿に増設された。上洛殿は六室からなり、西北角の上段之間が将軍御座之間とされた。帳台構をへだてた上段之間の奥の部屋は、納戸之間と呼ばれ、納戸之間への出入口は帳台構のみであった。よって納戸之間と上段之間は一体的に利用されたと考えられる。上段之間は、入側との仕切りなどの開口部すべてが内側から施錠できる仕組であり、上段之間からしか出入りできない納戸之間は、本丸御殿中最も安全な、閉じられた空間であった。

III 天皇行幸

明治維新後名古屋城は陸軍(名古屋鎮台)の管理下に置かれ、本丸御殿も鎮台の会議室などとして用いられた。しかし本丸御殿は夏暑く冬寒く、修復にも多額の費用を要したため、明治 26 年(1893)宮内省に移管され、名古屋離宮となった。離宮としての利便性のため宮内省は本丸御殿を改築し、明治 30 年(1897)、明治天皇が行幸された。このはじめての行幸後、明治天皇は延べ 10 回にわたり名古屋離宮に宿泊された。天皇の御座所は上洛殿の上段之間とされ、洋風の生活にあわせ、絨毯、椅子、卓子(テーブル)、卓被(テーブルクロス)などが搬入された。

IV-1 皇太后行啓

天皇・皇后のお二方が名古屋離宮に宿泊される場合、天皇御座所は上洛殿におかれ、皇后御座所には御湯殿書院があてられた。なお、名古屋城三之丸の陸軍施設である偕行社や二之丸の将校集会所が緊急時の避難所とされ、天皇と皇太子が同日に行幸啓される場合は偕行社が皇太子の宿泊所となった。昭和 12 年(1937)、大正天皇皇后であった貞明皇太后が、第 3 回大阪産業工芸博覧会御高覧の帰途、名古屋城に宿泊された。名古屋城はすでに名古屋市に下賜されており、市が管理する名古屋城への最初のそして最後の皇族宿泊となった。名古屋城に当時の書類や図面が保存されており、御湯殿書院を皇太后御座所とし、上洛殿二之間を謁見所としたことが知られる。上洛殿二之間は、大床を備えるが付書院や張台構はなく、上段之間・一之間に比べ格下の部屋である。大正天皇御座所は上洛殿一之間に置かれることもあったため、それを憚ったと考えられる。

IV-2 皇太后行啓とガラス乾板写真

貞明皇太后の御駐泊が一段落した昭和 15 年(1940)、名古屋市は本丸御殿を含む名古屋城内国宝建造物のガラス乾板撮影を開始した。現在、700 枚以上のガラス乾板が戦火に耐え名古屋城に保存されている。しかし、現存するガラス乾板の全てがこの時の撮影ではない。たとえば御湯殿書院と上洛殿の御座所を撮影した 3 枚(うち御湯殿書院 2 枚は同じカット)は、カメラ位置が他のガラス乾板とは明らかに異なり、急いで撮影したかのようなだらしなさがある。実は、この 3 枚は、昭和 12 年(1937)の貞明皇太后の名古屋城行啓時、愛知県による記録撮影の際に撮影された写真に他ならない。従来これら 3 枚の写真は、違和感を抱かれながらも未検討のまま看過されてきた。今後は、名古屋城所蔵のガラス乾板一枚一枚の検証が必須であろう。

V 名古屋市への下賜

昭和 5 年(1930)12 月、名古屋離宮が廃され、名古屋城は名古屋市に下賜された。名古屋城本丸部の所有者は、尾張徳川家、陸軍省、宮内省を経て名古屋市となった。下賜に先立ち、文部大臣にあてた名古屋市長からの願い書文案が、名古屋城に保存されている。内容は、「宮内省が名古屋離宮をご必要としないなら、ぜひ下賜していただき、史跡および国宝建造物として文部省に御指定いただき、名古屋市が永遠に維持管理いたします」と請うもので、愛知県を通じ文部省に伝達された。宮内省からの名古屋離宮下賜とは、文部省による国宝指定と、文部省の指示下で名古屋市が保存管理の責任を負う事を前提としていたこ

とが、この文書一通からもよくわかる。12月11日の離宮裁定の2日後の12月13日、天守・本丸御殿・隅櫓など江戸期以来の建造物ほぼ全棟が、文部省により国宝に指定された。そして12月18日、名古屋市は、名古屋城保存管理調査委員会を発足させ、文部省から有識者を招聘しての会議を開催した。昭和14年(1939)の二条離宮の下賜においても、下賜と国宝指定、会議発足がまったく同じ流れで行われた。

VI 天守炎上

第二次世界大戦が勃発すると、天守という高層建築を擁する広大な名古屋城は、連合軍にとり絶好の空爆指標となった。昭和20年(1945)5月14日、名古屋城上空で連合軍の焼夷弾爆撃がはじまった。目標は名古屋北部市街地、出撃機数524機、攻撃回数275回。午前8時5分から9時25分のあいだに、2,515トンの焼夷弾が投下された。大量の焼夷弾により、名古屋城は15年前に指定されたばかりの国宝建造物の大半を失った。写真は燃えさかる大天守を南側から撮影したもの。「東海軍管区司令部報道部 岩田一郎撮影」と書き込まれている。東海軍管区は、昭和20年(1945)2月1日に設けられた陸軍の軍管区で、岩田氏は報道部に所属していた。いくつも重なっている三角の屋根は、大天守二層・三層・四層の南妻部千鳥破風である。岩田氏の手記に、天守南にあった軍管の作戦室屋上から、望遠レンズをつけたライカカメラで撮影したと記されている。(『名古屋空襲誌』6号・1979年)

VII-1 博物館としての名古屋城

戦災焼失から14年後の昭和34年(1959)10月、昭和天守閣が本丸に再建された。戦火の恐怖がさめやらぬ時期であり、昭和天守閣は鉄筋鉄骨コンクリート製とされ、昭和37年(1962)3月24日、官報告示第74号により、博物館相当施設に指定された。博物館相当施設とは、昭和26年(1951)に制定された博物館法第29条の規定に基づき、文部大臣により指定される博物館施設である。当時、名古屋市立の博物館施設はなく、市民からの寄贈品が数多く天守閣に寄せられた。その後天守閣には、名古屋城の歴史や城下の文化を紹介する常設展示と、特別展を開催する特別展示室が設置された。

VII-2 博物館としての名古屋城

名古屋城では、ご寄贈いただいたり購入したりした所蔵資料の修理に取り組んでいる。令和3年(2021)度から5年(2023)度にかけては、市内の旧家からご寄贈いただいた染織資料の修理を3か年計画で行った。織田信長所用とされる鎧下着2領と軍旗2流であり、信長から家臣の山崎又二郎重友に与えられたと伝えられる。明治23年(1890)、第1回陸海軍連合演習に臨御するため明治天皇が愛知県に行幸された時には、行在所となった東本願寺(東掛所・名古屋別院)で天覧に供されるなど、つとに知られた名品である。今回が、修理後初のお披露目となる。

VIII-1 西の丸御蔵城宝館の誕生

昭和天守閣内に設置されていた収蔵庫は、江戸期の石垣(天守台)の上に建ちコンクリートの外壁も厚かったため、温湿度は比較的安定していた。しかし、収蔵庫に出入りするには石段を登り降りするしかなく、文化財を恒久的に保存するには不向きであった。よって新収蔵庫の建設が希求され、文化庁との協議

を経て、令和3年(2021)、文化財の収蔵展示施設である西の丸御蔵城宝館が、西之丸の地に開館した。西之丸は、米蔵構と呼ばれ、江戸後期には六棟の米蔵が並んでいた。西の丸御蔵城宝館は、三番御蔵と四番御蔵の位置におおむね合わせた設計となっている。藩民にとり欠くべからざる備蓄米を保管する地であり、市民の方々の共有財産である文化財を永久保存する場所にふさわしい。

VIII-2 西の丸御蔵城宝館の誕生

本丸御殿上洛殿のR天井の解体修理は、平成19年(2007)度から開始され、今年の3月末で全点の修理が完了する。R以外の天井画の修理も今年度で完了し、昭和61年(1986)以来の本丸御殿障壁画全1,047面の修理が、3月末で一段落する予定である。しかし、修理に使った材料は、紙、木、糊、膠など、すべて自然の材料であり、時間とともに劣化し、少しずつ失われていく。そもそも修理材料は、次の修理を見越し、可逆性のあるもの、すなわちいつでも取り除けるものしか用いない。よって修理は、世代を超えて数十年おきに繰り返さされるべきものであり、名古屋城本丸御殿障壁画も、江戸期から何度も修理されてきた。ここ西の丸御蔵城宝館は、本丸御殿障壁画、ガラス乾板写真、近代文書、離宮期家具などの名古屋城史に関する資料と、皆様からご寄贈・ご寄託いただいた文化財を、保管し、修理し、そして最新の知見のもとに公開する場所として設立された。よって、ごくごく小さな建物ではあるが、収蔵庫内の文化財について、温度湿度を変えずに、また最小限の移動により点検修理ができるよう、収蔵庫区域内に修復室を設けている。今後も、修復室において、障壁画をはじめとする文化財の点検修理を継続する計画である。西の丸御蔵城宝館の活動について、一層のご理解を賜りますよう、深くお願い申し上げます。

作品解説

1 名古屋城関係書類 昭和前期

名古屋城は、江戸時代初め、徳川家康の命により築城された。その後の名古屋城史は、尾張徳川家の居城であった江戸期、第六聯隊が置かれた陸軍期、本丸御殿が天皇の宿泊所となった名古屋離宮期、そして名古屋城ほぼ全域が名古屋市の管理となった市営期という四つの時代に大別できる。それぞれの時代、名古屋城について多くの記録がなされてきた。名古屋城はそれらの記録にたって、次の時代を模索する。

2 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 竹林豹虎図襖絵

玄関一之間東側(一之間・二之間境)4面のうち中央2面 慶長19年(1614)

本丸御殿の正規の入口である玄関を飾る襖絵。竹林で遊ぶ虎と豹を描く。虎は日本には生息しない異国の珍獣で、来城者を威圧しまた城内の者を護る霊なる存在としてしばしば御殿の玄関に描かれた。よって虎図襖絵は他にも存在するが、名古屋城本丸御殿の本襖絵は、繊細優美な名品として広く知られている。しかし、前回の解体修理から40年近くたっており、点検を繰り返しつつ次回の修理に備えている。このため近年貸出は一切しておらず、門外不出を続けている。

3 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 帝鑑図襖絵

上洛殿上段之間東側(上段之間・納戸之間境)2面 寛永11年(1634)

本丸御殿上洛殿の上段之間と納戸之間を仕切る帳台構の襖絵。左右に開く仕組みで、両側は壁であった。通常の襖絵よりはるかに小さく、敷居も高い位置にあり、將軍は身をかがめ足を高く持ち上げて納戸之間に入室した。展示は上段之間側で、帝鑑図という、中国古代皇帝の善政が描かれている。飾金具には七宝が込められ金と銀で鍍金されており、本丸御殿の中でももっとも華麗な建具となっている。裏側は、金箔地に藤花を描く優美な藤棚図である。

4 梨子地蒔絵菊紋散椅子 明治～大正

昭和5年(1930)に名古屋離宮が名古屋市に下賜された時、あわせて宮内省から市に移管された大型の椅子。木部は優美な曲線を描き、とくに脚は滑車付きの猫足である。座面や背もたれ、肘掛部の裂は、幾何学文を織り出す天鷲絨で、木部と裂地の間は金モールで縫い留めている。一方、木部には梨子地蒔絵という日本独自の加飾がなされている。宮内省は同工の梨子地椅子を明治10年(1877)代から作製しており、明治30年(1897)の明治天皇の初めての名古屋離宮行幸の頃、名古屋離宮にもたらされた可能性もある。梨子地蒔絵は蒔絵の中でも最も格上の仕様であり、天皇御料にふさわしい。

5 黒漆塗菊紋散椅子 明治～大正

梨子地蒔絵ではなく黒漆塗で加飾された椅子。宮内省の用品台帳には、かなりの数の同様の椅子が記載されている。4の椅子にくらべ格をおとした仕様から、名古屋城においては皇后御料として用いられたと考えられる。なお、沼津御用邸では、ほぼ同じ菊紋の梨子地椅子が天皇御座椅子として伝えられている。現在の宮中でも、相似た仕様の椅子が使用されている。

6 七宝紋卓被 明治～大正

名古屋城には、鳳凰、龍、菊、桐に七宝繫文を織り上げた華やかな卓被(テーブルクロス)が、二枚伝来する。本資料と、一回り大きくひときわ鮮やかなものの二枚である。いずれも昭和5年(1930)、名古屋離宮の名古屋市への下賜にともない名古屋市に下賜された。宮内省の戦前の用品台帳である「宮殿物品台帳」(宮内省宮内公文書館蔵)に、「錦赤地七宝龍菊桐模様」の名称の卓被が複数記載されており、展示の卓被と同じような織物と見なされる。また同工の卓被が日光田母沢御用邸、大阪の泉布観などに所蔵されるところから、行幸啓の途絶後、各機関に下賜されたと考えられる。卓被は、本来机(卓子)を包むように折って掛けるべきものだが、絹糸の劣化がはなはだしく、平面展示とした。裏には白無地の羽二重を縫い合わせ名古屋市の備品票を貼り込んでおり、昭和5年(1930)12月11日、名古屋市の備品として登録されたことが確認できる。

名古屋市備品／経済 宮内省ヨリ譲受品／名古屋城費並徳川園費／

品名 御卓被／記番号 第二号／受入 昭和五年一二月一日／所属課廨 名古屋城管理事務所

7 白地縹子卓被 明治～大正

菊と桐紋を立湧模様の中に配する縹子地の卓被。机の上にそのまま被せられるよう、箱状に仕立てられている。「宮殿下 御用品箱」と墨書された、簡素な木箱に納められていた。

8 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 扇面流図襖絵

御湯殿書院一之間北側(一之間・二之間境)4面 寛永11年(1634)

本丸御殿上洛殿に付属する御湯殿書院の襖絵。御湯殿書院は湯気式の風呂(湯殿)に接しており、上段之間・一之間・二之間と將軍専用の手洗所からなっていた。展示の襖絵は、一之間と二之間的境の襖絵。川面に扇がたどる扇面流図を描く。扇面流図は中世以来の伝統的な大和絵系の画題であり、江戸期の狩野派は、内向きの殿舎の装飾にしばしば用いた。なおこの裏側は、荒海に鳥が飛び交う「岩波禽鳥図」で、風呂にふさわしく水にまつわる画題となっている。

9 重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 山水花鳥図天井画

御湯殿書院上段之間大床天井 2面 寛永11年(1634)

御湯殿書院上段之間床之間の天井画。床之間の天井は、近くから見上げないと見えないため、通常絵はない。御湯殿書院は小規模な内向きの建物で、床之間の垂壁も浅いため、特別に絵を描いたのかもしれない。構図は、唐草唐花文を金箔で擦り出した装飾帯の中に、大小さまざまな円形をくくり、山水図や花鳥図を描きこむもの。変化に富む構図も天井画には例がなく、寛永期の優美な意匠として貴重である。大床(床の間)の天井画は、幅約4mと長く、二分割されている。また、下から見上げるものであるため、手前側が下になるように描かれている。そのまま展示すると天地が逆になってしまうので、ここでは180度回転させて展示した。また下の白木は、平成9年(1997)の修理時に付けたものである。

10 御殿向引渡受取図 金城録のうち 原本明治26年(1893)成立 明治写

明治26年、本丸御殿が陸軍省から宮内省に移管されるにあたり、宮内省により作成された図面の写し。本丸御殿上洛殿納戸之間に「寝所」と明記されている。移管時、納戸之間が天皇の御寝所に確定していたことがわかる。ただし、その後は上洛殿上段之間や一之間を御寝所とすることもあった。

11 皇太后行啓関係図面 昭和12年(1937) 名古屋市作成

昭和12年6月、貞明皇太后が本丸御殿に駐泊されたときの青焼図面。上洛殿二之間に「謁見所」と記されている。謁見所とは、皇太后が愛知県や名古屋市の長などを謁見する部屋である。

12 皇太后行啓関係書類 昭和12年(1937) 名古屋市作成

名古屋城に残る、行啓関係書類一式。名古屋市として初めて名古屋城に皇太后を迎えたため、綿密に準備した。ただし写真撮影に関する記録はない。

13 ガラス乾板 御湯殿書院一之間より上段之間南西側を望む 昭和12年(1937)7月5日撮影か

御湯殿書院一之間を写す名古屋城所蔵のガラス乾板写真。奥に上段之間が見える。『皇太后陛下関西地方行啓愛知県記録』所載の写真と比べると、カメラ位置が低く被写体に近いため、部屋が収まりきらず、試し撮りのように見える。また、背もたれが丸い小振りの椅子は、皇居内で大量に備えられていた椅子で、本行啓のため搬入されたと考えられる。なお名古屋城所蔵のガラス乾板と『皇太后陛下関西地方行啓

愛知県記録』には、2脚の御座椅子が写るが、いずれも名古屋城所蔵のもの(No.4・5)とは明らかに異なり、格下の仕様となっている。行幸啓で用いる御料品は、その都度皇居から運ばれるのが原則であり、本行啓においても御料品一式が東京から搬入されたと考えられる。

14 ガラス乾板 上洛殿二之間北側 昭和 12 年(1937)7 月 5 日撮影

上洛殿二之間の皇太后謁見所を写す、名古屋城に伝えられた写真。『皇太后陛下関西地方行啓愛知県記録』所載の写真と比べると、カメラ位置が床の間と平行ではなく、掛軸も上部が切れるなど、美しさに欠ける。

15 ガラス乾板 上洛殿一之間より上段之間東北側を望む 昭和 15～16 年(1940～41) 名古屋市撮影

昭和 15 年度、国宝建造物撮影の一環として名古屋市が撮影したガラス乾板写真。襖を大きく開け、天皇御座椅子が据えられた上段之間を明確にとらえ、長押上の彫刻欄間や天井まで写しこんでいる。光も隅々までまわっており、No.13・14 の皇太后行啓写真にくらべ高い技量を示している。逆に No.13・14 は、不要な乾板を名古屋市が愛知県から譲り受けたものかもしれない。

16 『皇太后陛下関西地方行啓愛知県記録』 昭和 13 年(1938) 愛知県発行

昭和 12 年(1937)の皇太后行啓の記録として愛知県が出版した本。第一節十三「記録編集」の項に、名古屋市在住の写真家加藤俊幸氏に記録写真の撮影を委嘱したとある。加藤氏が撮影した写真は、公式記録にふさわしく画角が調えられており、本丸御殿に設営された皇太后御座所や謁見所がきっちりと写し込まれている。

17 明治三十年以降 御駐泊御泊年月日調 昭和前期 宮内省作成

天皇、皇后、皇太子、皇太子妃、親王、内親王の名古屋離宮宿泊をまとめた宮内省の記録。天皇、皇后の行幸啓日は、『明治天皇紀』・『大正天皇実録』・『愛知県聖蹟誌』などの記録とほぼ一致する。皇太子、皇太子妃、親王、内親王の御成も含めた名古屋城への皇族の御宿泊は、昭和まで含めれば延べ 100 回を超える。戦後も名古屋城への行幸啓は複数回を数えるが、本丸御殿を失った名古屋城でのお泊りはもとよりない。(「名古屋離宮・名古屋城 行幸啓回数」を参考資料として掲示した。)

18 富士萬衛書簡 岡島栄七宛 明治 35 年(1902)11 月 1 日 松永直幸氏寄贈

離宮期の天皇御駐泊に関する貴重な手紙。九州大演習からの還幸として明治天皇が名古屋離宮に一泊される日が決まったので、生花の準備を進めるよう名古屋離宮取締の富士萬衛が名古屋在住の生花宗匠岡島栄七に委嘱するもの。行幸啓においては、掛軸や立花などの床飾りについても、周到に準備されるのが常であった。

九州方面大演習地江／行幸被仰出来ル七日／當離宮御一泊被為在候ニ付当日生花之件／
兼而御示す談申置候通り／御準備相成度比段／及御依嘱候也
十一月一日／名古屋離宮取締／富士萬衛／「名古屋離宮印」朱文方印／岡嶋栄七殿

19 名古屋市長文案 文部大臣宛 昭和5年(1930)10月25日付

名古屋城御下賜ニ関スル御沙汰書 附 引継ぎ書類のうち

名古屋離宮下賜の一か月前、名古屋市長が文部大臣に提出した願書文案。「名古屋離宮が宮内省でご必要のないのなら、ぜひ下賜を受け、国宝建造物として貴省(文部省)の御指定をこうむり、名古屋市が永遠に維持管理いたしたく熱望します」と記している。下賜と国宝指定、名古屋市の責任による保存管理とがあらかじめ定められていたことを示す、初公開の貴重な文書。

20 御沙汰書 宮内省発行 名古屋市宛 昭和5年(1930)12月11日付

宮内省から名古屋市に与えられた、下賜の御沙汰書。昭和天皇の思召しによって名古屋離宮が下賜されたことを名古屋市に沙汰するもの。まったく同じ体裁の御沙汰書が、昭和14年(1939)京都市に下賜された二条城(二条離宮)にも伝えられている。

名古屋市／一 元名古屋離宮土地建物／所在 名古屋市西區壱番／

右今般／思召ヲ以テ下賜ノ旨／被／仰出候事／

昭和五年十二月十一日／宮内省

21 昭和五年度 名古屋城二関スル綴 名古屋市土木部編 昭和5年(1930)

下賜前後の書類をまとめた綴。「非常持出 1-4」という赤紙が表紙に貼られ、名古屋城内で保管されてきた。宮内省からの下賜品一覧が綴じられており、掃除道具など名古屋離宮で使われていた大量の日用備品がそのまま城内に残されたことがわかる。その大半は戦火で失われたが、御座椅子や卓被などの御料品は、名古屋市役所本庁舎内の奉安殿(天皇御真影を納める部屋)で保管されていたため、焼失を免れた。

22 絵葉書「西方より見たる名古屋城」

昭和8年(1933)2月11日消印 名古屋城観光協会発行 加藤良明氏寄贈

名古屋城公開後に発行された絵葉書。名古屋城西北の御深井丸から仰ぐ天守西北面と、大正・昭和両天皇の即位礼で仮賢所が造営された跡地とする石柱が写っている。ただし実際の仮賢所は、御深井丸の中央に造営されていた。戦後、御深井丸一帯は遊園地やイベント会場を経て椿園になり、その後整地されて本丸御殿復元工事の材木加工場が置かれ、現在は名古屋城調査研究センターなどが建っている。

23 名古屋城総図 昭和前期

大正8年(1919)に宮内省が作成した「名古屋離宮総図」(宮内省宮内公文書館蔵)を底本とし、昭和5年の下賜後に名古屋市が作成した図。西之丸に旧宮内省職員官舎があり、本丸御殿は「旧御殿」と記されている。二之丸や三之丸は「歩兵第六聯隊」「旅団司令部」などが林立する陸軍用地であったこともよくわかる。「孔門」(穴門)という今も使われている名称が、正門の脇に記されている。明治43年(1910)の旧江戸城蓮池御門を名古屋離宮に移築した後、宮内省が定めた名称と考えられる。

24 金鯰 残骸 江戸時代

天守屋根を飾っていた金鯰(北方)の残骸の可能性が高い金属塊。金鯰は、鯰の形に彫った木(芯)に、鉛の板をかぶせ、金の薄板を貼った銅板を打ち付けていた。北鯰は全焼し木部は焼滅したが、鉛と金、銅がまじって溶けた塊が焼け跡に残されたと伝えられる。成分分析など、今後の精査が望まれる。

25 天守金具 江戸時代

終戦後の昭和20年(1945)12月、天守の焼け跡から収集され、将来の復元のために名古屋城内で保存されてきた金具類。葵紋や魚子を緻密に彫金した六葉釘隠で、天守の飾金具と考えられる。このほか、天守破風や屋根瓦を飾っていた金具類が、名古屋城に伝えられている。その数は、微小な破片まで含めれば千点を超える。いずれも痛ましく焼損しており、保存と整理が急務となっている。

26 木瓜紋鎧下着【萌黄四ツ目菱斜格子綾地木瓜紋鎧下着】 江戸時代前期 山崎文次氏寄贈

綿入りの鎧下着。木瓜の五ツ紋が前身頃、背、袖にある。衿仕立てで、表地は萌黄色の綾絹、裏地は紅色の平織絹が用いられている。表地・裏地ともに、非常に薄く柔らかい。修理前は、もっとも負担のかかる衿、肩山、袖山の表地が著しく欠損し、中綿が露出していた。表地の一部は断片化し、中綿にかろうじて張り付いていた。表地の色は、右衿(常時隠れる箇所)以外は変退色し、裏地も変退色していた。全体に、この上なく痛ましい状況であった。修理にあたっては、掛けて飾ることは将来にわたり決して行わず、専用ケースに平置き展示することを大前提とした。よって解体箇所を必要最小限にとどめ、今後広がる可能性の低い小さな虫穴は補修せず、使用痕の可能性のある皺はあえて残すという仕様にした。補修裂・糸はあらたに作り、柔らかく清らかな風合がよみがえった。

27 名古屋温故會絵葉書「織田信長着用胴服」 昭和前期 個人蔵

戦前に発行された絵葉書。襟や肩は健全でほつれもなく、木瓜紋がくっきりと見える。染織品は紫外線に弱く、退色が早い。長期間衣桁に掛けておくことも絹地の劣化を早める。絵葉書作成後、急激に退色と劣化が進んでしまったことがよくわかる。

28 軍旗 江戸時代前期 山崎文次氏寄贈

木瓜紋鎧下着と一括してご寄贈いただいた軍旗二流のうちの一流。法量は、縦320.8cm、横40.3cm。藍染と思われる紺色の薄い絹地の両面に、金色の帯状の装飾を二本斜めに置いている。金は、金泥と金箔を併用したかと思われる。長辺は両辺とも耳使いで、短辺は一辺が二つ折、一辺が三つ折にされている。全体に刺し子状の縫い糸が残っていた。旗は戦場での実用品であり、保存する場合も小さく折ったり巻いたりする場合が多く、健全な遺品はきわめて少ない。本資料も、緯目方向に皺と裂けが多数入り、虫穴もあり、全体によれていたが、信長からの拝領品として大切に保存されてきたため、当初の形状を比較的よく残していた。一括4点を3か年かけて行った修理により、深みのある紺色と金色による鮮やかな意匠がよみがえり、また金地・紺地ともに安定した。

29 修理使用材料 制作 株式会社松鶴堂・勝山織物株式会社絹織製作研究所 名古屋城総合事務所蔵

修理に使用された補修糸と補修裂。元の裂に負担をかけず、適当な張りとしなやかさを保持する絹糸と裂を、蚕の段階から選定し、紡ぎ、織り、染めていただいた。鎧下着については、当初の色が残る部分を参照し、華やぎのある萌黄色に染めた。その結果、元裂とよく馴染み、かつ、元裂の美しさを引き出す補修裂となった。

軍旗 使用材料

① 補修裂(紺系) 酸性染料・生経生緯絹平織 勝山織物株式会社 絹織製作研究所製

② 補修糸(紺系) 酸性染料・絹練糸 28 デニール双糸片撚り 勝山織物株式会社 絹織製作研究所製

③ 補修紙(黄系) 直接染料・美濃 長谷川聡氏製

木瓜紋鎧下着 使用材料

① 補修裂(緑系) 生経生緯経三枚綾(左上がり)織 勝山織物株式会社 絹織製作研究所製

② 補修糸(緑系) 絹練糸 42 デニール双糸諸撚り 勝山織物株式会社 絹織製作研究所製

③ 仕立糸(緑系) ②の補修糸 10 本を 1 本に撚り合わせ(420 デニール) 株式会社 松鶴堂製

④ 衿丸み縫い糸(緑系) ②の補修糸 2 本を 1 本に撚り合わせ(84 デニール) 株式会社 松鶴堂製

30 重要文化財 名古屋城本丸御殿天井画 山水図 寛永 11 年(1634) 名古屋城本丸御殿上洛殿一之間

本丸御殿上洛殿一之間の折上部分の湾曲部(R)の天井画。令和 5 年度(2023)、文化庁補助事業により解体修理を終えた。水際に生える灌木を、柔らかな筆致でとらえる。本紙は竹紙に描かれており、劣化が進んでいるが、緑青の顔料がわずかに残っている。狩野派正系の絵師による、珠玉の作である。

31 名古屋城本丸御殿天井画 木部模型

文化庁補助事業 令和 4 年(2022)度 制作 株式会社松鶴堂・有限会社楽浪文化財修理所

R 天井画の木部(支持体)の模型。杉の薄板を二枚はぎにし、裏から桧の足を三本釘打ちし、薄板の湾曲を固定させている。

32 名古屋城本丸御殿天井画 構造模型 文化庁補助事業 令和 4 年(2022)度 制作 株式会社松鶴堂

R 天井の修理構造を示す模型。木部に順に和紙やカーボン繊維シートを貼り重ね、肌裏・増裏を打った本紙を貼っている。

33 名古屋城本丸御殿天井画 修理材料 文化庁補助事業 制作・協力 株式会社松鶴堂

R 天井の修理に使用するカーボン繊維シートと、L 字状に成形したカーボン繊維、各種補修紙である。カーボン繊維シートは、炭素繊維を薄い板状にしたもので、軽く強く、熱変性も少ないため、文化財修理においても使用されている。

17 参考資料 明治三十年以降 御駐泊御泊年月日調

名古屋離宮・名古屋城 行幸啓回数 ★往路か帰路か不明のものもある

行幸啓 回数	年	西暦	滞在日 ではない	明治天皇	明治天皇妃 (昭憲皇后)	大正天皇	大正天皇妃 (貞明皇后)	昭和天皇	昭和天皇妃 (香淳皇后)	宮・親王	目的
1	明治30年	1897	4月17日	1回目 通算1泊	1回目 通算1泊						京都府下行幸啓
2	明治31年	1898	11月13日	2回目 通算2泊							摂河泉陸軍特別大演習行幸
3	明治33年	1900	4月26日	3回目 通算3泊							兵庫県下海軍大演習行幸
4	明治33年	1900	5月2日	4回目 通算4泊							兵庫県下海軍大演習還幸
5	明治35年	1902	11月7日	5回目 通算5泊							熊本県下陸軍大演習行幸
6	明治36年	1903	4月7日	6回目 通算6泊							京都大坂二府兵庫県下行幸
7	明治36年	1903	4月12日		2回目 通算2泊						京都府下行啓
8	明治36年	1903	5月26日			皇太子嘉仁として 1回目 通算1泊	皇太子妃として 1回目 通算1泊				大坂市博覧会行啓
9	明治36年	1903	6月8日			2回目 通算2泊	2回目 通算2泊				大坂市博覧会還啓
10	明治36年	1903	10月6日			3回目 通算3泊					和歌山香川愛媛岡山県下行啓
11	明治36年	1903	11月11日	7回目 通算7泊							兵庫県下陸軍特別大演習行幸
12	明治38年	1905	6月3日							常宮1 周宮1	大坂市博覧会御成
14	明治38年	1905	6月15日							富美宮1 泰宮1	大坂市博覧会御成
15	明治38年	1905	6月21日							常宮2 周宮2	大坂市博覧会御帰還
16	明治38年	1905	6月23日							富美宮2 泰宮2	大坂市博覧会御帰還
17	明治38年	1905	11月29日			4回目 通算4泊					神宮参拝還啓
18	明治39年	1906	10月14～18日			5回目 通算11泊					愛知県下行啓 参謀演習見学
19	明治40年	1907	5月10日			6回目 通算12泊					山陰道行啓
20	明治43年	1910	4月21～23日			7回目 通算15泊					岐阜行啓
21	明治43年	1910	11月11日	8回目 通算8泊							岡山県下陸軍特別大演習行幸
22	明治43年	1910	11月18日	9回目 通算9泊							岡山県下陸軍特別大演習還幸
23	明治44年	1911	5月18日		3回目 通算3泊						三重県下行啓
24	明治44年	1911	5月22日		4回目 通算4泊						三重県下還啓
25	明治44年	1911	10月15～17日			8回目 通算18泊					愛知県下騎兵特別演習地行啓
26	明治44年	1911	11月18日	10回目 通算10泊							福岡県下陸軍特別大演習還幸
27	大正元年	1912	10月14日		昭憲皇太后として 5回目 通算5泊						京都府下行啓
28	大正元年	1912	11月5日・6日			大正天皇として 9回目 通算20泊	貞明皇后として 3回目 通算4泊				京都府下行幸啓
29	大正2年	1913	3月28日					皇太子裕仁として		淳宮1 光宮2	桃山御陵御参拝
30	大正2年	1913	10月18日			10回目 通算21泊	4回目 通算5泊			貞愛親王1	桃山御陵御参拝
31	大正2年	1913	11月12～17日			11回目 通算27泊				貞愛親王2	愛知県陸軍特別大演習
32	大正3年	1914	6月13日			12回目 通算28泊	5回目 通算6泊				桃山御陵御参拝
33	大正3年	1914	6月14日			14回目 通算29泊	6回目 通算7泊				桃山御陵御参拝還幸啓
34	大正3年	1914	11月13日			15回目 通算30泊					大阪府下陸軍特別大演習
35	大正3年	1914	11月20日			16回目 通算31泊					大阪府下陸軍特別大演習還幸
36	大正4年	1915	5月13日			17回目 通算32泊					桃山御陵御参拝
37	大正4年	1915	5月14日			18回目 通算33泊					桃山御陵御参拝還幸
38	大正4年	1915	7月5日・6日					2回目 通算3泊			伊勢神宮御参拝
39	大正4年	1915	11月6日			19回目 通算34泊					即位礼行幸
40	大正4年	1915	11月27日			20回目 通算35泊					即位礼還幸
41	大正4年	1915	7月17日							淳宮2 高松宮2	伊勢神宮御参拝
42	大正4年	1915	7月26日							淳宮3 高松宮3	京都府下還御
40	大正5年	1916	3月29日				7回目 通算8泊				奈良行啓
43	大正5年	1916	4月1日			21回目 通算36泊					奈良行幸
44	大正5年	1916	4月5日			22回目 通算37泊					奈良還幸
45	大正5年	1916	4月9日				8回目 通算9泊				奈良還啓
46	大正5年	1916	7月3日					3回目 通算4泊			北陸沿海行啓
47	大正5年	1916	11月7日			23回目 通算38泊					福岡県佐賀県陸軍特別大演習行幸
48	大正5年	1916	11月18日			24回目 通算39泊					福岡県佐賀県陸軍特別大演習還幸
49	大正6年	1917	5月4日					4回目 通算5泊			奈良県下行啓
50	大正6年	1917	11月5日			25回目 通算40泊	9回目 通算10泊				京都府下行幸啓
51	大正6年	1917	11月19日				10回目 通算11泊				京都府下還啓
52	大正7年	1918	4月1日					5回目 通算6泊			京都府下幸啓
53	大正7年	1918	7月15日							淳宮4 高松宮4	京都府下御成
54	大正8年	1919	11月9日			26回目 通算41泊					兵庫県下陸軍特別大演習行幸
55	大正8年	1919	11月18日			27回目 通算42泊					同軍特別大演習還幸
56	大正9年	1920	5月4日							高松宮5	海軍兵学校御入学
57	大正10年	1921	2月22日					6回目 通算7泊			神宮并ニ山陵御参拝
58	大正11年	1922	11月3日				11回目 通算12泊				三重県并京都府下行啓
59	昭和3年	1928	11月6日					7回目 通算8泊	1回目 通算1泊		即位礼行幸啓
60	昭和3年	1928	11月25日					8回目 通算9泊	2回目 通算2泊		即位礼還幸啓
61	昭和12年	1937	6月29・30日7月1～3日	明治天皇 10回 10泊	昭憲皇太后 5回 5泊	大正天皇 27回 42泊	貞明皇太后 12回 17泊	昭和天皇 8回 9泊	香淳皇后 2回 2泊	親王宮家7人 19回19泊	第3回大阪産業工芸博覧会環啓

延べ13人 83回 104泊

★常宮＝昌子内親王（つねのみやまさこ）周宮＝房子内親王（かねのみふさこ） 富美宮＝允子内親王（ふみのみや のふこ） 泰宮＝聡子内親王（やすのみやとしこ）
淳宮＝秩父宮雍仁親王（ちちふのみや やすひと） 光宮＝高松宮宣仁親王（たかまつのみや のふひと） 貞愛親王＝伏見宮貞愛親王（ふしみのみや さだなる）

展示風景



出品目録

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 企画展 **名品でたどる名古屋城** 創建・戦災・そして明日

会期 令和7年3月7日（金）～4月20日（日） 会場 名古屋城西の丸御蔵城宝館

主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター 協力 名古屋城振興協会

番号	資料名	員数	時代	備考
1	名古屋城関係書類	一括	昭和前期	名古屋市作成
2	名古屋城本丸御殿障壁画 竹林豹虎図襖絵	4面のうち中央2面	慶長19年（1614）	重要文化財
3	名古屋城本丸御殿障壁画 帝鑑図襖絵	2面	寛永11年（1634）	重要文化財
4	梨子地蒔絵菊紋散椅子	1脚	明治～大正	宮内省下賜品
5	黒漆塗菊紋散椅子	1脚	明治～大正	宮内省下賜品
6	七宝文卓被	1枚	明治～大正	宮内省下賜品
7	白地縹子卓被	3枚	明治～大正	宮内省下賜品
8	名古屋城本丸御殿障壁画 扇面流図襖絵	4面	寛永11年（1634）	重要文化財
9	名古屋城本丸御殿障壁画 山水花鳥図天井画	2面	寛永11年（1634）	重要文化財
10	御殿向引渡受取図 金城録のうち	1舗	原本明治26年（1893）	宮内省下賜品
11	皇太后行啓関係図面	一式	昭和12年（1937）	名古屋市作成
12	皇太后行啓関係書類	一式	昭和12年（1937）	名古屋市作成
13	ガラス乾板「御湯殿書院一之間より上段之間南西側を望む」	1枚	昭和12年（1937）7月5日	愛知県撮影
14	ガラス乾板「上洛殿二之間北側」	1枚	昭和12年（1937）7月5日	愛知県撮影
15	ガラス乾板「上洛殿一之間より上段之間東北側を望む」	1枚	昭和15年（1940）頃	名古屋市撮影
16	『皇太后陛下関西地方行啓愛知県記録』	1冊	昭和13年（1938）発行	愛知県発行
17	明治三十年以降 御駐泊御泊年月日調	1冊	昭和前期	宮内省作成
18	富士萬衛書簡 岡島栄七宛	1幅	明治35年（1902）	松永直幸氏寄贈
19	名古屋市長文案 文部大臣宛	一括		名古屋市作成
20	御沙汰書	1通	昭和5年	宮内省発行
21	昭和五年度 名古屋城二関スル綴	1綴	昭和5年度	名古屋市作成
22	絵葉書「西方より見たる名古屋城」	1枚	昭和8年2月11日消印	加藤良明氏寄贈
23	名古屋城総図	1枚	昭和前期	名古屋市作成
24	金鯱 残骸	一括	江戸時代	旧国宝
25	天守金具	一括	江戸時代	旧国宝
26	萌黄木瓜紋鎧下着	1領	江戸時代初期	山崎文治氏寄贈
27	名古屋温故會絵葉書 織田信長着用胴服	1枚	昭和前期	個人蔵
28	軍旗	1流	江戸時代初期	山崎文治氏寄贈
29	修理使用材料	株式会社松鶴堂・勝山織物株式会社絹織製作研究所		令和3～5年度制作
30	名古屋城本丸御殿天井画 山水図	1面	寛永11年（1634）	重要文化財
31	名古屋城本丸御殿天井画 木部模型	株式会社松鶴堂・楽浪文化財修理所		令和4年度制作 文化庁補助事業
32	名古屋城本丸御殿天井画 修理模型	株式会社松鶴堂		令和5年度制作 文化庁補助事業
33	名古屋城本丸御殿天井画 天井画修理材料	株式会社松鶴堂		令和6年度制作 文化庁補助事業

◆出品作品は、予告なく変更することがあります。 ◆特記のないかぎり、名古屋城総合事務所蔵

2 西の丸御蔵城宝館 情報ルーム

(1) 発掘された名古屋城焼損金具展

展示概要

会期 令和6年(2024)4月26日(金)～10月15日(火)

展示資料 8点

展示趣旨 令和5年(2023)3月に名古屋城調査研究センターが刊行した『御深井丸・小天守西側発掘調査報告書』の成果を広く周知するため、発掘調査で出土した遺物を展示した。同調査では太平洋戦争時の戦災遺物廃棄土坑から、戦時中に天守から焼け落ちた金具等が多数出土し、学術的価値が高いことから優品を中心に展示した。

展示資料の一部には「魚々子」、鍍金等様々な装飾が施され、江戸期の技法をよく伝えることから、これらの技法をパネルで解説するとともに、展示ケース内にルーペ台等を設置し来館者が観察できるような展示を心掛けた。

展示資料

戦災遺物	1点	江戸時代	名古屋城調査研究センター蔵
包み金具	2点	江戸時代	名古屋城調査研究センター蔵
飾り金具	3点	江戸時代	名古屋城調査研究センター蔵
釘隠し	2点	江戸時代	名古屋城調査研究センター蔵

展示風景



展示ポスター



(2) 名古屋城のタタキ（三和土・敲き）展

展示概要

会期 令和 6 年(2024)12 月 18 日(水)～令和 7 年(2025)5 月 22 日(木)

展示資料 3 点

展示趣旨 名古屋城から出土したタタキ及び現存するタタキ遺構に関する展示を行った。また、令和 6 年(2024)度名古屋城水堀での発掘調査のうち安全上の理由により現地説明会が開催できなかった辰之口調査区の速報展も兼ねている。辰之口調査区は調査区一帯にタタキ製の護岸遺構が確認できている。

パネルはタタキの概要、現在までに名古屋城から出土したタタキ遺構の位置を平面図、令和 6 年(2024)に名古屋城の水堀で実施した発掘調査の速報の 3 枚を展示した。

展示資料は遺物として取り上げることができたタタキの中で保存状態が極めて良好なタタキを 3 点抽出して展示した。1 点は余芳推定位置から出土し、余芳手水の海の一部と推定した。もう 1 点は北池から出土した擬木である。水堀から出土したタタキは近代の治水施設で、近代化された辰之口水道の一部である。

展示資料

名古屋城二之丸出土 タタキ片 2 点 名古屋城調査研究センター蔵

名古屋城水堀出土 タタキ片 1 点 名古屋城調査研究センター蔵

展示風景



(3) 八雲木彫熊展示

展示概要

会期 令和 6 年(2024)1 月 4 日(木)～令和 7 年 3 月 31 日(継続中)

展示資料 2 点

展示解説

木彫り熊と八雲町・尾張徳川家

尾張徳川家 17 代慶勝(1832-84)は、明治維新後に窮乏する旧藩士の救済のため、明治 11 年(1878)に北海道遊楽部の無償払い下げを受け、旧藩士たちを入植させて開拓を行わせた。「八雲」の名は、平和な理想郷を造ることを願い、素戔鳴尊の歌を引用して慶勝が命名した。過酷な環境の中、開拓は困難を極めたが、大正年間(1912-26)頃から国内でいち早く酪農を始め、生活が安定するようになった。

尾張徳川家 19 代義親(1886-1976)は、大正 12 年(1923)にスイスの木彫り熊を持ち帰り、八雲町での余業として同様の作品を作ることを奨励する。各地の品評会で八雲町の木彫り熊が高い評価を受けたことで、昭和初期には北海道を代表する産業にまで発展した。

木彫り熊(親子熊の内、子熊)

引間木歩作 平成 7 年・9 年(1995 年・1997 年) 北海道八雲町役場寄贈

八雲町より名古屋市へ寄贈された引間木歩(本名・二郎 1924-2012)作の木彫り熊である。平成 7 年(1995)と同 9 年(1997)にそれぞれ木彫り親子熊が、同 8 年(1996)に木彫り鯨が八雲町より寄贈された。いずれも引間木歩作である。平成 7 年(1995)寄贈の子熊は、引間が「カット彫り」と自ら命名した面彫りの熊である。同 9 年(1997)寄贈の熊は、名古屋城二之丸で立ち枯れた樹齢 100 年ほどのクロガネモチを用いて、名古屋市の依頼により制作された。

展示風景



(4) 加賀孝一郎画油絵展示

展示概要

会期 令和 6 年(2024)3 月 1 日(木)～令和 7 年 3 月 31 日(継続中)

展示資料 1 点

展示解説

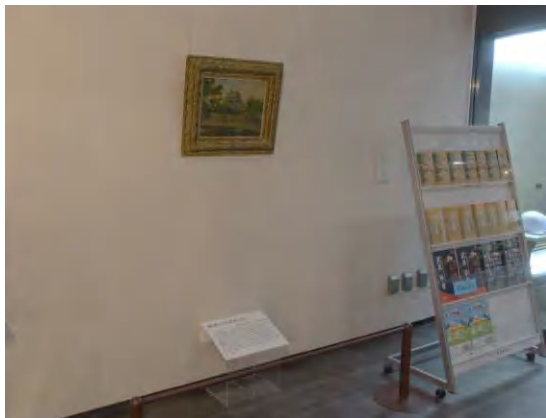
梅雨晴れの名古屋城之写生

加賀孝一郎画 昭和 19 年(1944)6 月 水野勲氏寄贈

名古屋城西側の堀越しに空襲で焼失する前の天守を描く。寄贈者の父が取得した油絵で、画面左下に作者のサイン、背面には作者による画題と制作年月の書き込みがある。

作者の加賀孝一郎は、明治 32 年(1899)、岐阜県海津町(現・海津市)の生まれ。名古屋市で鈴木不知に学んだあと上京し、岸田劉生に師事した。帰名後は文展への入選を果たし、春陽会会員となって作品発表を行った。名古屋市から犬山市に転居した翌年、昭和 63 年(1988)に 89 歳で死去。劉生に学んだ対象の存在に迫る写実的な表現を持ち味とし、この地域における洋画の写実表現を代表する作家のひとりである。国立国際美術館・愛知県美術館・名古屋市美術館などが作品を収蔵する。この作品は、作り込むことなく、戸外での写生を生かした表現となっている。

展示風景



IV 教育普及

1 刊行物

(1) 国秘録 御天守御修復留 [名古屋城調査研究報告 11 名古屋城史料叢書 3]

名古屋城調査研究センターにおける文献調査の成果報告および名古屋城の歴史的な調査研究の一助とするため、名古屋城史料叢書を刊行した。今年度は、徳川林政史研究所所蔵『国秘録 御天守御修復留』を翻刻して掲載した(令和7年3月発行)。

(2) 十七世紀の名古屋城－二之丸のすがたをさぐる－ [名古屋城調査研究報告 12 資料調査研究報告書 2]

令和6年(2024)11月10日(日)に開催されたシンポジウム「十七世紀の名古屋城－二之丸のすがたをさぐる－」の成果を報告書として刊行した(令和7年3月発行)。

(3) 特別史跡名古屋城跡 本丸搦手馬出発掘調査報告書－境門地点の調査－ [名古屋城調査研究報告 13 埋蔵文化財調査報告書 8]

令和4年(2022)8月～9月に実施した本丸搦手馬出境界門地点の発掘調査報告書を刊行した(令和7年3月発行)。

(4) 特別史跡名古屋城跡 本丸表二之門発掘調査報告書－雁木復元整備検討に係る調査(第3次調査)－ [名古屋城調査研究報告 14 埋蔵文化財調査報告書 9]

令和5年(2023)度本丸表二之門附属土塀背面で実施した発掘調査、令和6年(2024)度実施した雁木復元検討調査の成果について報告した(令和7年3月発行)。

(5) 特別史跡名古屋城跡 天守台石垣調査報告書 [名古屋城調査研究報告 15]

平成29年(2017)度より実施している天守台石垣の調査成果を報告した。

(6) 特別展「名古屋城と相応寺－家康を愛した女性 相応院の眠る寺」リーフレット

A4 オールカラー8頁 執筆 朝日美砂子 令和6年12月20日発行

(7) 名古屋城石垣ガイドブック

令和7年(2025)3月15日に開催した「名古屋城石垣特別ガイドツアー&石垣拓本体験」イベントに際して、名古屋城の石垣に関する最新の調査研究成果を分かりやすく解説した配布資料を作成した。この配布資料から一部の写真や図面などを差し替えたものを、「名古屋城石垣ガイドブック」として発行した(令和7年3月発行)。

名古屋城の石垣について、4つのテーマ「石垣をつくる」「石垣の構造」「石垣の特徴」「石垣の修復」から着目し、石垣の様々な見どころや本丸搦手馬出石垣の修復事業などについて、多くのイラストや写真でやさしく解説した。

(8) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第6号

名古屋城調査研究における研究成果を公開するため、『名古屋城調査研究センター研究紀要 第6号』を刊行した(令和7年3月発行)。

目次

名古屋城 天守金鯢 過去と今	朝日美砂子
宝暦期名古屋城天守から山々の方角を測量した記録の精度について	種田祐司
大高城と松平元康兵糧武功の検証	原史彦
大名家文書からみた名古屋城公儀普請一助役大名の動員過程について― 〈研究ノート〉名古屋城関連庭園遺跡の礎敷の検討方法	堀内亮介 高橋圭也・永井邦仁
名勝名古屋城二之丸庭園における擬岩・擬石の年代・分類・構造の整理	高橋圭也
西尾市前島石丁場跡調査報告	大村陸・浅岡優・高田祐一 ・田口一男・二橋慶太郎・ 井口喜景・小山圭嗣
城郭石垣の記録・管理における技術革新：石垣 BIM の開発と実践的応用 〈資料紹介〉名古屋城内における発掘調査出土の金薄板片について	高田祐一・大村陸・林瑞樹 村上慶介・大西健吾
名古屋城金鯢関連資料の基礎的調査	酒井将史

(9) 名古屋城調査研究センター年報 令和5年度

令和5年(2023)度の名古屋城調査研究センターの活動実績を示す年報を刊行した(令和7年3月発行)。

(10) 名古屋城調査研究センターだより 第6号

名古屋城調査研究センターの活動を広く市民に周知するためのリーフレットとして、『名古屋城調査研究センターだより 第6号』を刊行した(令和7年3月発行)。

目次

名古屋城発掘調査開始 50 周年	高橋圭也
尾張藩主の名古屋城視察「御巡覧留・御巡覧留続篇」を読む	堀内亮介
東海地方の瓦について	濱崎健

(11) 特別史跡名古屋城跡 西之丸の米蔵

名古屋城西之丸の米蔵周辺の整備が完了したことを受けて、調査成果の概要等を周知するためのリーフレットとして、『特別史跡名古屋城跡 西之丸の米蔵』を刊行した(令和 7 年 3 月発行)。

2 シンポジウム・イベント

(1) 名古屋城南波渡場発掘調査現地説明会

日時 令和 6 年(2024)8 月 17 日(土)

参加人数 101 人

概要

発掘調査の成果(遺構・遺物)を市民の皆様にご覧いただき説明会を開催した。なお、現地説明会の資料は名古屋城調査研究センターホームページ(<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/center/>)にて公開している。

安全のため事前申込制とし、申込者多数のため参加者の抽選を行った。参加者は全員ヘルメット着用とし、現地説明会はツアー形式とした。南波渡場と推定される石列と新たに確認できた 2 石の石列を中心に解説を行った。また、発掘調査区は普段は入ることができない堀底に位置しているため、堀底から見上げた石垣の解説も行った。

現地説明会風景



(2) 名古屋城石垣特別ガイドツアー & 石垣拓本体験

日時 令和7年(2025)3月15日(土) ①午前9時30分～正午、②午後1時30分～4時

場所 名古屋城 城内(御深井丸広場集合)

参加人数 100人(各回50人)

概要

名古屋城調査研究センター学芸員による石垣特別ガイドツアーと、石垣に打たれた刻印の模様を和紙に写し取る拓本体験の2つを組み合わせたイベントを開催した。

石垣特別ガイドツアーでは、名古屋城の石垣を分かりやすく解説した配布資料(後日、改訂したものを「名古屋城石垣ガイドブック」として発行)をもとに、御深井丸広場から大天守北側を通って不明門に入り、本丸御殿西側の非公開エリア、本丸表二之門、西之丸と巡って御深井丸広場に戻ってくるルートでツアーを行った。普段何気なく通り過ぎてしまう石垣にも、石材や矢穴、刻印、石積み技術といった見どころがあり、調査研究が進められていることを解説し、普段入ることができない本丸御殿西側では小天守石垣の刻銘や至近距離での石垣の観察を行った。

石垣拓本体験では、塩蔵構の塩蔵門周辺を体験箇所として、学芸員による拓本の方法を解説した後、各々で好きな刻印を選んでもらい拓本体験を行った。また、午後の回では雨天となったため急遽内容を変更し、石垣の刻印を探そう!のプログラムとした。塩蔵門周辺にある刻印6個の写真を印刷した資料を配布し、様々な刻印の中で実物がどこにあるのかを探索するワークショップを行った。

開会挨拶の様子



石垣特別ガイドツアーの様子



(3) 名古屋城調査研究センターシンポジウム4 十七世紀の名古屋城—二之丸のすがたをさぐる—

開催日 令和6年(2024)11月10日(日)

開催場所 イーブルなごや ホール

主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター

参加人数 192 人

概要

未だ基礎的事実の整理に課題のある 17 世紀の名古屋城について、講演・報告・議論を行った。名古屋城調査研究センターからは今和泉大、堀内亮介が成果報告を行った。

プログラム・報告者

記念講演「類例なき特別な二の丸をもった名古屋城」	三浦正幸氏(広島大学名誉教授)
成果報告①「十七世紀における二之丸の変遷」	今和泉大(名古屋城調査研究センター学芸員)
成果報告②「十七世紀の二之丸御庭造営と改修」	堀内亮介(名古屋城調査研究センター学芸員)
特別報告「絵画史からみた「中御座之間北御庭惣絵」	並木誠士氏(京都工芸繊維大学特定教授・美術工芸資料館館長)

パネルディスカッション

登壇者 3 名・進行 今和泉大

3 講師派遣

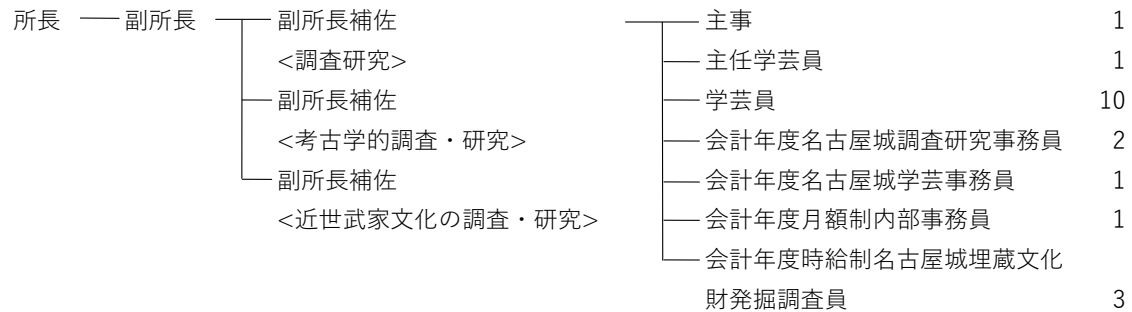
年月日	題目	主催者	講師
令和 6 年 6 月 10 日	陸軍・皇室と名古屋城	名古屋伝統産業協会	朝日美砂子
令和 6 年 9 月 7 日	東浜御殿について	公益財団法人名古屋まちづくり公社	原史彦
令和 6 年 10 月 12 日	元禄三河国境縁絵図と 元禄日本図	安城市歴史博物館	種田祐司
令和 6 年 10 月 26 日	名古屋城築城と家康・義直	名古屋市中区役所	原史彦
令和 6 年 10 月 31 日	名古屋城の水堀はどうやって造られた？	やっとかめ文化祭実行委員会	種田祐司
令和 6 年 11 月 6 日	東浜御殿と徳川家	熱田湊まちづくり協議会	原史彦
令和 6 年 11 月 6 日	名古屋城天守・櫓・御殿の魅力	名古屋市教育委員会	原史彦
令和 6 年 11 月 16 日	地下と街中に残る名古屋城の痕跡	春日井市教育委員会	大村陸
令和 6 年 12 月 4 日	名古屋城築城の歴史	ASC 歴史文化悠遊会	原史彦
令和 6 年 12 月 11 日	徳川家康公「しかみ像」の新説について	全国家康公ネットワーク	原史彦
令和 7 年 3 月 11 日	名古屋城天守から山々の方角を測る	名古屋城北ロータリークラブ	種田祐司

※当センター職員を職務の一環として派遣したもののみ掲載(名古屋城総合事務所(名古屋城調査研究センター含む)が主催又は主催として含むものを除く)。

V 組織と職員

[令和7年(2025)3月31日現在]

1 組織



2 職員

副所長	瀬川 貴文(6.4.1～)
副所長補佐<調査研究>	三矢 知徳
副所長補佐<考古学的調査・研究>	酒井 将史
副所長補佐<近世武家文化の調査・研究>	原 史彦
主事	渡部 綾香(6.4.1～)
主任学芸員	角田 美奈子
学芸員	朝日 美砂子(～7.3.31)
	岡 千明(6.4.1～6.12.17)
	西本 茉由
	堀内 亮介
	今和泉 大
	二橋 慶太郎
	濱崎 健(～7.3.31)
	高橋 圭也
	大村 陸
	村上 慶介
会計年度名古屋城調査研究事務員	種田 裕司(～7.3.31)
	大西 健吾
会計年度名古屋城学芸事務員	小川 春子
会計年度月額制内部事務員	永田 嘉代(6.8.1～)
会計年度時給制名古屋城埋蔵文化財発掘調査員	郷 由佳
	森 朋子
	森 秀人(6.4.1～)

VI 参考資料

1 名古屋城の活動

(1) 催事等

会期	事項
令和 6 年(2024)3 月 2 日(土)～5 月 7 日(火)	西の丸御蔵城宝館特別展 「守山の御寺 大森寺の宝物」
令和 6 年(2024)5 月 14 日(火)～7 月 15 日(月・祝)	西の丸御蔵城宝館企画展 「名古屋城本丸御殿障壁画 と 復元模写」
令和 6 年(2024)7 月 20 日(土)～9 月 9 日(月)	名古屋城振興協会所蔵品展「武具・甲冑」
令和 6 年(2024)8 月 10 日(土)～8 月 18 日(日)	名古屋城夏まつり
令和 6 年(2024)8 月 10 日(土)～8 月 18 日(日)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和 6 年(2024)9 月 14 日(土)～10 月 14 日(月・祝)	西の丸御蔵城宝館企画展「文化財を伝える」
令和 6 年(2024)10 月 5 日(土)～11 月 24 日(日)	名古屋城秋まつり
令和 6 年(2024)10 月 27 日(日)～11 月 21 日(木)	第 77 回 名古屋城菊花大会
令和 6 年(2024)10 月 27 日(日)～11 月 4 日(月)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和 6 年(2024)11 月 12 日(火)～11 月 16 日(土)	茶席特別公開
令和 6 年(2024)10 月 19 日(土)～12 月 15 日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展 「名古屋城と名古屋まつり」
令和 6 年(2024)12 月 21 日(土)～ 令和 7 年(2025)2 月 24 日(月・祝)	西の丸御蔵城宝館特別展「名古屋城と相応寺」
令和 7 年(2025)1 月 1 日(水・祝)～1 月 5 日(日)	名古屋城冬まつり
令和 7 年(2025)1 月 2 日(木)～1 月 8 日(水)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和 7 年(2025)3 月 2 日(土)～3 月 10 日(月)	第 51 回名古屋城つばき展
令和 7 年(2025)3 月 7 日(金)～4 月 20 日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展「名品でたどる名古屋 城史 創建・戦災・そして明日」
令和 7 年(2025)3 月 20 日(木・祝)～5 月 6 日(火)	名古屋城春まつり
令和 7 年(2025)3 月 22 日(土)～3 月 30 日(日)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開

(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

年	月日	会議名称※
令和 6 年(2024)	5 月 10 日	第 37 回 庭園部会
	5 月 31 日	第 60 回 石垣・埋蔵文化財部会
	6 月 10 日	第 60 回 全体整備検討会議
	8 月 5 日	第 61 回 石垣・埋蔵文化財部会
	8 月 7 日	第 61 回 全体整備検討会議
	9 月 2 日	第 38 回 庭園部会
	9 月 17 日	第 62 回 石垣・埋蔵文化財部会
	9 月 18 日	第 35 回 建造物部会
	10 月 11 日	第 62 回 全体整備検討会議
	11 月 19 日	第 63 回 石垣・埋蔵文化財部会
	12 月 13 日	第 63 回 全体整備検討会議
令和 7 年(2025)	1 月 28 日	第 39 回 庭園部会
	1 月 31 日	第 36 回 建造物部会
	2 月 3 日	第 64 回 石垣・埋蔵文化財部会
	3 月 19 日	第 65 回 石垣・埋蔵文化財部会
	3 月 21 日	第 64 回 全体整備検討会議

※各部会の正式名称には部会名称の前に「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」が付されるが、煩雑になるため省略した。同様に全体整備検討会議についても「特別史跡名古屋城跡」を省略した。

2 入場者の推移

(単位：人)

月	令和3年度※1	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4	65,849 (31,621) <5,049>	124,209 (45,277) <19,695>	191,923 (81,472) <41,749>	256,687 (102,322) <25,900>
5	31,777 (17,300) <6,528>	130,851 (54,740) <27,823>	187,188 (77,107) <35,572>	192,642 (93,508) <27,209>
6	14,819 (11,279)	67,029 (40,167) <11,904>	115,079 (65,038) <23,792>	138,723 (82,276) <23,140>
7	41,449 (23,658)	72,716 (46,167) <14,897>	131,591 (68,885) <27,961>	140,484 (82,682) <27,262>
8	58,529 (24,076)	154,226 (68,146) <31,222>	207,415 (81,039) <35,450>	221,587 (93,710) <45,390>
9	27,122 (16,402)	92,460 (52,515) <23,184>	144,269 (75,179) <29,436>	150,412 (81,590) <21,076>
10	56,547 (32,998)	142,262 (72,507) <28,277>	198,262 (88,282) <35,379>	218,928 (94,223) <17,085>
11	105,035 (42,274) <30,610>	154,783 (71,037) <30,610>	194,262 (101,220) <40,069>	202,404 (90,106) <15,518>
12	65,340 (36,713) <14,265>	103,327 (55,320) <18,735>	141,410 (82,284) <22,504>	141,177 (78,351) <9,562>
1	59,678 (30,475) <17,230>	120,645 (63,773) <22,329>	150,613 (86,887) <20,960>	165,233 (102,674) <14,798>
2	37,470 (22,138) <10,382>	113,811 (61,622) <21,663>	155,477 (83,611) <20,552>	154,414 (90,298) <11,648>
3	123,690 (50,791) <23,409>	252,968 (95,185) <31,121>	241,698 (109,229) <27,149>	252,285 (111,165) <18,653>
計	687,305 (339,725) <107,473>	1,529,287 (727,556) <285,602>	2,059,707 (1,000,233) <360,573>	2,234,976 (1,102,905) <257,241>

()内は本丸御殿の入場者数。< >内は西の丸御蔵城宝館の入館者数。

※1 令和3年4月16日から同年6月20日までの間、土日のみ名古屋城開園休止。西の丸御蔵城宝館は令和3年4月16日から5月9日までの間、プレオープン。令和3年11月1日開館。

名古屋城調査研究センター年報6

令和6年度

2025年10月

発行 名古屋市観光文化交流局

名古屋城総合事務所

名古屋城調査研究センター

〒460-0031 名古屋市中区本丸1番1号

TEL (052) 231-2481